南相馬・大悲山幻想異聞

沙門きよはる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
南相馬・大悲山幻想異聞

【Ｎコード】
Ｎ０２８３Ｘ

【作者名】
沙門きよはる

【あらすじ】
これは福島県・南相馬、小高町の大悲山伝説を巡る伝奇＋異世界の物語である。
佐々木一平は母子家庭育ちで、マザコン気味の剣道一筋の武道少年だった。
それが突然の母の事故死を経て、人生が激変する。
大学卒業を控えた四年生の夏、一平は剣道の師に、
天才科学者・牧野修也老人のボディガードを依頼された。

牧野博士は阿武隈山脈中に異世界への門（スターゲート）が存在すると語る。
その奇想天外な話は、やがて一平と博士の孫娘ヒロコを巻き込んでいく。

序文・プロローグ（前書き）

これは嘗て東北の楽園と歌われた南相馬地方とその人々へ捧げる慟哭の鎮魂歌である。

古今未曾有の東日本大震災と、壊滅的な津波を被った上に、人災と呼ぶべき原発の猛威に為す術も無く全てを失った南相馬。

失われたのは人や物だけでなく、連綿と伝えられて来た彼の地の貴重で偉大な魂の記憶でもある。

再びかつての福島の光景が見れることを祈って。

序文・プロローグ

［序文］

誰しも、今在る状況や光景に以前、あるいは昔に遭遇した経験が有るという確信に突然襲われる時がある。

既視現象（デジャヴ）と呼ばれる感覚、しかしながら我々は何時それを経験したのか見当もつかず、僅かな不安と共に日常生活に流しさってしまう。

我々はつね日ごろ当たり前のようにデジタルに物事を忘れては新しく記憶する行為を重ねているが、振り返ってみると何一つ確実性が無いのに慄然とする。

現代脳医学による分析では、人間の脳の情報収集能力および収容能力は無限と言えるほどの膨大な許容量を有しているが、脳の視床下部が収集蓄積されている情報を統合整理し直し、とりあえず生活に必要な厳選された極めて限られた情報のみが記憶として引き出されると言うことである。

そこで言えることは経験した事は全て記憶されてはいるが思い出すことのできるのはほんの僅かでしかないという事実であり、ほとんどは潜在記憶にとどまって無意識として存在しているらしいのだ。

ところが脳が適切でないと判断されてしまったはずの記憶が何らかの脳の手違いによって引き出されると、つまり非常識的な世界が間違って顔を見せると、事実の如何を問わずたちまち忘却のかなたに追いやられてしまい、辻褄の合わない夢や幻想として消えていってしまう。

人は創造することなど何一つ無い、ただ思い出すだけと言う。
人は全てを知っている、ただ思い出さないだけとも言う。

早朝五時。常磐線に乗るのは十八年振りである。
乗車前に軽い地震があり、始発である指定車の発車時間が三十分遅れとなった。震源地はこれから向かう福島の太平洋岸とある。

東日本大震災以来、天災人災が各所で頻繁に起きているが、来るべき大天変地異の前兆であろうか？

電光掲示板にニュースが踊っている。

【新たな惑星発見か？しかも、地球の双子星】一平は足を止めた。

【南相馬、復興の力強い槌音。災害原発の跡地が自然力発電所の特別地区として指定】

【日本の領土問題に関する米国の不介入通告に伴う事項。日本政府は近隣諸国による日本領土切り取り分割の平和的対抗策として、近隣諸国に資金援助を倍額に増資を議決した】

暫し、目を奪われていたが、一平は我に返ったように首を振った。

今日日、正体不明の錯綜した情報がごまんと氾濫している。

一平は北アフリカを経て送られてきた紅水晶の勾玉を自らの首に確認すべく服の上から手を当て、大きく息を吐いた。

いわき行きの特急指定座席に座り、微かに霧が靄っている構内を見ていると、フェアリイテールの化石のように眠っていた思い出が鮮やかに蘇ってくる。

（そう、あれは夏の早朝だった）

一話・魂の叫び

常磐線を利用するのは初めてだった。

上野発、早朝六時四十分特急常陸の指定席に腰を据える。

大きく深呼吸をして、徐にショルダーバッグから黄色い油紙に包装されている一冊の古びた分厚い本を取り出した。

包装紙を開く。

【陸奥日高見三郡誌における大悲山伝説と奥州相馬史】と表紙に書かれている。

ページを捲ってみたが、漢文まじりで読み難く興味を引きそうにない。

一平は再び本を包み直し、膝の上に置いて、窓の外をぼんやりと眺めた。

出発時刻まで時間があり、予約している老人とその同伴者は現れる気配もない。

一平にとってこの南相馬の小高行きは、数年間に渡る精神的葛藤の終焉と、新たな避けがたい運命のように思える。

一平は大きく息を吐いた。

（思えば目まぐるしい数日だった）

◆◆◆

日本武道館の全日本学生剣道選手権大会。
試合を待つ一平は、観客の耳を聾さんばかりのざわめきに、居ても立ってもいられない緊張と不安に襲われていた。

すり鉢状に競り上がっている観客席の蒸し暑さに比べて、試合場は別世界のように涼しく、決勝戦の行われる第一試合場は十重二十重に観客に囲まれている。

医学部四回生で、同校クラブマネージャーである時田義明は一平の只ならぬ様子に声をかけた。

「あの症状？」
「カマッキ、参ったぜ。妙な声まで聴こえる……」

（ダールラハアマ・ムング！ダールラハアマ・ムング！）

義明は一平のアパート隣人だ。
気のおけない友人でもあり、女っぽい言葉使いと仕草から、一平は義明のことをカマッキと呼んでいる。

「集中力が高まっているの。だから、全て受け入れるのよ！」

一平が着面し立ち上がると、義明は白襷を胴紐に結び、背を叩いて活を入れた。
「お前は最強よ！絶対勝つわ！」
「ただ今より全日本学生剣道選手権男子個人の部、決勝戦を行います」
アナウンスが、割れ鐘のように響く。
腹に沁みるように大太鼓が鳴った。
「赤、戸田隼人君、東葉大！」　「白、佐々木一平君、帝応大！」
呼び上げに応じ、一平は両足で力一杯に床を踏み鳴らすと、大音声の雄叫びを上げた。
今日の一平は、団体戦も個人戦も圧倒的強さで一本も取られること無く、オール二本勝ち。全て一分以内に勝負を決めている。
その上、幸先よく目の前で一平の出身道場、三島武錬館の後輩、駒池大の本山百合が女子個人戦の優勝を決めていた。
意気は揚がっている。
対する戸田選手は一昨年、昨年度の優勝者で、今年度も優勝候補筆頭と目されていた。
しかも此処のところ、神憑りとも言える強さで、全日本チャンピオンである警視庁の宮原雄一さえも、都大会とはいえ、一度ならず二度も撃破した当に向かうところ敵無しの学生王者だ。
選ばれし剣士は互いに中央に進み、蹲踞して剣を合せた。

二人が戦うのはこれが二度目だった。
二年前の大学対抗戦で対戦し、一平は簡単に敗れている。
試合開始早々、あっという間も無く出頭のコテ一発を決められ、そのままずるずると押し切られたのだ。
思い出したくも無い試合。

それから二年、格好の舞台でのリヴェンジ戦である。

対する戸田は、一平の剣道を剣技のみならず些細な癖に至るまで熟知していた。

佐々木一平。長身にして容姿端麗、一際目立つ試合ぶりは、大学剣道デビュー早々から女子部員にファンクラブ結成の動きがあるほどだった。
当初、実力派自任の戸田としては、ビジュアル系美少年剣士云々等にはさほどの関心もなかった。

それが、三年前の予選で偶々一平の試合を見た時、少なからず衝撃を受ける。
貫くような気合声、力強さ、鮮やかな身のこなしと切れ味鋭い剣さばき。
一足一刀に至るまで、強靭でしなやかな体形の美しさと相まって、剣の舞でも観劇しているようにさえ思えた。

そも、剣道はちょっとした不思議世界である。
この世界に入り込む者は誰もが単なるスポーツとは思えなくなる。
面小手を身に纏った瞬間、鎧甲冑を身につけたように時を超えた非日常的世界に変異し、戦う剣士となってしまうのだ。

そして、まさしく一平の剣は彼の憧れの仮想世界を体現しており、

一刀に断ち割るような凛々しさは、武士の戦いは斯くありきとの想像を掻き立たせる。
何時の間にか、武道フリークの戸田にとって、大会の度に一平の剣道を鑑賞するのが密かな楽しみとなっていた。

やがて、強者同士の必然として、戸田と一平は対戦することとなるのだが、
ファンである無しはともかく、戸田は一平の殺るか殺られるかのオールドファッション流に対し、ポイントの取り合いである現代スポーツ剣道で後れを取るとは万が一にも思えなかった。

実際、二年前の対戦では容易に一蹴する。
一平の戦いは強烈な気合と強い剣さばき等で圧倒し、豪快に決めるのを常としていた。
しかし、戸田はそんな一平の試合様式に端から付き合う気はさらさら無かった。
試合が始まるや、ズカズカと間合いに入り込み、一平の起こりをチョコンと抑えコテを決め、後はへばり付くコテコテの守りの時間切れに持ち込んだのだ。

今回の決勝戦の相手が一平と決まった時、戸田は選手権二連覇を確信する。

（一平が得意の飛び込みメンを誘い、その出端をカウンター面に決める！）

試合開始！

一平にツーンと鼻から額に抜ける痛みが走る。
（奴は出頭のメンを狙っているぞ！出頭の面！）と、旋律を伴っ

た内なる声が宣託のように耳を貫いた。
声は明確に有無を言わさぬ強さで繰り返される。

戸田の剣は相手の喉元に向かって剣先を置く正眼の構えに比べ、低く水平に構え、体を前傾させて頭を右へ傾ける変則姿勢。
剣先は一平の胴体へ微動だにしない。

一平の剣先は鶺鴒の尾のように、あるいは啄ばむかに踊る。

戸田は泰然として動かず、一平は一旦間合いを外して攻撃圏外に息を抜いた。

戸田は徐に足の裏で距離を刻むように進み始めた。その澱みない前進は、今にも先制攻撃を仕掛けるかに見える。
声が頭の中に閃く。（奴の狙いは、出頭のメン！）

一平は後退を余儀なくされたが、そのまま劣勢に陥る前に踏み止まった。
気合一閃！
踏み出す一平に、満を持した戸田は出頭に狙い撃つ！
してやったりと一平は攻撃を手元に差し込み捌き、後方に跳びざまのメン！

だが、何と言う戸田の俊敏さ！　辛うじて面金を軽打する。

戸田の追撃と迎え打つ一平！
二人は壮烈な体当たりから、弾ける引き際に脇腹と腰骨を互いに骨がきしむほど激しく叩き合った。

間合いが切れるや、戸田は脇腹の痺れるような鈍痛と共に冷や汗

がどっと吹き出た。
（サムライが俺を引っ掛けやがった！）
一平は注文に嵌った獲物を獲り逃した剣技の至らなさに歯噛みした。
中央の開始線に戻ると主審は両者に一人ずつ「場外反則一回！」と、告げる。
二人とも場外に飛び出ていたのだ。
戸田は一平の次手を読む。
一平の得意技の遠間からの跳びこみメンだ。
一平は床を踏み、防御の反応を試みた。戸田は動かない。
前回の戸田戦では、体を低くして剣を斜めにしてメン、右コテ、右ドウを覆う戸田の守りに、一平は為す術も無く技を封じられてしまっていた。
近代剣道は基本的に正面の面と右小手右胴を打突するのを常とし、そのように慣らされているので、そう守られると大抵は攻め手に窮してしまう。
戸田はそれを亀隠しと言って、それによって動揺する相手の隙を衝いたり、無理な攻撃を誘うのを常套手段としていた。
一平はフェイントから抉るような片手突き！
戸田は首を捻り、防具の隙間を突き抜けた剣先に喉の皮一枚鋭く削られながら前進。乗じてメンを窺うが、踏み止まった。
戸田は一平の攻めを待つ。
一平は得意の跳び込みメンを決意するが、刹那に再び内なる声が

入った。
（奴は跳び込みを待っている！）
面金を透して見える戸田の目に、一平はぞっとした。
それは獲物を窺う蛇の目であり、微かな薄笑いは全てを読んでいる顔だ。
怒りが込み上がった。
かつて、一平は戸田のように体を低くして竹刀を斜に構えて間合いに入り込み、混乱に乗じるのを得意とした時期があった。
実際、面白いようにポイントが取れ、試合に勝つ秘訣を会得したかのように思っていた。
しかしながら過日、師の美田村との稽古においてこの亀戦法を行ったとき、「醜し！」の怒声と共に上段から空いている左胴をあばら骨がへし折れるのではないかと思うほど強く叩かれ、構える度に「醜し！」と言いながら左のわき腹や太腿まで幾度となく痛打された。
「真剣なら斬られとる」と、師は剣の道は単なるスポーツにあらず生死を賭ける武士の訓練の場であると少年一平を戒める。
以来今まで、一平は単に勝つためではなく武士たらんとする修練として励んできた。
前傾姿勢で、戸田は罠にかかる獲物を待っている。
一平は音を立てて床をスタンプし、突如、構えを中段から左上段に切り替えた。
（上段！）
戸田は弾かれるように後退し、上段からの左片手メンに備えて一

平の左コテに剣先を合わせ、圧力を撥ね返す。
戸田をライン際までに追い込むや、一平は大豪声の跳び込み！
戸田は体を沈め、蹲るような亀隠し。
が、一平の剣は正面突破と見せて右に反転し、亀守りのため唯一開いている左の逆胴を斜め上から「醜し！」の気合と共に渾身の力を込めて切り落としたのだ。

電光のような一撃！
胴を打ち抜く打撃音は会場一杯に響き渡った。

（場外に注意！）鋭い内音の警告が耳を貫いたが、一平は会心の手ごたえに一本を確信して場外まで走り抜けていた。

「ドオー！胴なり！」鬱憤を晴らす雄叫び！

してやったり、見得を切るかに颯爽と振り返った時、一平は目を疑った。
一旦、一平に上げた主審と一人の副審の一本を表す白旗が一転して、何故か取り消しを示す動作と共に無効を告げて取り下げられている。

場内は一瞬水を打った静けさから、蜂の巣を突いた騒音に包まれた。

主審は二人を開始線に戻すと、会場の騒音止まない中、副審の二人を呼び三者で何やら協議を始める。
長い話し合いの後、主審が一平に向かって、
「胴は一本と認められなかったので、場外反則を取る！」
そして、一息置いてから、
「白は場外反則二回につき赤一本！」と逆に戸田にアドバンテー

ジの一本が宣告されたのだ。

一平は再び左上段に構えた。

戸田は一平の次なる狙いを、追い込んでの片手メンと見たが、待つ気は当に失せている。

上段の左小手を撃つと見せ、構えが降りるのを想定し、メンを急襲！

一平は剣ごと断ち切るが如く渾身の一刀を打ち降ろす！

上段真っ向の強烈な一撃は、戸田の竹刀を叩き落し、更に首を捻ってメン打ちを辛うじて避けたその面布団を袈裟切りに打ち据えた。

激痛に耐えつつ、戸田は素手で一平の懐に飛び込む！

必死のタックルに、一平は強烈にぶちかます。

短身の戸田は床の上を一回転して弾き飛ばされた。

見下すように立ちはだかった一平は、徐にコートに転がっている竹刀を拾い上げ、倒れているチャンピオンに向かってまるで汚物でも捨てるように放り投げた。

その傲岸な態度に、怒号と叫び声が飛び交い、会場は再び騒然となった。

開始線に戻った一平に、主審は

「無礼で品性に欠く行為を再び取ったなら、直ちに反則負けとする！」と、言い渡した。

無敗の王者は屈辱に身を震わし、目が血走り眦が跳ね上がっていた。

（こな糞！やられっ放しで居られっかい！）

残り少ない試合時間は両者の全身全霊、死力を尽くした目まぐるしくも途切れない打ち合いに終始する。

それはまさに気迫と気迫の凄まじい攻めぎ合いだった。

結局、二人の戦いは戸田の場外反則二回における一本勝ちのまま時間切れとなる。

一話・魂の叫び（後書き）

改稿。何か気になったことがあればお願いします

二話

表彰式が終わった後、一平は低く張りのあるバリトンで「佐々木君！」と呼び止められた。
戸田隼人が笑みを浮かべ、手を差し出している。
一平は自然にその手を握り優勝者を称えた。
戸田は首を振り「否、今日は俺の完敗っす」と、応えた。

二人は自然に歩きながら話す。
「あの逆胴には参ったぜ。胴体を叩き切られだって感じだ」
「でも……、一本にはなんなかった」
「……何で一本になんなかったんだべ？」戸田は首を傾げている。
一平は苦笑した。「そりゃ、僕の方が聞きたい」

戸田は屈託ない。
「又、やりたいっすね。それまで、このカップは預かりってごと」

一平は気さくで磊落なチャンピオンに好感を持った。
「今度は卒業してから、全日本選手権で」

戸田は肩を竦めた。
「ところが、俺には日本選手権は無理なんよ。……昇段試験をサボって全然受けてないがら、段位が高校生の時のままなんだ。
日本選手権って、五段以上で無いと出場資格が得られない規約に変わったんでしょ」

「でも、戸田君ぐらいの実績があれば、その辺は……。因みに何段なの？」
「初段っす」

一平は絶句した。毎年昇段したとして四年はかかる。
悪戯っぽい眼差しで戸田が「だべ？」と言い、「段に興味が無かったのが祟っちゃった」と、笑った。

「無敵の王者が日本一に挑めないなんて」
「君には言われだくねえって。今日はマジに完敗。パワーもスピードも何もかも、真剣なら二回以上は斬られてる」

一平は歩みを緩めて戸田を見た。「戸田君は僕の師匠みたいだ」

「美田村先生に？」
「え！師の美田村を知ってるの？」
「高校生の時、何度か福島の富岡の道場に先生が来訪されて稽古をつけて頂いたんです。少々天狗になっていだ俺は先生にボコボコにされちゃった。ありゃあ、ゴッツ怖がったぜ」
「今でも十分怖いよ」一平は苦笑した。

「間近に見ると、君は流石に男前だ。
女子部の間で佐々木一平ファンクラブがあるらしいげど、……」
「君こそ戸田剣道ファンクラブがあるって聞いた」
「ズンドウクラブなら分かるけど。ビジュアル的に無理だべ」
「何っすか、そのズンドコって言うのは？」
「ズンドコじゃなぐて寸胴。ガッチリ胴長短足って意味」

二人は和気藹々、知己のように話しながら、控え室に向かってい

る。

「富岡って福島の何処にあるんですか？」

「浜通り」

「じゃあ、南相馬の大悲山道場って知ってる？」

吃驚したように戸田は目を見開いた。

「知ってるも知らないも、俺の先生の師の鈴木七郎大先生の道場だ。富岡から直ぐの町で、頻繁に出稽古に行っていた所っす。今でも帰ると、出向いて稽古をさせてもらうげど・・？」

「いや、三日後から、ある人のお供で、その大悲山に暫くの間滞在しなくちゃならない羽目になったんですよ」

戸田は、暫し考えてから言った。

「んじゃあ……俺も行きますよ。佐々木君とは一度一緒に稽古をしてみたがったし……」

「そりゃ、願ってもない。戸田君との申しあいは逃せない」

「ともあれ、君と大悲山道場で会うのは楽しみだ。……ほんじゃ、美田村先生に宜しぐ」

学生選手権者の戸田隼人は大悲山での再会を約し、爽やかな笑顔と共に去った。

帝応大指定の控え所に入ると、皆いっせいに拍手で一人一人の選手を迎えて、口々に今日の健闘を称える。

帝応大は男子団体戦三位、男子個人戦準優勝、女子個人戦三位、

団体戦四位入賞と優勝こそ逃したものの近頃にない大健闘であった。

控え所の雑多な人々が行き来する喧騒の中、チーム・マネージャー時田が叫んでいた。

「帝応大！打ち上げ会は七時、新宿北海食本舗二階です。遅れないで来て下ださーい！」

着替えを終えた一平の肩をたたく者が。振り返ると師の美田村義之が微笑んで立っていた。

一平は息を呑んだ。「先生どうして？」

「大会の審判を仰せつかってのう、ずうっと陰ながら試合を見とったよ」

「全然気が付きませんでした」

「今日は素晴らしかった。感動したぞ！百合ちゃんも女子で優勝したし、わしにとっても、三島武錬館にも最高の日だった」

「僕は決勝で負けちゃったけど……」

「冗談はよしこさん。あれはお前の完勝じゃ。鮮やか過ぎる左胴に吃驚らこいて審判がトチ狂ったとしか思えん。主審の大渕君はわしの後輩なんだが、えらく後悔しておったよ」

「品の無い行為と、御叱りを受けました」

「笑わしちゃ遺憾。剣を落とされて地面を這いずり回る方が、よほど品性に欠ける」

美田村は至極真面目な顔で話す。「真剣ならお前は少なく見ても二度は戸田を斬っとる」

辛らつな批評家の師が、むず痒くなるほど一平を褒め上げる。

一平は可笑しさがこみ上げてきた。「戸田君も同じ台詞を表彰式

後に言っていました」

「奴が？どんな時でも負けを認める玉なんかじゃなかったのに」

「高校時代、先生に苛められたって、懐かしそうでした」

「奴は巧くて、その当時からまるで爺のような小狡い剣を使いよったので、前途ある戸田少年のためにもこりゃ遺憾と思いグシャグシャに打ち据えてやったんじゃ」

美田村は得意げに、冗談めいた口調である。

「じゃあ彼の今日在るのは、先生のお陰でもあるんですね」

「あの小狡さは変わっとらんがな」

スポーツ武道嫌いの師は嘆き節の入った調子で言い捨てる。

「情けないことに、此処二年間全く誰も奴を止めれんかった。全日本の宮原ですら簡単に丸め込まれてしまっているんだからな」

「大悲山行きの件を話したら、すごく吃驚していました。彼も道場に来るみたいです」

「そうか！富岡至誠館が大悲山の近くの町で親子道場だからな。彼の師匠である、わしの友人・至誠館の佐藤勉君は大悲山の七郎大先生の愛弟子なんじゃ」

それから、師は徐に告げた。

「今回の大悲山行き。本来ならわしが行かなくちゃならんのだが、……。

牧野先生は大恩ある方でな、わしとは親子のような付き合いをさせてもらっとる。無理を承知で宜しく頼む」

「モチ、精一杯頑張らせていただきますが……、

お供をして僕は一体何をすればいいんでしょうか？

牧野先生は遥かに超えていると言うかスケールがデカ過ぎて、僕的には分かり難いのですが」

美田村は腕組みをしながら話し始めた。

「気軽にライオンさん等と呼んどるが、先生はあらゆる国の言語に精通し、科学、歴史、経済、宗教、芸術、そして哲学等に至るまでその博学多彩、博覧強記ぶりは桁違いで、ワールドワイドに知る人ぞ知る天才じゃ。ちっとばっかしプレイボーイ過ぎるところは有るがの」

「プレイボーイ？」

「女にちっとだらしない」

一平はホッと溜息をついた。「共通点が見つかったりして」

「それがだな、今年の夏、突然生まれ育った故郷の山野を昔の記憶に沿って辿ってみると言い出したんじゃ」

「何のためにですか？」

「お迎えの指令がどうたら言っとった。まあセンチメンタル・ジャーニィーみたいなもんかもしれん」

「センチメンタル……？」

「彼の独創的発想は、全て故郷の山野での若き日の特異な体験から来ていると、何かに書いとった。因みに、わしの知り合いのニューエイジかぶれが、あの辺は日本でも有数の霊的ゾーンとか言っとったな」

「霊的ゾーンって？」

「大悲山を始めとして神社仏閣、野や山に至るまで随所に奇妙な言い伝えに彩られてはいるが。ま、ライオンさんと言い、七郎先生と言い、あそこは人間のスケールも多分に弩外れてはおる」

「牧野先生って、今何をしているんですか？」
「一応、京府大の客員教授なんじゃが、本人は自らを魔法使いとか錬金術師などと吹聴しとる」
「魔法使い？錬金術師！」
「神主でもあるらしい」

美田村は目を丸くしている一平に「相当に怪しいじゃろう？」と、同意を求めるのだった。

「それがじゃな、山野歩きについて皆が心配しとるのは、昨年一度散歩中に倒れて救急車で運ばれたことがある」
「待ってください。もし僕のお供と言うのが不慮の事故に備えての救助要員でしたら見当違いっしょ。僕の専攻は歴史ですし、他に取り柄は剣道ぐらいなので、いざとなった時の助けには……」
「お前は、その当てにならん歴史学の何とか遺跡のフィールドワークとかの経験もあるし、野歩きではわしよりよっぽど頼りになるはずじゃ」何時もながら美田村は強引である。

「それと、ちぃっと気になるんじゃが、天才の妄想なのか竜に襲われたとか、言っとる」
「竜……？」
「紙一重の考えることはよく分からん。その辺のところも含めて、よろしく頼む」

一平にとって、美田村は師匠と弟子という上下関係だけでなく、母子家庭であった一平にとって亡き父の幼友達であり無二の親友でもあった美田村は父親にダブらせているところがあった。
子供は娘だけのせいか、美田村もまた一平を息子のように慈しんできた。

「立ち入った質問をしてもよろしいっすか？」
「お前は何時も十分に無遠慮じゃ。ほれ、荷物の整理をしながら」と、道具や荷物着の整理を一平に促した。
「その……先生の受けた大恩ってどのような？」

「十年前死んだわしの親父、お前も知っとる前館長がショックなことに、五十台で不治のアルツハイマーの宣告を受けたんじゃ。その時、親父が若い時分から剣友として親交の深かった大悲山の七郎先生が苦境を見かねて、当時、在野の士であったライオン先生を紹介して下さったんよ。で、さほどボケる事無く。無事往生する事が出来た」
「アルツハイマー病を克服できたという事ですか？」一平は荷物整理の手を止めていた。
「わしは東体大に在学中だったので、そのまま親父がボケて行ったら四百年以上続いた我が武錬館の力信流も潰え果てていたかも知れん」

美田村は、ふと我に帰ったように言葉を締め括った。
「それでじゃ、お前の特急の指定券と、ライオンさんに渡してもらいたい手紙と古本があるので、お前のところの剣道部マネージャー君に頼んでおいたから受け取ってくれ。とにかく、今日は頑張った。わしも鼻が高い」
師は行きかけてから立ち止まり、「お前の面倒を見てくれている、何と言ったかな？絵描きの先生」

「恵子ママですか？」
「そのママさんは……今回の旅行について、何か言ってなかった？」
美田村はいかにも聞き難そうである。

「そう言えば、恵子ママは小学時数年間、大悲山の小高町で暮らした事があるそうです」と、伝えた。
「小高に？」師は首を傾げた。
「恵子ママのお父さんである武原俊英画伯が相馬の小高町生まれで、家系が歴代の藩のお抱え絵師と言うことです。その上、お父さんは七郎先生、牧野先生と幼なじみの仲と言っておりました。それにママ自身も子供の時、七郎先生の歯科医院で治療を受けたことがあるそうですし、牧野先生とも良く遊んで貰ったりしたみたいです」
美田村は唸った。「お前は妙に小高町とか大悲山辺りに縁がある。・・わしの勘ではあの辺りとお前には見えない何かが在るような気がするんじゃが」
「先生の勘は当てにして良いんですか？」
師は笑いだした。
「当てにはならんな」
一平の肩を叩き、「それで、お前に連絡する時はその先生の所でいいのかな？」と、尋ねる。
「はい、相馬に行くまではママのアトリエの方にいますんで」
一平は荷物をそのままにして美田村を武道館の正面口まで見送った。
師は奔放な噂のある、親子ほど年上の女性と一平が付き合っているのを好ましいとは思っていなかったし、半同棲の現況を憂慮しているのは明らかだった。

三話・転機

竹原恵子と最初に出会ったのは三年前になる。

◆◆◆

大学に入学して半年、母一人子一人の家庭生活から離れ、漸く東京の一人生活に慣れてきた矢先、衝撃の通報が故郷の美田村からもたらされた。

最愛の母の死！

その衝撃はあまりに深く、今だにその前後の記憶が飛んだままになっている。

父の亡き後、母の亜紀は国際貿易会社をそのまま引き継ぎ、やがてはＩＴ会社も設立し、辣腕の美人実業家として名を馳せていた。寂しい思いをすることもあったが、一平は奔放にしてダイナミッ

クな母の生き様と、その中での自分に対する深い愛情をしっかりと受けとめていた。

『母は子の為、子は母の為』と、言える支えだったのが、いきなり光の見えない闇の中に放り出されたような空白。

東名高速道を深夜一時に走行中、大型タンクローリーに衝突され、同乗していた専務の須佐野童児と共に即死したらしいと、言うことであった。

らしいと、言うのは衝突の瞬間に車ごと爆発炎上して跡形も無く燃え尽き、遺体の確認が全く不可能で状況確認しかできなかったからである。

須佐野童児（三十三歳）は華奢で小柄な男装の麗人を思わせる女形だった。

彼は出所を殆ど話さなかったせいか謎めいており、母の近い親戚筋と言う触れ込みで子供の時から佐々木家に養子のように引き取られ、別棟の離れに同居していた。

もっぱらの噂では父の無我が何処やらから見つけてきた彼の寵童とも言われていた。

一人っ子の一平にとっては、歳の離れた頭の切れるクールな兄貴と言うか姉といったら良いのか、一言では言い難い不思議な存在である。

とあれ、何かと噂に高い美貌の未亡人と、女形にも拘らず所謂独身男性との深夜の事故であった為に諸々の憶測が飛び交っており、一平は激しいショックと混乱の渦の中で途方に暮れていた。

絶望と恐るべき無限の闇。

葬式や遺産処理、会社の引継ぎ問題等煩雑な事柄がまるで他人事のように通り過ぎて行く。

涙も枯れ果て、指一つ動かすことさえ苦痛な、恐ろしい程の脱力感。

一平は佐々木家別宅にあたる伊豆大仁の通称・立花屋敷と呼ばれる瀟洒な洋館の自室に籠もったままだった。

雄大な狩野川を挟んで、一帯を睥睨するかの巨大一枚岩・城山。その対岸の別荘地立花台に佇む洋館の中、ぽつねんと唯一人、ひたすらに思いつめていた。

襲いくる断続的な死の誘惑と、取り残された索漠たる人生の予感に心が揺れる。

最早、一平は精神的に正常とは言い難かった。繰り返す波のように出現する幻想、夢と現の境が消え失せている。

（脳の芯から鼻に痺れるような疼痛、頭の中に鳴り響く拍動）

パジャマにガウンを引っ掛けたままでダイニングの椅子にもたれてぼんやりしている耳元で突然、弾むような明るい声が響いた。

「朝寝、遅起き身上潰すって言うけれど、全くその類ね」

声の方向を見て、一平はギョッとした。

ボディスーツに、スポーツタオルを引っ掛け、やや汗ばんだ母親・亜紀が立っていた。

「何よ、お化けでも見るような？　何時ものモーニング・エクササイズの上がりじゃない」

鼻歌交じりに「食べなくちゃあ。命の基礎はお食事よう」等と、声をかけてくる。

食卓の上には朝鮮人参等が入っている亜紀スペシャル・スタミナジュース。

それに一平の好きなズッキーニのパスタが湯気を上げていた。

「ガールフレンドぐらい作りなさいよ。侍でもあるまいし、世の中は剣だけじゃないのよ。最近言動がサムライ化石の美田村大先生っぽくなってきたわよ」

一平は訝しがりながら、辺りを見回したが、以前と同様の朝食風景だった。

「専務が迎えに来るわ。ＶＩＰなクライアントに重要なプレゼンテーションがあるの」

「え、……童児さんも？」

母は忙しそうだ。

「明日、大丈夫？誰かさんと約束なんかしてないわよね」

「明日って？」

「やだ、箱根に美田村さんと、御家族を御招待したでしょう？」

四月の連休に箱根に在る佐々木家の山荘で美田村夫妻と、高校生の娘二人と過ごした日を思い出した。

「しっかりしてよう。私にとってタイトなスケジュールの中での休みは貴重なんだから」　母は楽しそうだ。

「一平、また背丈が伸びたんじゃない？お前は隔世遺伝で、お祖父ちゃん似ね」
「……僕が、お祖父ちゃん似？」
「遠い世界に行っちゃった一族の伝説よ。大きくて、六尺優って話だから百九十ぐらいあったらしいわ」
「お祖父ちゃんは広島で受けた原爆の後遺症で……」

亜紀は笑って手を振った。
「違うって。私が言うのは佐々木じゃなくて、私の方の井里家よう。ユメ祖母ちゃんからの伝え聞きだけど、救世主になると言われたぐらいのスーパーな人だったらしいわ。お祖母ちゃんが何時も一平はお祖父ちゃんそっくりだって。それに、パパは胎児被爆の精子衰弱症で、お医者さんから子供ができない体質って言われていたのよ」
「えっ！それって……、その？」
「だから、君は奇跡の存在なんだって」一平の戸惑う様子が可笑しいのか、母は楽しそうに笑った。

母は食後の飲茶を終えると、
「さあてと、出勤の用意をしなくっちゃ。明日からの必要なものはスーツケースに全部入れといて。今日は麻奈子さんたち（管理人夫婦）の来る日だから洗濯物は出しといてよ」と、伸びをしながら部屋に引き上げて行った。

亜紀の甘酸っぱい汗と微かな香水の香りだけが残っていた。
窓辺に射す陽光は萌える新緑を煌かせ、幽かに清新な春の香りと鶯の囀りが耳を擽る。
五感は過不足無く機能しており、全てが現実であることを告げていた。
それはあまりにリアルがゆえ、むしろ、一平は母の死に至る状況

こそが夢の中のように思い始めるのだった。

遠く教会のチャイムの音が聴こえる。
突然、三半規管が異常をきたしたように天井と床がグルグル回りだした。

天窓からの仄かな明り。寝床から密やかに立ち去る気配と懐かしい刻み煙草の匂い。

（これは？）

枕元にはギフトリボンで無造作に結ばれた包みが置かれている。
開くと、夜目にも素晴らしい鹿角の握りのついた黒曜石製の原始ナイフが現れた。
出張から帰った父の土産だ。窓から注ぐ月の光に透かして見回すと、そこは懐かしい屋根裏部屋だった。

何もかもが三歳の幼児の頃そのままであり、お気に入りだったテレビキャラクターの宇宙戦士柄のパジャマを着てベッドの上にいる。
枕元には壊れて使い物にならなくなったはずのゴジラの目覚まし時計が新品そのままに時を刻んでいた。

階下から音楽が聴こえて来る。
部屋を抜け出し、両親の寝室のドアを開くと、咽返る薔薇の香りとシンセサイザーの曲が溢れ出た。

一平は壮絶な光景を目にする。
出窓から煌々と差し込む蒼白い月の光、髪を振り乱して白い肉体

を上気させた全裸の亜紀が、ベッドの上にひざ立ちに喜悦の表情を浮かべ、乳房を揺らし、喘ぎ悶えていた。
そして、亜紀の膝下に従えられて笑みを浮かべて下から奔馬のように突き上げる小柄な青白い裸身は、女化粧を施した童児少年であった。

立ち尽くす一平を後ろからがっしりした手で部屋から引き出す者がいる。
叫びだしそうな一平の口を塞ぎ、自らの口に人差し指を当てて目配せするのは上半身裸の父だった。

一際響き渡る快楽の呻きに寝室を振り返ると、そこには恐ろしい光景が広がっている。
部屋全体に絡み付いてのたうち回る小角と手足のある大小二匹の白大蛇（オロチ）だ。

大蛇たちの快楽の咆哮を後に、一平を抱えたまま父は階段を降りてリビングルームを横切り、庭に続くベランダに抜けた。
平地のはずなのが、眼前に見上げるような絶壁が悠然と聳えており、巨大な洞窟が開いている。
雷鳴が轟き、家中の照明が一斉に燈されるのを見た。
一平を呼ぶ悲鳴にも似た叫びが響いた。

トンネルを奥に向かって、父と子は走る。
二人は広大な空間を飛翔していた。
太陽を思わせる雄大な輝きが前方に忽然と現れ、それは眩いにもかかわらず、心に染み入るように鮮烈であった。
そして、螺旋状に回転する壁一面、無数の煌めきが金粉を振り撒きながら光に向かって吸い込まれていくのが見えた。

白銀の世界、一点の曇りない晴天に輝く陽光はサングラスを透してもなお眩しく、粉雪を巻き上げ雪原を吹く風は身を切るほどに冷たく感じられた。

深雪に橇を曳く、巨体の逞しい筋肉も、その疲労は既に極限に達しており、擦り切れた外套を纏い凍傷に犯された手足を引き摺りつつ、何度も倒れては立ち上がり、立ち上がっては橇を曳きながら目的地に向かって歩み続ける。

鬼気迫る鉄のごとき意志。橇には麻布に包まれた血塗れの死体が雑に括りつけられており、露出している頭部と髪は寒さに凍り付いていた。

氷河に削り取られた断崖の頂に橇を引きずり上げた時、天上に鳴り渡る音楽と共に、途方も無く大きな円形の寺院様物体が麓から頂に悠然と競り上がって来る。

宙に浮かぶ巨船、七色に表面が輝く巨大な鈴。

それは見る見る空を覆い、若者は遮られた陽光の中、宵のような薄明かりに佇んでいた。

「大いなる御恵みあらん！」双手を宙に掲げて若者が叫んだ。

空を覆う底面の正五角形に設置されている巨大な五つの玉の中心から、青い一条の放射光が凍てついた遺体を捉えた。

虹色に包まれた体は緩やかに回転しながら、雄大に輝く飛行体へ吸い込まれて行く。

穏やかで心地よい温もりから一転、騒音と不安な空気、そして、目を刺す眩い光に泣き叫ぶ赤子は素のままに晒されている。
「男の子ですよ」　銀縁の眼鏡をつけた助産婦が出産を告げる。
愛しそうに見守る母親は若き亜紀だった。見上げる亜紀は聖母の如く美しく、包み込むような慈愛を一平は体感していた。

仄かな闇の中、……鈍く青光りした剥き身の山刀を抱いて彫像の如く、白髪の老人は赤々と燃える暖炉の炎に微睡む。
薪のはぜる音、燃える木の香り、ゆり椅子に座った老人は紛れもなく一平その者であり、瞬きもせずに炎の揺らぎの中、果てしない時間に漂う精神は過ぎ去りし人生を繰り返し夢見ていた。

時のない世界。
窓の外は降り積もった雪で一面の銀世界であり、……遠く、狼群の遠吠えが夜を貫く。

一平は恐るべき想念にゾッとする。
（針の止まった掛け時計の下に微睡む老人こそが現実であり、焚き火の炎に映ろう十八歳の自分は老人の夢見る幻影にすぎず、その微睡みから醒める時、空想に蠢く自分は消滅してしまう！）

……晩夏の風の香りと染み入るような蜩の音に目覚める時、ダイニングの窓に富士の霊峰が夕日に映えて幻想のごとく浮かんでいた。
テーブルの上、飲みかけの生ぬるいスープに紛れ込んだ小さな羽虫がその中で微かなもがきを見せている。
「ママは？」一平は自らの声に愕然とした。

庭に続くベランダに彷徨い出ると、絶壁は跡形もなく、離れ家に続く立ち葵の花の小径が夕日に赤く染められていた。

童児が暮らす蔦の這う白いサイデングの離れは、小さなチャペル。
扉を開けて中に入ると、人気の無い床まで白い室内がさらに白いカーテンで仕切られる区切りの見えない空間。
等身大の鏡が四方八方に設えられ、白い靄が漂っているようだった。

虫の羽音と共に、目まぐるしく頭の中を記憶が交差する。

歩むに従い次々と純白の幕が開き、少年は何時の間にか連続する無限の世界に嵌まり込んでいた。
そこには前もなく後ろもなく、横も上下もなく、時間すらない。

気がつくと、一平は病院のベッドに居た。

（天使……？）

微笑む天使は一平を覗き込んでいる。
「お目覚め？」

「此処は天国？」

天使と見紛ったナースは楽しそうにクスクス笑い、

「天国でもないし、地獄でもありません。先生を呼んで来ます」と歩み去った。

一人取り残された一平はベッドで上半身を起こし、事態を見究めようと辺りを見回した。

中年の医師は事務的に検査を済ませ、「美田村先生が先程から待っているよ」と、告げて退室する。

入室してきた師は不安そうな一平と目を合わせると、にっこり微笑んだ。

「大丈夫か？」

師は事態を把握しきっていない一平に、こと此処に至った成り行き（今朝方、管理人夫婦がダイニングの椅子で意識を失っていた一平を見つけて三島市の救急医療病院に搬送したことや、通報により急遽美田村が駆けつけたことの状況）を説明した。

「偶々、此処の先生が道場の門弟での」

一平は堰を切ったかに、ここ一連の歯止めなく起きる幻想を話し始める。

美田村は愛弟子の止めどない話を聞いていたが、話疲れた一平が口を閉じると、大きく溜息を吐いた。

「ヤバイとは思っとったが・・」

そして、労わるように告げた。

「一平、雪香（美田村夫人）とも話したんじゃが、復学する気になるまで、我が家で暫くゴロゴロしておれよ。点取りのスポーツ崩れしてきたお前の剣を、もう一度洗いなおす良い機会かもしれん」

「先生の家に……？」

「お前は大切な愛弟子で、親友から預かった息子のようなもんじゃから。ま、麻子もしのぶも憧れの一平お兄ちゃんが来ると言ったら大歓迎じゃろ」

美田村は悪戯っぽい表情を浮かべた。

「無論、居候らしく掃除洗濯、道場の管理、それに道場に来る少年剣士たちの師範代も兼ねるんじゃがな」

「僕が師範代ですか？」

「子供たちにとっても現役大学選手・昨年の県高校チャンピオンのお兄ちゃん先生に教えてもらうのは良い刺激になる」

「僕に出来るでしょうか？」

「出来るも、できないも、・・このままだと、お前は本当にイカレてしまう」

「……選択の余地はないってことっすね」　溜息とともに、一平は頷いた。

師は目を逸らさずに言った。「そう言うこと」

四話

日々道場の生活は今までとは一転して、息つく暇のないぐらいに目まぐるしく感じられた。
最後の一般道場生の稽古を終えると、活力溢れる一平もさすがに疲労が感じられる。

しかし、本当に厳しいのは全ての日課を終えた後であった。
一対一の師の骨身を削った個人指導である。
剣については些かの自負を持っていた一平少年が、四十半ばを越えた美田村に連日恐怖を覚えるほどに叩きのめされ、激しい叱責を受けるのだ。

そして、美田村家伝承である力信流古武術の修練に伴う、真剣を使った藁ズト斬りが果てしなく続けられる。
それは、まさに鬼神と化した師の厳しい武道への導きだった。

某日、師は一平に尋ねた。
「一度聞きたいと思っておったんじゃが。何のためにお前は剣に励む？」

一平は首を傾げた。「そう聞かれても……」

「宮本武蔵は好きかな？」
「僕的には理想の剣豪です」
「武蔵は剣の求道者ではあったが、サムライだったとは言えん」
「……」

「求道は自己の追究だが、サムライは利他にこそ誇りを持つ者なんじゃ。古今東西、求道者は幸せには成れんものらしい。お前はオタクっぽいので、そこが気になっておる。私的には、お前は求道者でなく、むしろ武士の道の方を進んで欲しい」

「武士の道ですか……」

一平にとって、師の提言は漠然としていたが、後々の進路に少なからず影響を与えて行く。

復学後も一平の心は目的のない風船のごとく宛もなく漂っていた。

剣は生きる支えではあったが生きる目的ではなく、大学も漫然として虚しく色褪せている。

一平は糸の切れた凧のように不安と孤独の空を彷徨っていた。

鬱々として日々を過ごす最中、三島武錬館の先輩、東体大助教授で剣道部監督をしている畠山純蔵から電話で同大グループ酒食会への誘いがあった。

畠山は武錬館歴中最強と謳われている先輩で、幼少時入館以来、何くれとなく一平を気にかけてくれていた。

一旦断りを入れる一平だったが、畠山は半ば命令的とも言えるほど強引に誘った。

会は、男女半々で和気藹々としていて存外に楽しかった。

欝気味で世慣れてない少年には、積極的な女子大生からの刺激的なハプニングもあったりして、結構な憂さ晴らしとなる。

アルコールが増すに連れ、会は徐々に盛り上がってきた。

「東体大剣道部の糞ったれ共に！」大声で唱和しては飲み干す。
一平も負けずに大声で叫び返す。
「帝応大剣道部の糞ったれ共に！」そして、「糞ったれの人生に、乾杯！」
「馬鹿野郎コーチ、アホ監督に、乾杯！」
「我らの青春に！」
「美しく、魅力的な女に！」
唱和しては飲み干し、飲み干しては唱和した。

歌あり、踊りあり、ハイになった一平は、鬱積の箍が外れたように二次三次と場所を変えて、強かに酔うまで飲みまくった。
そして、最後は畠山と一平の二人だけで、畠山が行きつけだったと言う原宿のショウパブ・シャンソンカフェで、飲み納めのお開きとなった。

翌朝八時頃、アパートのベッドで、一平は電話の音に目覚めた。
二日酔いのガンガンする頭痛を抱えながら、ベッドからやっとの思いで手を伸ばして受話器を取る。
「……一平クン？」　女性の声が語りかけてくる。

（イッペイクン？）　一平は首を捻った。

「早くから御免なさい。竹原恵子です」

一平は思い当たらない。

「タケハラさんって？」

「もう忘れちゃった？昨日、デジャヴュで純蔵クンに紹介いただいて……」

一平は思い出して言葉を遮った。

「先輩に紹介していただいた……歌手で絵の先生でした。ボケちゃって、すみません」

昨夜の記憶が蘇えってくる。

予約していた原宿のショウパブ・シャンソンカフェ・デジャヴュにタクシーで着いた時、二人は既に三次会まで終え、強かに酔っていた。

「ママは俺の憧れでな」　畠山は一平の肩を抱える。

案内されて薄暗い店に入ると、それぞれのテーブルに仄かなキャンドルが揺らめき、密やかに着飾った酔い客を映し出している。

夢酔いの中にある一平は注がれるワインを飲み干し、味わったことの無い空間に戸惑っていた。

すると、客同士の会話を縫うように静かなマイクの声が流れ、店

の奥にスポットライトが灯って、ラメ入りの黒衣を纏った長身細身で華奢な、西欧人風の美しい中年女性が浮かび上がった。

手風琴をバックに優しく語りかけるように歌いだす。

やや掠れて憂いを帯び、滲み入るような声。

若い恋人が自分を残して死んでしまったと云った内容の詩である。

時として目を閉じ、思いを込めて歌う表情が母の亜紀に良く似ており、一平の目は釘付けになった。

数曲を立て続けに歌い終え、マイクを置いた歌い手はそのまま一平たちの席に来て、

「今日はどう云う風の吹き回しかしら」と、親しげに畠山を抱擁する。

そして、一平に目を留めるや、驚きの表情でまじまじと見た。

二人の間に同席する彼女に、畠山は一平を弟みたいな郷里の後輩と紹介する。

竹原恵子はこの店のオーナー歌手で、本職は知る人ぞ知る画家であり、美大の講師でもあるとのこと。

彼女は付け加えるように「占いもするのよ」と、微笑んだ。

著名な画家を父に母親がフランス人、というハーフの魅力と、洗練された雰囲気が田舎者の少年には雲の上のように感じられた。

逸らさずに一平を見つめているその碧みがかった瞳が眩しい。

畠山が彼女に一平を誘った理由を告げると、恵子もまた三年前に一平と同年の息子を交通事故で亡くした過去を語り、同情するのだった。

照明が再び暗くなる。
青白く映える西洋人風男性がしわがれた低音の念仏のような聴きなれない音調で歌いながらスポットに現われ、鮮やかなマジックを披露した。
脱いだ帽子から小鳥や鳩、そして、兎まで引き出し始める。

やがて驚きの中、「夢のゴールドを！」と、歌い唱え、その奇跡の帽子から金粉を次から次に掴み出し空中一面に振り撒く。
金粉は空中で星々のごとく煌めき、降り行くフロアーは蛍に敷き詰められた夜野のように瞬いた。
マジシャンはステップを踏みながら巧みに各テーブルを縫い、
「ダイヤモンド、エメラルド、ルビー、サファイア、幸せの玉」
等と告げつつ、その上に輝く色とりどりの宝石を帽子から取り出しては溢れるほどばら撒いた。

悲鳴に似た客の歓声を尻目に、奇跡の歌い手が闇の中に消えて、会場が再び仄かに照らし出されると、泡沫のごとく財宝は一瞬の夢と消え失せており、失望の溜息とざわめきのみが残った。

「共同オーナーのパトリース・ド・ジェルマン・ローゼンクロイツよ」恵子は秘密事のように囁く。

一平は、その歌が試合前に自からの内側に湧き起こった奇妙な旋律に合致しているように思えた。

「不思議な曲ですね。フランス人ですか？」
「スキタイアン・アルタイのシャーマンですって。と、言っても分からないわね？」
「スキタイアン・アルタイ……」

「ソヴィエトの片隅にある自治共和国ですって」キャンドルに映える恵子は美しく、時折見せる聖母のような微笑みに一平は吸い込まれるかに見入っていた。

そして、語らいは、知らず過ぎ去りし母との懐かしさに誘うが、ふっと我に返ると限りなく深い寂しさに包まれるのだった。

暫しの間、席を外していた恵子は何人目かの歌い手の後に再びスポットに現れ、静かに染み入るように語り始めた。

「紳士淑女の皆様、今宵、歌祭りショウパブ・シャンソンカフェ・デジャヴュにようこそ。秋も深まり木枯らしが吹き始めると、あの身を焦がす熱い情熱の日々が遥か彼方の蜃気楼のように現実性がなくなります。

この世で最も恐ろしいのは愛する人を失う事、そして辛いのはその素敵な思い出が消えていく事。もう春は来ないんじゃないかと思う恐れと不安に包まれる時、私は神様に祈るの、愛と希望を下さいって。願い事って叶わないことが普通だけど、たまには奇跡ってあるのだと思ったわ。今日、懐かしいボーイフレンドと再会したの、その友達は若くて可愛い友人を一緒に連れてきたわ」

それからちょっと右手を一平に上げて、

「御免なさい、可愛いなんて。それがとても驚いたのは、事故で亡くなった愛しい息子にそっくりなの。歳まで同じ、これって夢見ていた御伽噺が現実になった気分。多分、奇跡なのよ。絶対そう思うわ」

恵子は束の間、目を閉じて再び話し始める。

「彼はつい最近、この上なく辛い別れを経験し、今絶望の淵を彷徨っている。苦しみって苦しむことを止めた時終わるのに、彼には何も見えない。唯、暗闇の世界。私は分かるわ。だって、私もずうっと何も見えなかったから」

見開いた彼女の視線には一平が居た。
「今から貴方のために。・・灯火をつけるために」
そして、静かに祈りを込めるように歌い始めるのだった。

一平は震えた。
包み込む愛の語りかけ、果てしない闇の中に竹原恵子を通して一点の灯火が見える。

電話の向こうからクスクス笑うのが聴こえる。
「良かったわ、忘れられてなくて。貴方、お店に大切な物を置いて行ったのよ」
「まさか！・・ちっと待っていただけますか」急いで昨夜着ていたジャケットとパンツのポケットを探ってみた。
「……あ！　物入れがポケットから消えています」

楽しそうに彼女は笑う。
「失礼して落し物の中を調べてみたら学生証でしょう。電車の定期証に自動車免許証、カードに現金まで入っているわ。貴方、これがなければ困るでしょう？　今からお届けしましょうか？」

「とんでもない。先生の場所に直ぐ参ります」

「学校は大丈夫なの？」
「幸い、休講でフリーです」
「今、青山のアトリエの方にいるので、来るのは難しいかも」
少し間を置いてから、
「良かったら十二時頃、もうオープンしているので、カフェ・デジャヴにいらっしゃれば？　お昼を御馳走するわ」
わかりました、と一平は電話越しに頷いた。
「でもこれ、全財産じゃなくって？　此処まで辿り着けるのかしら？」
「大丈夫っす。リッチなオカマ紛いのルームメイトが控えていますので」
「オカマ紛い？」
「彼、貸したがりやなんです」
「可笑しな人！」　電話の向こうから心地よい笑い声が一平の耳に響く。
一平はその日、正午に再び昨夜のシャンソンカフェを訪れることになる。

五話

昼のデジャヴは昨夜の雰囲気とは様相をがらりと変えて明るく道路側にフルオープンになっていた。
紅葉した街路樹と道行く人の流れを側に、客は室内から流れるシャンソンとカフェを楽しんでいた。

カウンターで用件を告げると、昨夜歌ってマジックパフォーマンスの中年男性が奥から顔を出した。
一平を見ると、一瞬、目を見張り、それから固まったまま見詰めている。

「イッペイ……？」

一平はその視線に戸惑いながら告げた。
「はい、竹原先生が、こちらでと」

男は一風変わったイントネーションの日本語で、
「午前中、恵子ママはシェイブアップタイムなのでスポーツジムの帰りになるワ。だからちょっと遅れるかも。カフェを飲みながら待っていてネ」　と、街路沿いのテーブルに導いた。

「こんなに背が高かったかナ？二メートル？」
「まさか、八十八です」

彼は琥珀色の瞳で穴の開くほど一平を見詰めてから、大げさに肩を竦める。
「ユウマに似ているかもネ」

「ユウマって？」
「恵子ママの亡くなった子供」
そして、「私は五年後のアナタと会ったことがあるのヨ」　と、意味不明の謎めいた言葉を発する。

「イッペイは剣士だよネ？」
「と、言えるほどでは」
「私も剣の道に励んだことがありますノ」

武道おたくの瞳が輝く。
「剣道をですか？それとも、フェンシング、サーベルとか？」
「私は武道マニアなので、殆どのマーシャルアーツを齧りましたが、特にソウ・ジュッツ言う日本剣道の変化形武術は我ながら結構イケるんですのヨ」

「剣道の変化形って、コムド（韓国剣道）みたいなものですか？」
「コムドやテコンドウのようなスポーツ変異じゃなくて、実戦武道化への引き戻った武術ネ。土台が剣道だけど、軽量防具で、打突の有効表示はフェンシングのように全てエレクトリックに表示される競技ルール。チャンスがあれば、イッペイと対戦してみたいネ」
「それはもう！」　一平の瞳が輝いた。
「初めて耳にしましたが、その剣術は何処の国で？」

男は「ドラゴンワールド」と、ウインクした。
（マジッシャンズジョーク？）一平は乗せられた自分に苦笑した。

「パトリース！」と、街路から呼びかける声。

髪を一つに纏め、ポロシャツに洗いざらしのジーンズ、上に男物らしいジャケットでスニーカーを履いた竹原恵子がショルダーザッ

クを肩に下げて居た。
気のせいか道行く人の中、一平には全身から彼女だけが淡い光を発しているかに感じられた。

恵子はパトリースと抱擁し、フランス語で何やら話してからテーブルに同席する。
パトリースは一平へ如何にも物有りげに目配せして中に入って行く。

「怪しいわね」
首を傾げながらその後姿を追っていたが、恵子は急に声を潜め、悪戯っぽい口調で言った。
「パトリースはゲイなんだから」

一平は恵子の昨夜とあまりに違う雰囲気に、唖然としていた。
「昼間もローブ（ドレス）を着なくちゃいけないかしら？」

一平は深々と頭を下げ、
「この度はお世話になりました。ご迷惑をかけて申し訳有りません」
と、来る途中、路上で求めた薔薇の花束を差し出した。

「有難う。気を使わなくても良いのに」恵子は嬉しそうに香りを嗅いでいる。

「貴方は紅い薔薇の花言葉、知っている？」
「全然、僕はそう言うのは疎いものですから」
「恋心よ」

一平は見る見る顔を赤らめた。

「ウソ、適当に言ったの」クスクス笑いながら恵子はザックから袱紗に包んだ一平の物入れを取り出し、テーブルに置いた。

無造作に、後ろポケットに一平は納める。

「上着に入れたほうが良いんじゃない？　また落とすわよ」

「大丈夫。同じヘマは二度としないことに決めてますので」

年配の女性から久しぶりに受ける気遣いと注意が一平には懐かしくも嬉しい。

「ユウマにそっくり。貴方を会わせたかったわ」

「自分にそっくりだなんて、ゾッとしないですね」

「ホント、ユウマだわ」恵子は一平の何かにつけ感心する。

「オカマさんに借りていらしたの？」

「はい。散々馬鹿にされましたが」

「親しいのね」

「剣道だけでなく、プライベートにも親しい友人なんです」

「プライベートにも？」

一平は焦ったふうに手を振った。

「誤解しないで下さい。ルームメイトはオカマ紛いでオカマではありません。生兵法クラブ言うオタッキーな同好会の仲間でもあるんです」

「生兵法クラブ……？」

「古今東西における戦略を検証し、シミュレートする同好会なんです。

アレキサンダーからベトナム戦争、あるいはスポーツに至るまで、適当この上なく戦いと言う戦いをネタに熱く論ずるんです」
一平は得意そうに胸を張った。
「ちょっとオタッキーだわ」見つめる恵子は慈愛に溢れている。
「剣法を昔は兵法って言っていたんですが、剣道の一環として嵌っちゃったんです。
因みに、ルームメイトのカマッキは精神科のドクターを目指しているので、心理的側面から入ったみたいです」
「部外者も参加できるのかしら?」恵子は会話を楽しんでいる。
「それはもう!まして、美人なら大歓迎です。そう言えば、以前に母を連れていったことがありました」
「ママンってどんな人だったの?」恵子が尋ねた途端に一平の目頭は熱くなり、目が潤み始めた。
「僕にとって理想の女性像と言うか、素晴らしい母親でした」
そう言ってから、一平は、感情の高まりを抑えるように、
「それが……何処か先生と似ているんです」と、付け加えた。
恵子は一平の急激な感情の起伏を吃驚したように見ている。
「……光栄だわ。理想の女性に似ているなんて」
「先生ほどは素敵じゃないですけど」一平は恥ずかしそうに笑った。
「お世辞でも、嬉しいわ」恵子の微笑みは蕩けるようである。
語らいの徒然、恵子がやるせなさそうに何か呟くのを一平は聴い

た。
瞳の焦点が遠くを見ている。
ふっと、我に返ったように恵子は「君は煙草を吸わないの？」と、尋ねた。
「帝応大剣道部では禁止なんです」
「注意しても優馬は止めなかったわ」
「高一で？」
「……悪ガキだったの。ところで、一平君、恋人はいるの？」
唐突な問いに一平は手を振った。「面倒なんで」
「ハンサムボーイが？」
恵子は首を傾げる。
「君のママンと私は同じ年齢、君と亡くなった私の優馬は同年齢。しかも小学生の時、私が君のママンと隣り合わせの町で暮らしていたなんて、もう絶対に深い縁が有るわ」
「それと、雰囲気が……」一平が付け加えた。
「雰囲気って？」
「と、言うか……凄く懐かしい感じなんです」
「それは、私も同じよ」
「ところで、私を先生と呼ぶのは止めていただける？プライベートで、そう呼ばれるのは馴染めないの」
「じゃあ、恵子ママって。いいですか？」
「……ママンって呼んでも良いわよ」

一平は笑った。
母を亡くしたばかりの息子と、子供を亡くしている母親は、会ったばかりとは思えないほどに親密に談笑している。
パトリースが仕事の間を縫って、
「お昼を過ぎるネ。育ち盛りのアマンはお腹がペコペコのはずヨ」
と、さり気なく告げていく。
「パトリースさんって、外人でも色が違うと言うか、ちっとばかし普通じゃ無いような感じですね」
恵子は声を潜める。「ブルーブラッドですって」
「ブルーブラッド？」
「高貴なお血筋なんですって。私の推理ではロマ（ジプシー）の系統だと思うの」

ランチを取るため、近くにオープンした自然食のベジタリアンレストランへ恵子は一平を案内したが、臨時休業になっていた。
「残念だわ。ヘルシーの上に美味しいリストランテって、中々無いのよ」
急遽、青山にある彼女のアトリエで簡単な手料理をご馳走する事に決まり、タクシーを拾った。
アトリエは駅から歩いて僅か十分ぐらい、閑静な住宅街の蔦が這

う瀟洒なビルの一室に在った。
打ちっ放しのモルタル壁に囲まれ、かなり広いワンフロアの中に居住空間が衝立で部屋風に簡単に仕切られていた。それは籠もって創作に耽るには絶好に思える。

「ホントにパスタだけよ。そこにあるワインクーラーから適当な白を出して開けてくれる？　グラスは其処」

壁面に埋め込んである嵌め込み式の電動ワインクーラーは、優に五百本は保存できそうだ。
ボトルを引き出し、白であるのを確認してから声をかける。

「これは、えーと、…コルトン・チャルレ……？」
「シャルルマーニュね。それはグラン・クリュ（一流のブドウ畑に与えられる称号）よ。
アーモンドっぽい香りが特徴なの」

料理が出来上がるまで、一平はアトリエを探索することにした。
室内には、大きな天球儀と称するアンティーク物を真ん中に、大小様々のキャンバスが天井から壁、床そして幾つかのイーゼル等に無造作に吊り下げられたり立て掛けられたりしている。

キャンバスに描かれている作品の完成度は夫々だったが、何れも鮮やかで、生き生きとしており、素晴らしい感性が画面の中で踊っていた。
特に製作中の、咲き乱れる藤の花に飛び交う熊ん蜂（マルハナ蜂）の群れは圧巻で、爽やかな春風に蜂の羽音と花の香りが画面の中から漂って来るようだ。
一平は感動の声を上げた。

調理していた恵子が「如何したの？」と、キッチンから顔を出した。
「素晴らしい絵にチョー感動っす！」　一平が応えた。
「絵に興味があるなんて意外だわ」
「見ていると、武原恵子講師の指導を受けたくなります」
「ワーオ。残念ながら美大の講義は実技じゃないのよ。私のは造形心理学なの」
「造形心理？」
「創造と精神の関連性についての研究」
首を傾げる一平に、恵子は言った。
「人を作品に惹きつけるための構成技術と言ったところかな。こう見えても一応心理学のドクターでもあるの。絵の実技なら個人的にノンタックスで教えてあげても良いわよう」
一平は「畏れ多いっす」と、手を振った。
「面白いわよ。描くのはオーケストラの作曲と指揮者、推敲する小説家にも似た作業なの。メインテーマを押し出すためのバック・グラウンドを創るのが素敵なの」
次いで一平は壁の中央に六号ぐらいの画風が異なるシルク・スクリーンの人物画に目を止める。
青い水晶髑髏を抱くようにして微笑む少女？少年？
一平はその見覚えのある人物の顔に驚き、目を見張った。
「この絵は！」
恵子は調理の手を止めて
「今度はお化けでも見つけた？」と、一平に近づき肩へ手を掛けた。

「それは、手元に残された唯一のパパの絵なの」
「いえそれが、僕の兄のような童児言う人に、あんまり似ているんで」
「俊英の秀作と言われている『マイトレーヤ（弥勒）と五色の天人たち』って知って・・いないわよね？」

「・・・すみません、美術には空っきしなんで」
「南相馬に伝わる昔物語りからの一説らしいわ。この絵は『マイトレーヤと五色』からの、マイトレーヤのみの抜粋なのか、それともマイトレーヤの原画に当たるのか、何れにしろ、実在のモデルがいたことは確かよ」
「制作年から言って、童児さんがこの絵のモデルで無いことは確かですね」
「絵の題名は『水晶髑髏を抱くアミリウス』よ」
「アミリウスって？」

恵子は肩を竦めた。

熱心に絵を見詰める一平に秘密めいたように「ね、手を見て」と、囁く。

「六本指だ！ジョーク？それとも、何かの意味があるのかな・・？」
「実在らしいわ。古代ではピタゴラスがそうだって」

恵子は一平をマジマジと見て、
「気のせいか、額の微かな窪みと言い、どこか君にも似ているような感じがしないでもないわ」と、首を傾げた。

「僕と童児さんは似ているって、言われてました」
「童児さんと言う方は、伊豆に居らっしゃるの？」
「数ヶ月まえに死にました」
「それは、・・君のママンの死と関連があるのかしら？」

一平は吃驚したように、恵子を見つめ「どうして？」と質すと、恵子は「何となくそう思ったの」と、答えた。

「いけない！パスタが茹っちゃう」恵子は慌てて厨房に戻った。

一平はワンダーランドの探索を続ける。

部屋の隅にある机の上に、バイクに乗った少年の写真が立ててあった。

その少年は多少髪と瞳の色が淡い以外、一平に良く似ている。

一平はその写真へ釘付けになった。

六話・芽生え

料理はペペロンチーノのパスタとサラダだった。
ガーリックの風味とアルデンテが美味しく、一平は何よりその雰囲気に陶然としていた。

「あの写真、ユウマ君ですか？仰る通り僕に似てるかも」
「でしょう！　父親がユダヤ系フランス人で、私がハーフなので日本人は四分の一しか入ってないの」
「その割りに、日本人っぽいですね」

恵子は一平を悪戯っぽく指差した。
「君だってピュールのジャポネでしょう？その割には異人っぽいわよ」
それから、呟くように「一平君と会えて良かった。まるで・・ユウマと居るみたい」と、言った。

「僕も、こんなゆったりした気分は久しぶりです。ずうっと居たいんですけど、ランチを頂いたら帰ります」
「もっと、ゆっくりしていって欲しいのに」
「いえ、会ったばかりなのに図々しくして嫌がられたくないんです」それは一平のこれからも会いたいという間接的な意思表示である。

「じゃあ、後二、三時間、幸せなママンに付き合って。
嬉しいことや楽しいことは後回しにはしたくないの。だって、そうでしょう？人生なんてなるようにしかならないんだから」

結局、食事を終えても二人は飲み続け、話し続けた。
既にテーブルの上には四本のボトルが空になって並んでいる。
恵子は失った過去を取り戻すかに堰を切ったように話し続けた。
故竹原俊英画伯やフランス人の母との思い出、福島の相馬地方における出来事、パリの生活、優馬の父アランとの出会いと別れ、そして優馬の死。
アルコールを飲み慣れていない一平少年を尻目に恵子は自ら注いでは飲み、飲んでは話すのだった。

一平は尋ねた。
「恵子ママとアランさんは如何して別れることになったんですか？」
「出会いと別れは宿命なのよ。でも、強いて言わせてもらえれば、彼との別れは性格の不一致かしら」
「性格の不一致ですか・・」
「少なくとも、性の不一致ではないわ。その方は合い過ぎるほど良かったのよ」

一平は赤くなった。恵子は一平の様子に頓着せず、ワインを自ら注ぎながら話し続ける。

「彼は私とは正反対の性格」
「と、言うと？」
「本人が言うのには、ニヒリストなんだって」恵子の声は投げやりで、他人事である。

「彼には至高の価値が存在しないのよ。つまり『何のために』と

言う質問への答えが存在しない。人生の全てを肯定する運命愛の持ち主だったの」

「運命愛ですか？聞いたことがあるような……」

「言わせてもらえれば、あれは一種の病気みたいなもの。アランが言うのには、人生には元々目的もなければ意味もない。従って、真実もない。もう既に神は死んじゃっているらしいわ」

一平は声を上げた。「ニーチェだ！それはツァラトゥストラは斯く語りき……」

「難しいのを知っているのね？」恵子は目を丸くした。

「選択が倫理でしたので、カタログ並みの知識として」

「倫理？」

「西洋哲学が含まれるんです。すみません、余計な口を挟んで」

恵子は愛しそうに一平を見詰めている。

「いいのよ。そう言うことで、アランは常にニーチェかぶれの超人ワールドを夢見ていたの。今になって考えると私たち二人が一時とは言え、一緒に暮らしたことが奇跡みたいなものだったわ」

「……アランさんは今、如何しているんですか？」

「バリで幼稚園の先生をしているらしいわ。風の便りではバリニーズとの間にユウマの妹が生まれたって」

「バリって、インドネシアの？」

「そう、アランはバリ島を人生の旅の終焉地と決めたの」

「人生の旅？」

「人は全て皆、旅人だわ。そして誰しもがその終焉地を探している」恵子は語り続ける。

「この世は仮の世界で、人は死ぬと最も自分に合った本当の世界

に集まり暮らすようになるって、聞いたことあって？」
「いえ、僕はその辺はさっぱり」
恵子はクスリと笑った。
「人はこの世でも、自分に合った世界を終生捜し求めている」
「アランさんにとっては、バリがそうなんですね」
「アランは神の許す島と呼んでいたわ」
「如何言う意味なんですか？」
「ジュウイッシュの彼はユダヤ人としては許されざるコンプレックスを持っていたの。それはバイセクシャルなエーメ（ハート）だったのよ」
「バイセクシャル？」
「男も愛せたの。パトリース・ジェルマンはその恋人で親友の一人」
恵子は微笑んだ。
「バリ島では愛に差別やタブーがなく全てに寛容だって。
彼は何時も自分に都合の良いように夢見るのよ。安定は愛を殺し、不安は愛をかきたてるって、そんなことの連続。
アランは私に母親を求めていたわ。でも、私は彼のママンには成れなかった」
恵子は透き通るように美しく、寂しく儚げであった。
「ユウマは私にとって、最初で最後の子供なの。
彼が去った後、私は筋腫のため子宮摘出手術を受けた……」
話の合間に、一平は尋ねる。
「何時もこんなに飲むんですか？」
「心配してくれてる？大丈夫、まだアル中には成っていない。それに、今日は特別な日だわ」

「すみません。母が時々飲み過ぎては大変だったものですから」

恵子は遠くを見る目で感慨深げに話を続けた。

「父はよく『涙と共に飲む度、酒は深みを増す』と言っていたけれど、醒めると、ほろ苦い後味と虚しい香りだけ……」

晩秋の夕暮れ六時は早や闇の帳が下り始め、窓から見下ろすとプラタナスの街路樹は既に街灯に照らされている。

強かに酔いの回った恵子に帰宅を告げ、一平がアトリエから立ち去ろうとした時、

恵子は「待って」と声を掛け、後ろから一平を抱きしめた。

「そのまま、お願い……」と囁く。

一平は抱擁されたまま身じろぎもせずに立っていた。

背中越しにワインと仄かなローズの香り、酔った息ずかいや、押し付けられた柔らかい乳房の感触に、一平は思わず動揺を覚えるのだった。

その時、微かな「ユウマ」と言う呟きを聴く。

一平は恵子が泣いているように思えた。

「ごめんね。有難う」

解放した後、彼女は何事もなかったかに「電話してね」と、明るく見送った。

その夜は悶々として一睡も出来なかった。

以来一平の思考から恵子が片時も離れる事がなくなってしまった。まるで熱病に侵されたように思慕し始めたのだ。

当初は遠慮がちに、やがては母親の亜紀にそうしたように、一平は日常些事の理由で一日に一回は電話連絡をして恵子の声を聴いた。そして心の平静を得て、ほっとするのだ。

恵子は恵子で急に懐かしい息子が再び音信を取り始めたように嬉しく、何時の間にかその連絡を喜び待ち望んでいた。

やがて二人は気の置けない親子か友達のように打ち解けていた。そして、少なくとも週一は、お互いに何やら理由をつけては会う機会を作るようになる。

「一平君、モデルになってよ。想定しているテーマに君の裸がピッタリなの」

「冗談！」

「ブリーフぐらいならお目こぼししてあげてもいいわよ」恵子は良く笑う。

星占いの運命について、恵子は話した。

綿密に調べ上げられ、パソコンを使ってトレースされた一平のホロスコープと彼女のそれとの不思議な交差について、色彩ペンを使

いながら説明する。
「君は今年、とても大きな辛い別れの後、運命の出会いが、そして私には清算の出会いがあるわ。それが何れも九月を指している。だから私と君との出会いは宿命ね。
面白いのは君と優馬はカンセール（蟹座）の双子の星、私と君のママン亜紀さんもリブラ（天秤座）の双子の星。並行して運行している二組の双子星は捩れたり、交差したり出会いと別れを繰り返している。
私と一平君の星が九月以後、デッドゾーンを抜けパートナーを変えて並行し、共に親子の位置なのにエロスの星宿、詰まり恋愛のようなエリアに突入したまま。これって、もし年齢の差がなければ、妖しい関係かもよ」

恵子は悪戯っぽく笑う。
そして、告げたのは運命の転換だ。
「重要なのは三年間の共同運航後、旅立ちの星と二人とも交差する。
巨大な彗星群とそれに伴う星々との遭遇、特に君の行く先には輝きの星座が見える。
それ以後、私と君の状況は別のエリアへ突入するわ。
よく分からないのは君の星がもっと明るくて強い星と摩り替わってしまうこと。そしてさらに・・面白いわ・・十六年後君は自らが輝きの巨星になるべく新たなる相似の世界への帰還。
旅立ちなら分かるけれど、新たな相似世界への帰還って如何言う意味なのかしら？
何れにしろ・・三年後から状況が劇的に変化するのは確かだけど、この意味もまだはっきり読めない。君は赤い糸で結ばれている運命の人と出会うのかもしれないわね」

一平は尋ねる。「運命って避けられないものなの？」

「大よそはね。でも、選択する余地は幾らかあるの。
この世の定めには宿命と運命があり、宿命は変えられないけれど、運命は変えられるのよ」

一平は占い予言の類を迷信の一種と決めつけており、端から信じて無かった。
しかし、恵子のには例外的に興味があり、それを彼女から聞くのは楽しみになっていた。
そして時折、その正確さに唖然とさせられる。

「占いは何処で学んだんですか？」
「素敵な質問だわ。如何して、そんなことを聞きたくなったのかしら？」
「ママの予言が超えているもんですから」
「人は元来何でも出来るスーパーマンなのよ。それが何故か十重二十重にシールドされてしまっている。私は幼い時に、その封印をほんのちょっと開いてもらったの」

「それは・・誰に？」
「魔法の国で出会った奇跡の人達よ。貴方のママンも私のパパも生まれて育った所のほんの近く、実際に存在した世界」
「頭がゴチャになっちゃう」
「シンプルだって。この世の出来事は全てが遍く約束されていると言うだけ」

恵子は遠い彼方を望むように瞳を宙に浮かしながら話していたが、一転して、
「一平君にお聞きしたいことがあるわ。・・もし仮に私たちにそっくりなもう一つの鏡のような世界が実際に存在するとして、そこ

に君のなくなったママンに寸分変わらないソックリな人が生きているのを知ったら、そして、その人が君にそっくりな息子を亡くして悲しんでいるのを知ったら、一平君は如何するのかしら？」と、声を潜めた。

「如何するも、会いに行くに決まっています」

「地の果てであっても？」

恵子の大きく艶やかな瞳が更に大きく見開かれ、一平を見詰めている。

「当たり前っす。如何してそんなことを聞くんですか？」

「ううん。会いに来てくれるか知りたかっただけ」

一平は意味不明な問いかけに戸惑いつつも、その表情に深い哀しみを見た。

恵子が何かにつけて繰り返し語るのは、『この世の中に偶然は在りえない』と言う信念。

一平は恵子に心酔して行った。

恵子に関する見るもの聞くもの全てが、感動と喜びであり、限りなく思えた心の空虚さが次第に埋められていくのを感じていた。

それは他人にして他人に有らず、親子ではないが親子の様な付き合いである。

恵子にとって一平は亡き優馬そのものであったが、一平にとっての彼女は母親とは言えない、それ以上の感情が密やかに芽生えつつあった。

七話・告白

恵子は定例の海外旅行から数週間ぶりに帰るや否や、待ちかねている一平へと連絡を取る。
そして次の日の昼に、二人はアトリエで共に食事を取るのだった。

「今回の出張は、何処に？」

恵子は笑った。
「出張じゃなく、単なるヴォヤージ（旅）よ。パトリースとパリで離れてから殆どモロッコでぶらぶら過ごして居たわ。心の洗濯が必要な時、何時も行く秘密の所なの。そこは不思議と私にフィットするの。あっ、話しちゃったから、もう秘密で無くなっちゃったわ」
そして、楽しそうに「君はモロッコに行ったことがある？」と、尋ねる。

「いいえ。海外は小一に両親とハワイに行ったきりです」
「北アフリカは最高よう。私のベースはカサブランカの南の町で、アトラスの麓のマラケシュ。乾いた砂の香り、バザールとスークのざわめき、変わらない悠久の時の流れ、私はモロッコの何もかもが好き。あそこには時間がないの。私にとってアランのバリみたいな場所かも知れない。ぜひ案内したいわ。ね、今度は私たち二人で行きましょう！」

思いがけない恵子と二人旅行の提案に、一平は心の泡立ちを覚えた。「心の洗濯って？」

「何にも邪魔されず、自分を見つめなおす時間を持つのよ。私にはそれが必要不可欠なの」
「それは僕にも・・必要かもしれない。こう見えても、僕は結構ナイーブなんです」
「どう致しまして。十分ナイーブに見えるわよ……」　くすりと恵子は笑った。

恵子は話の流れから「そのナイーブで多感な君にあえてお聞きするけど、一平君は反抗期って無かったんじゃない？」と、切り出した。
「……分かるんですか？」
「典型的なマザコンですもの。一平君はエディップス（オイディップス）・コンプレックスって、知っている？」
「言葉だけは」
「古代ギリシャのオイディップス物語から来ているの。アポロンの予言で、『父を殺し、母親と交わって子をなすであろう』と宣告される。脅える父王は赤子のオイディップスを山中に捨てさせるんだけど、結局、成長したオイディップスは予言どおり実の父とは知らず父を殺し、母とは知らず母のイオカステと交わり結婚して子を儲けるの。フロイドがこの物語を人間の根源的な欲望と葛藤を表しているとし、エディップス・コンプレックスと名付けたのよ」
恵子は歌うように軽やかに話す。
「人間は成長する際、最初に認識する異性は、娘は父親であり、息子は母親だって言うのう。ところが、性的能力が芽生えるに連れて異性親に対して激しい嫌悪感が生じて来る。それが所謂、反抗期。つまり、異性親を性的対象から切り離すため、と言ったところ。だからあ、反抗期を迎えない人は問題があるのよう。ことが面倒なのは、人間の行動様式を決定づけるのが、心の中の殆どを占めている無意識なの」

「自覚できないってことですね？」
「そう、無意識は闇の世界よ。湧き上がってくる性的意識と複雑に絡み合う道徳意識。その葛藤は強い軋轢となって、時として、歪んだ状態で発露してくる。精神病の大半がそれって説もあるぐらいなの」言い様は心当たりがあるようである。
「反抗期を迎えないケースは三種類のパターンに分けられるの。一は湧き上がる衝動を表面の意識層から消し去ろうとするタイプ。二は素直に認めて正面から向かい合い、自己調整を図ろうとするタイプ。そして、もう一つは抑えのきかない反社会的なタイプなの。マザコンの大部分は最初ので、ほとんどの精神病理学的対象者に該当する。興味深いことに、二のタイプには秀でて優れた天才とか、偉人がいたりするのよ」
「最後のタイプは？」
「社会に適応できない犯罪者あるいは異常者と言えるかも」
「僕はどのタイプなんだろう？」
「第三のタイプじゃない？」

一平は息を止めた。

「私のハートを奪ってしまった悪い奴だものう」
目を白黒させる一平に、恵子はくすりと笑った。「バカね。第二に決まっているじゃない」

そして、恵子は顔を触れんばかりに寄せて囁いた。「マザコンが自らの問題点に立ち向かい克服すると、普通以上に素晴らしい世界が開くのよう」

一平は恵子から思いがけない依頼を受けた。
恵子のファンで、支援者でもある某国大使主催の国王誕生パーティ。

そのエスコート役を一平は頼まれたのだ。

再三の固辞にもかかわらず、半ば強引に引き受けさせられた一平は、恵子が急遽調達したタキシードをアトリエで着込んでパーティに臨んだ。
鮮やかなエスニック風ドレスを纏った恵子の艶やかさに、一平は見入っていた。

恵子は会場に入る前にタキシード姿の一平を眺めて
「馬子にも衣装って言うけど、女性が放って置かないわよ」等と耳打ちしてくる。

「今更の七五三祝いと言うか、服に着られているみたいで落ち着かないです」

恵子は一平の頬に手を添えて、
「ナマ言わないの。こんな素敵なソワレ（パーティ）は中々無いんだから」
と、言いながら声を潜め、
「今日の日は、一平君にも私にも特別の日って。だから、乞うご期待なの」と、囁いた。

「星占いですか？」
「易よ。二進法の統計学。当たるも、当たらぬも八卦ってね。素敵なレディとの出会いがあるかもよ」
「結構です。今のところ僕は現状に満足していますから」

「あら、誰とも付き合っていないんじゃなかったの？」

「憧れている人が居ないわけじゃないんです」一平は恵子を見つめた。

「エクセラント！美少年に見つめられると、ハッとするわ」

恵子は、胸に手を当てて屈託ない。そして、

「・・ここでは私をママなんて呼んじゃいけないわ」と、釘を刺した。

「何て呼ぶんですか？」

一平が尋ねると恵子は片目を瞑った。「マダムよ」

初々しい長身の美少年と、ハイセンスで素敵な熟年美人のカップルは群を抜いて際立っていた。

一平は魅力的なレディのエスコート役を誇らしく感じ、地に足が付かないほどにのぼせ上がった。

恵子は得意の歌を披露したり、エスコート・パートナーをまるで久しぶりに帰ってきた息子のように自慢げに紹介した。

恵子は終始ご機嫌であった。

パーティーが終わり、酔いの回った恵子はタクシーを降りてから軽く支えられるようにしてアトリエに入った。

一平を抱きしめたまま、熱冷めやらず、

「少年、今日はめちゃカッコ良かったゾ。ホント、最高だったわあ」

と、一平の髪を両手で掻き乱す。

「バーチャルの世界は終わり。今から、二人だけの二次会をしましょう！」

と、気勢を上げ、ワインを取り出し始めた。

「もう、遅いので帰ります。結構僕も酔っていますので」

一平はグラスをテーブルに置く恵子を抑えた。

「あら、明日は日曜日で、予定が無いってえ、言ってたでしょ？今夜はじっくり飲みながら語り明かしましょうよう！」

躊躇する一平に

「ベッドも余分に有るし、泊まっていきなさい、ママンの命令よう。とにかくその窮屈な衣装を脱いでシャワーを浴びていらっしゃいな。歯ブラシは洗面所、着替えのパジャマは脱衣所に置いとくわ」

一平はその言葉に押されるように頷くと、シャワーを浴び、それからパジャマに着替えた。

「ちょっと小さいかしら、それ優馬のなの。君はどうしても彼とダブっちゃうわ」恵子は感無量という面持ちだ。

何時も一平にとって恵子と過ごす時間は例外なく楽しかった。
しかし今日の一平は、確かに嬉しくはあるのだが、どこか靴の底から足を掻くような掻痒感があった。
恵子のテンションが上がるにつれ一平は逆に口数が少なくなって行く。
「オイ少年、なんか変だぞ？言いたい事があるなら言いなさいよう」と、恵子は彼の心の内を追及し始めた。
酔いの回っている彼女の執拗な追及に、遂に一平は覚悟を決めて彼女への正直な気持ちを告白する。
「僕はママに軽蔑されたり、嫌われたくないんです」
一平の顔は蒼白く強張っていた。
「変なの！君と出会って、どれだけ私が救われているか……。こんな幸せな気持ちになれるなんて、思いもしなかったのに」
一平は恵子を見つめ、はっきりと勇気を奮って告げた。
「全てが好きなんです。……この世の中で誰よりも恵子ママが好き」
そして顔を紅潮させて宣言した。
「愛しています」
酔っている恵子は、仰け反って笑う。
「私もそうよう。君は大切な私の宝物、最も愛する私の坊やなの」
一平はもどかしそうに首を振った。
「違う！初めはママンでしたが、今の気持ちはそれだけじゃない」

そして呻くように「僕はユウマ君じゃないんです」と、告げた。

一平の言わんとする意味を理解して、恵子は不意をつかれたように驚いた。

「……そうだったんだ。……確かに、そういうのも……」

恵子はぼうっと椅子から立ち上がった。

「今の今まで、ママンとしてとばかり思い込んでいたわ。それにしても……」と、呟きながら歩き回る。

やがて恵子は、不安そうにしている一平の側に座り、

「ごめんなさい今まで。でも、どうして私のような年増の小母さんに？」

「こんなに好きになったのは初めてです。ママの何もかもが好きなんです」

「私は一平君のママンと同じ歳、君は優馬と同じ年齢よ。十八歳と四十五歳。とても、相応しいとは思えないわ」

「二年経てば僕は二十歳です」

「その時、私は四十七・・三年すると五十よ」

恵子は少年の率直な告白に満更でもない心地だったが、今までが今までだったので、戸惑っていた。

少し酔いが覚めてきたのか、快活だった恵子の口は今や開こうとする気配をみせない。

一平は恐る恐る切り出した。「……帰らなくちゃいけない……ですね」

恵子は頭を振った。
「……恋人モードになるのには……時間が要るかも」
恵子は自分に言い聞かせるように呟き、立ち上がった。
「待っていてくれる？シャワーを浴びて頭を冷やして来るわ」

恵子は気を静めるように体をゆっくりと丁寧に隈なく洗い流し、入念に愛用のオイルを全身にすり込んで行く。
そして、パジャマに着替えて一平の前に現れた時、恵子の気持ちはすっぱりと切り替わっていた。

（恵子にとっての一平は息子の優馬であり、恋愛の対象ではなかった。しかし、一平は恋愛を求めてきている。衝動のきつい年頃を考えると、一旦火が点いたその気持ちを拒否するのは忍びない。省みない一途さ、それは若さの欠点であり魅力でもある。彼を失いたくなければ、望むようにするしかない）

一平は恵子を窺っている。

恵子は無言で小ぶりのワイングラスを新しく二つ置き、ワインクーラーの奥の方から黄金色のワインボトルを大切そうに取り出してコルクを抜いた。
ワインを注ぎ、一平に差し出す。

不安そうな一平の側に座り、噛んで含めるように話した。
「何時か君には必ず年齢に相応しい素敵な女性が現れる。だからそれまでの間、年増の小母さんでも良ければ、……君の恋人になって上げるわ」

思いもかけない宣言。一平は呆然とグラスを受け取った。

「……魅惑的な恋に」恵子はグラスを掲げた。

（恋愛って何時も不意打ちの形をとって現れる。火傷するのも悪くはないかも）

「甘い！」一口飲んだ一平は、芳醇な香りと蕩ける甘さに無邪気な声を上げた。

［貴腐ワインよ］

「貴腐？」

「糖度を高めるため樹上で葡萄を特別な菌（ボトリテイス・シネレア菌）で濃縮腐敗させて作ったワイン。レーヌ・ドゥ・アムールと呼ぶに相応しいワインなの。

・・恋する男女には最高のデザートワイン。一平君、私の為にもう一杯飲んでくれる？」

漣のような胸騒ぎが押し寄せて来る。

「恵子ママのために……？」

「シャトウ・ディケムのアロマとブーケはセックス・ユムールを高めるわ」

一平はハッとして恵子を見た。恵子の瞳は妖艶に潤んでいる。

その時、外から湧き上がるように救急車のけたたましい音が窓外に鳴り響いた。

眩い輝きがブラインドを透してアトリエに射し込んできた。

真向かいのビル前に救急車が横付けされ、騒がしく人々が右往左往しているのが見える。

「事故みたいね……」

霙混じりの強風が一際強くアトリエの窓を揺るがし、巻き上げられた枯葉が冬の嵐のようにガラス窓を叩いた。

何も言わず二人は外を見ていた。

恵子はグラスを飲み干してから「目を閉じて」と、一平の耳元で囁く。

やがて、目を開くと真近に恵子の生き生きした瞳があり、何か言おうとする少年の唇をそっと指で押さえ、それから彼女の唇が重ねられた。

一平は震えている。

恵子は一平のグラスを取り上げ、低く掠れた声で「恋人のベェゼよ」と、囁き、強く唇を吸い、ゆっくりと舌を絡めて行く。

甘酸っぱい味と駆け巡る芳醇な香り。唇と舌の絶妙な誘導に少年は全身が痺れる様な快感に貫かれた。

一平はパジャマの上からではあったが、憧れの乳房に触れ、喘いだ。

恵子は優しく、しかし決然として「ここまでよ」と、引き離した。

「続きはベッドルームで。今夜、私は君の女になるわ」

心臓がバクバクと恐ろしいほどに脈打っている。

思いも寄らぬ急展開に、一平はどうにかなってしまうのではないかと思った。

七話・告白（後書き）

この後の話は既に書き上げ済み。
しかし自分ではエロいとは感じない表現だとおもうのだけれど、
アウトに引っかかりそうなのでどうするべきか考え中。

とりあえず恵子との過去話は打ち切って話を進めようと思います。
何か気になったことがあれば遠慮なくお願いします。

八話

「ホント、参っちゃった。何か騙されたような気分。あれは強烈で素敵な体験だった。
精神が肉体に付属している事実を否が応でも思い知らされたわ。
親子関係を保とうとする矜持があの夜、よりによって、息子のような少年に脆くも魂ごとぶち抜かれたっていう感じ」

後に恵子はこの夜のことをそう語った。

まさに其の夜は二人にとって特別の時となったのだ。

ともあれ、二人の関係は急速に進展し、一平は少なくとも週の内、半分以上は恵子のアトリエで過ごすようになって行った。

一平にとって恵子は驚きの連続であった。

時間や規則に囚われない自由奔放な生活スタイルと考えはもとより、触れ合う人脈の豊富さ多彩さは瞠目すべきものであった。

とりわけ、大麻や幻覚剤等のドラッグ常習者、性的倒錯者、革命家、やくざ、占い師、魔術師、心霊師、そしてカルトな宗教家といった類の人々は、

元来の一平の生活において、先ず知り合う事も触れ合う事も出来なかったと思われる。

そして、恵子の日常話す種々雑多な話しと内容は、一平にとって一つ一つが非現実的な夢物語のように驚きであり、楽しみだった。

特に寝際に耳元で恵子が話す過去の物語は、あたかも千一夜物語のシェラヘザードの如く飽くことなく魅了する。

恵子は恵子で、ベッドの中では果てること無いエネルギーと、目くるめく愛技で屈服させるかと思えば、

瞳を輝かして恵子の話を聞き、紛れない純粋さで慕ってくる一平が堪らなく愛しい。

一年たち二年経つと、恵子から見て、一平は眩いぐらいに逞しい若者に成長していた。

恵子は一平に相応しい恋人が出来たなら、何時でもきっぱりと区切りをつける覚悟を決めていた。

しかし一向にそうなる気配もなく、親子のような愛人のような関係が微妙なバランスの上に続いている。

「最近ふっと、愛の証に君の子供を産みたいって思うの。可笑しいでしょ、年甲斐も無くべべ（赤ちゃん）だなんて。欲しくない時に妊娠し、欲しい時には出来なくなっている」

一平は恵子の中に深い哀しみを見た。

「赤い糸があるなら、僕は恵子ママこそ、結ばれている其の人だと思ってるんです。

それと、心はコートのように簡単に着たり脱いだり出来はしない」

恵子は一平に手を添えて首を振る。

「でも情愛は陽炎なの。熱病のように、それは意思とは関係なく生まれ、そして滅びるのよ」

日本は空前の好景気に沸いていた。

しかしバブルが騒がれ始め、その反動で消費税導入、増税、土地法の規制等々。

宗教党の組織拡大やマドンナ旋風の社会主義党の伸張と共に徐々にではあるがデフレ政策が国民支持の元に施行され始めていた。

清貧、平等、地価物価値下げ、働き過ぎ批判、そして自粛。

恵子は（自粛）なる言葉をゾッとするほど嫌っており、海外移住を真剣に模索し始める。

「世の中は豊かさの反動でケチケチした安っぽい社会平等主義みたいな物を求め始めている。

夢も希望もない社会が良いのか悪いのか、それは問題じゃない。全てに自粛を求める窒息するような世界では、リブラ（天秤座）生まれの優雅を命にする私は生きられないわ。

自由を束縛されるのは我慢できないの。私は誰が何と言おうとしみったれた、互いのチクリを楽しみにするような貧乏社会主義思

想より、豊かで自由なバブルが好き」

恵子は付け加える。

「何時も明るく笑っていたいわ。

笑うのは甘くて愉快なこと。誰もが甘いものや愉快なことが好き。

何時も甘やかしたり、甘やかされたり、楽しませてもらったりして、笑って過ごしたい。

だから笑いのない、お互いに見張り合うような世界には住みたくないの。

自粛、自粛！皆がそう言っているとそうなるのよ。強い想念は必ず実体化するわ。

当てにならない明日のために耐えるなんて真っ平。

そんなのは忍耐マニアの独裁国家かカルトな宗教団体に任せておけば良いの。

……ね、そうなったら、北アフリカに行っちゃおう！」

八話（後書き）

これにて竹原恵子との回想編は終了。
次回は一話からの続きとなります。
この辺もうちょいスムーズにつけられないものかと思索中

九話

大悲山行きの依頼が師の美田村からもたらされたのは、四年生の夏期休暇直前。
最後の学生選手権に向けての合宿一週間前だった。

稽古を終え、数日ぶりのアトリエ。

昼間、道場で体力を振り絞ったにも拘らず、若者の精力は尽きることない。
何時ものように、微睡み、触れ合いながら会えなかった数日間を話し合うのだった。

一平は美田村からの依頼を伝えた。
今夏。つまり選手権試合後に、福島県相馬の小高・大悲山道場なる所へ、
ＶＩＰな人物――牧野修也氏のお供をして行かねばならない、と。

恵子は驚きに目を見開いた。
「牧野修也って、ライオンさんのことじゃなくって？」

「ママが牧野先生を？」
「びっくりだわ！　ライオンさんは私の初恋。そう、おませのおしゃまっ子が憧れた初めての男性なのよ」

暫し、恵子は呆然と一平を見つめた。
「一平君、三年前に告げた君のホロスコープを憶えていて？」

「それが……？」
「多分、その時が来たんだわ」
「その時って，まさか？」
「大悲山道場へ、……しかもライオン先生と一緒だなんて。
彼と道場主の七郎先生は死んだ父の幼友達で、私にとっては叔父さん以上と言える存在」

恵子は来るべき時が来たのを覚った。大人の恋には哀しさと割りきりが伴う。
「より素敵な世界が開かれる。……新たな人生の門出になるんだわ」

恵子は夢見るように南相馬の思い出を語り始めた。
「私の心の中にそっと潜んでいる宝石のような思い出。
……少女の私にとって小高は偶然と不思議の入り混じった奇跡の町だった。
一つ一つの儀式や習慣、お祭り、特異な伝説、異形な人々、ドキドキする事ばかりで夢のような日々……」

仄かな照明に映し出される恵子は微かに桃色に染まり、甘酸っぱく幻想の世界に誘う。

「春の明け方だった。
パパとママンと小高駅に夜汽車から初めて降り立った時、構内から空一面に飛び交っている生き物の群れに私は呆然とした。
そしてそれらが蝙蝠と知った時、恐怖に慄いたわ。

小高に対する最初の印象は、不安で一杯だった。

パリと横浜でしか暮らしていなかったので、田舎暮らしに恐れを抱いていたのかも知れないわ」

恵子は淡々と話し続ける。

「北国の春は言葉では尽くせないぐらい美しいの。雪解けのせせらぎと同時に弾けるように花々が咲き始め、野や山、見るもの全てが花で覆われる。

慣れてくると、初めの印象と裏腹に、全てが輝きを帯びて来た。

茅葺の古民家を手直ししたアトリエ兼我が家、明治に建てられた古色蒼然とした小学校、日曜学校の蔦の絡まるバプテスト協会……。

取り分け幼い私を惹きつけたのは毎月のように催されるフェットゥの数々だったわ」

「フェットゥ？」

「フェステバル。川祭り、野祭り、海の神祭り、秋祭り、盆正月はもとより、

片田舎なのに協会の関係でクリスマス、イースター、ハローウインまであったわ。

それに今もって良く分からない意味不明のもの。

天神土着祭り、風花祭り、長者祭り、判官祭、牛頭祭、甲子大国祭り、有名な相馬野馬追い祭り、恵比寿講、等々、数えたら限が無いわ。あそこはお祭りと歌の郷」

「野馬追いなら、母からちっとばかし……」

「もう、最高のイベントなの！

戦国時代以前から行われていた相馬藩独特の野馬調教を兼ねた軍

事訓練がルーツ。
野馬追いは昨日のように鮮やかに胸の中にあるわ。
祭が近づくと、男たちは先祖からの血が騒ぎ始め、俄かに慌しく落ち着きがなくなるの。町全体が異常に活気づいてくるのが感じられた」

語り部は目の前にその光景を見ているかのように瞳を輝かす。
「ほら貝が鳴り響き、農耕馬から一時の衣替えした騎馬が駆け巡り始める。
宵祭りが開けると、中村市（現、相馬市）で流鏑馬の神事が行われ、愈々相馬領全域から一斉に戦国さながら鎧兜に身を固めた約八千の騎馬武者が一路原町雲雀ヶ原へと行進を始める。
轡を叩いて相馬流れ山の歌を合唱しながらの行進はドキドキするほどカッコ良かった」

一平は次第に恵子の綴る物語へと引き込まれて行く。

「雲雀ヶ原で行われる神旗争奪戦は一度だけパパとママンと観に行った事があるわ。
灼熱の炎天下に村や町の名誉を賭け、人馬一体となり、打ち上げられた神旗を武者たちが鞭を使って奪い合う。
鞭の間を掻い潜って、神旗を獲得した若武者が九十九折の坂道を一気に駆け上り、名乗り所で両手を空に挙げ大音声で誇らかに一族郷土と自らの名乗りを上げるの。
額を鮮血に染め、汗まみれで雄叫びを上げる若武者の姿に、幼い私は恐れを抱きながらも感動に震えた……」

恵子は一息置いて一平を見つめ、やがて目を閉じて語り続ける。

「騎馬武者がそれぞれの村や町に凱旋すると大変な歓迎なの。背

中に背負った御護摩が奪った神旗の印で、町民はその数に応じ、一喜一憂する。
若き日の七郎先生は素晴らしく、御護摩の数が背負いきれない位だったわ。
町に騎馬が到着する頃には殆んどの武者たちは既に酒が入っており、宴は夜通し続けられる。
闊歩する馬蹄の響き、馬の嘶き、太鼓、笛、三味線、酔い客のざわめきと酒女の嬌声、至る所で燃え盛る篝火、行きかう鎧武者、祭り姿、取締りの警察まで陣羽織を着込んでいるの。
町全体が戦国時代にタイムスリップしたようだった」

語る恵子は過去にいる。
「次の日、野馬追いの仕上げの神事、白装束の乗馬自慢が繰り広げる日本版ロデオの野馬懸かり（神馬入れ）が小高妙見神社に行われると、いよいよ祭りの最後を染める火祭りが始まるの。
子供たちがボロ布で作った灯油ボールが旧相馬領全域至る所で着火され、見渡す限りが火の海となり、その中に間断なく花火が打ち上げられる。
野山、田畑には無数の蛍が飛び交い夢のようだった」

「見えるようです」

「でも今は農耕馬が存在しないから、一桁低い八百騎も集まれば良いところかしら」

囁くように語る恵子は慈愛に満ちている。

「野馬追いが終わると、お盆祭り。盆踊りに精霊流し、ブロンドの髪を纏めたママンの浴衣姿はそれはもう素敵で、私の自慢だった。
……夏が過ぎると練り歩くサーカスの音と共に秋祭りが始まるの。

旅芸人一座、見世物小屋、大道芸人、香具師、町外れまで続く露天商、等が一杯になって、それはもう楽しくって祭りの間中、ウキウキしていた。
猿芝居、蝦蟇の油売り、山がら（小鳥）の御神籤引き、思い出せば限が無いぐらい」

「まるで夢物語みたい……」

「そうね、あれは遥か夢の世界」

暫し恵子は感慨に耽っていたが、再び話し始めた。

「その秋祭りには不思議な人達が参加するの。
私たちは彼等をミシャセさんとかミイヤさん或いはハタイット、ヒックソスって呼んでいたけど、大体、千五百人ぐらいの老若男女子供が白い祭服で大悲山の方から沢山の驢馬を引いて降りて来るのよ。
決まって男は白衣の上に毛皮のベストを着込み、女は花の冠で飾っていたわ。
そして町からやや外れた場所にある甲子大国神社の広い境内で色取り取りのテントを張り、大バザールを開くの。
売り物は珍しい物ばかりで、一般客だけでなく、それを目当てに他所から所謂バイヤー達が大勢集まり、加えて駐留軍の米兵までが見に来るのでそれはもう大変な盛況だったわ」

「珍しい物？」
「例えば、竹や蔓、麻、木皮のような自然にある材料を利用して作った日用雑貨や装飾品、ミイヤの呼び名はそこから来ていると思うの。

それから野生の動物の毛皮、生きた小鳥や小動物。野鳥や野うさぎ、鹿、猪等野獣の肉の燻製、山野にある木の実、果物やきのこ、山菜、あるいは、漬物等の保存食。自然薬の類、山野草、貴石や宝石の類の鉱物、独特のガラス製品、山刀等の刃物類、見事な鉄製品、金細工、アンティーク物、自然石や自然木、黄金色の絹織物もあったわ。

彼等の祭儀用と思われる奇妙な器具、それに虫や飲料用の樹液に至るまで、もう全てが見慣れない、変わった物ばかりだった」

過ぎ去りし日に恵子は思いを馳せている。

「私はそのバザールが大好きだった。でも学校では子供が其処に行くのを禁じていたの」

「どうして？」

「彼らの異国じみた雰囲気のせいか、朝鮮戦争覚めやらぬ米兵が屯しているせいか、自由で危険な香りが漂っていたのは事実ね」

「ママは規制を守ったの？」

恵子は笑った。

「全然！夕方までパパとママンが迎えに来るまでブラブラしていたわ」

「不良だったんだ」

「そう、今も私は不良女よ」恵子は一平の首を抱え込んだ。

「彼等が神社の中央に組まれた舞台の上で踊る神事、天の岩戸踊りは最高にセクシーだった。

佳境に入ると、全裸に純白の薄い衣を一枚引っ掛けて腰紐で止めただけのアメノウズメのミコト役の舞姫は笙、篳篥、笛、太鼓のリ

トミックな楽奏に乗りダイナミックに踊る。
鈴と榊の枝を交互に振り回し、開ける胸と前をそのままに大胆に狂ったように腰を前後左右に振るの。
振り乱した黒髪と、汗に濡れて透けている衣装とで、最後には異様なまでの盛り上がりだった。
……雲ひとつ無い秋空、黄金色に染まった銀杏の下、半裸体で踊り狂う、抜けるように白い肌は子供心にも鮮烈な思い出だわ」

「それは日本人？」
「人種的にはノンね。肌は桜色のように透明な白さ、でも私やママンの様なヨーロッピアンの白さとも違うの。
髪の色は烏の濡れた羽のように艶やかな黒。背も平均的日本人より高めで、必ずと言って良いほど刺青をしていたわ。それと何人かに一人の割合で青っぽい肌の人がいた」

「青い？」
「そうなの、パトリースのような淡く青白い肌だった。竜の血筋と呼ばれていたわ。とにかく彼等は美男美女ばかりだった」
さらに思い出が蘇えってきたのか、恵子は声を上げた。
「そうそう、ミシャセ達は占い等も良くしたのだけど、ライオンさんは何時も、琵琶の名手で『聖なる愛人』と呼ばれていた特別に綺麗な占い師のテント小屋に入り浸っていたわ。私もそのお姉さんにいろいろなことを教わったの」

「教わった？」
「例えば、ハタイットたちが住んでいた妖精の国の話。……そう、命が永遠であることも。
ライオン先生はミシャセの衣装を着込んで、まるで彼らの仲間であるかのように振舞っていたわ。
私達には聞き取ることの出来ないミイヤの言葉を話し、寝泊りし

ている様子だった。
私を見つけると何時も『ジョリ・レーヌ』と、声をかけてハグし甘いショコラ等のお菓子をくれるのよ」

「ジョリ・レーヌ？」
「レーヌちゃんとか。可愛い女王と言う意味だけど、何故かライオンさんは初めからそう呼んでいたの。
パパと悪ガキ時代の仲間だった先生は、よく七郎先生と一緒に家に遊びに来たのよ。ママンともフランス語で話していたのを記憶しているわ」

一息置いて、恵子は話し続ける。

「市場でショコラを頂いたのをパパに報告すると、呆れたように『ライオンは元々はミイヤだからね。また草饅頭餅でも買っているんだろう』ってね」
「草饅頭餅って？」
「それがね、後で知ったのだけれど、肉体的に恋愛して金銭などの贈り物をすると言う隠語らしいの。
もちろんそれに伴って食べる草餅饅頭も実際に売り買いすることはするのよ」

「売春ってこと？」
「ミイヤにとってセックスはオープンで、一般の人達とはかなり生活習慣も感覚も違っていたから、親愛を込めた挨拶みたいなものだったかも」
「贈り物も親愛の一端？」
「今思うと、私が彼等に魅かれたのも、あの明るさと自由な雰囲気だったんだわ」

「恵子ママが三年前僕に話した夢と幻想の国、そして奇跡の人達って、このことだったんだ」
「それは違うの。話はもっと具体的な現実にある異世界のことなのよ。彼らの選ばれた一部のみが、行き来が許されていた所のこと。信じられないと思うけど。……ミシャセの祖先が渡ってきたと言う、遥か彼方に通じている、似て非なるホントに本当の世界」

それから恵子は急に声を潜めるように言った。
「昔、父から繰り返し教わった不思議な御伽噺だけど、その世界は私たちのこの世界と双子のように相似している鏡のような世界らしいのよ。
其処にはソックリな私たちもソックリに存在しているって」

「アランが去って、ユウマが死んだ時、私には生きる気が消え失せてしまっていたの。
その頃、私は取り憑つかれた様にキャンバスに植物の種だけを描き続けた」

「種って、果物とかの？」
「植物の萌える前の爆発力を感じたかったのかも。とにかく、他人はもとより自分ですら惹きつけられないような苦しく閉鎖的な」

恵子は悲しげに首を振った。

「そう、救いがたい自殺すら出来ない鬱。……その時、私は父の語りかける声が聴こえたの」

一平は身を起こして恵子を見た。母を亡くしている一平には、その話は生々しくリアリティがある。
「何て？」

「母を亡くしたもう一人のユウマが、鏡の向こうの世界で私を待っているって」

一平は驚きに見開いた。

「それも、はっきりと小高町に行けって」

「マジ？」

「狂人は真剣よ。そして、夢の門を通り抜けて向こうに居る相似のユウマに会うのが、藁にも縋ると言うか、今世に命を繋ぎとめる唯一の光となっていたわ。

それに、パトリースが後押ししてくれたの」

「パトリースさんが……？」

「パトリース・ド・ジェルマンは不思議世界なのよ。彼は有りとあらゆる世界と時代を、まるで実際に行き来して経験したかのように正確に細部まで話すの」

恵子は一呼吸置いて言葉を続ける。

「そのパトリースが鏡の向こうの世界を話してくれたのよ」

「信じたの？」

「絶望死か、それとも信じるか、ガセっぽいけど、選択肢はそれしかないように思えた」

「で、ママは……それから？」

「南相馬の小高に赴き、七郎先生に直接相談することにしたわ。

だって、私の範疇でそんな御伽噺をまともに相手にしてくれそうなのは誇大妄想っぽいパトリース以外、父の幼馴染で親友だった小高の七郎先生か、恋するライオンさんぐらいしかいないんだもの」

「それで？」
「七郎先生は、私の狂気とも取れる必死の思いを聞き終えると、私の目を逸らさずにじっと見つめていたわ。
そして、先生は徐に『昔から南相馬の奥山深く実際に在るといわれている一連の神秘的な伝説には興味を持っている。長い間喉に刺さった棘のように気になっていたが、その謎に踏み込む時が来たのかも知れん』って言ってくれたの」

「二十一世紀にもなろうと言うのに」
「如何して？世紀末だからこそじゃない」

一平は続きを促した。

「充実した素晴らしい夢のような日々だった。とにかく、先生は人が変わったように、精力的に多方面の方々を持ち前の弁舌で説得し、協力を要請しまくったの。
そして、相馬地方に関係あるリタイアした財界人、歴史家、科学者、詩人や棋士、そして現名士に至るまでの錚錚たる顔ぶれの仲間たち（閑人クラブ）を立ち上げた。
名づけて、鏡の国解明プロジェクト或いは鏡の国のアリス物語に基づいたアリス・オペレーション」

話す恵子の瞳は輝いている。

「それはもう、驚異的な人脈。七郎先生は、元来その手の話は端から相手にしないタイプと思えたのに、意外や意外、あの時は私の殆ど根拠のない藁にも縋る狂気の盲信と、先生の郷土伝説の謎に挑戦したいと言う情熱がピッタリ合致して、寧ろ私より積極的にしかも熱烈にことを進めていったわ」

「皆も夢物語を信じたの？」
「信じたがっていたわ。先生のカリスマかも知れないけれど、年配の方たちが年甲斐も無く皆一様に、新しいオモチャを見つけた子供のように夢中になっていた」
「お祭りみたいに？」
「そうね、あれは生き甲斐の炎。私にとっても命を求めるお祭りだった」
恵子は遠くを見るように淀みなく話し続ける。
「それにまたメチャ、七郎先生が素敵でカッコよかったの。私はオペレーションを仕切っている先生の迫力と魅力に痺れっぱなしだった。
もう、果てることの無いデスカッション、山のような古史や南相馬の古文書等を何日も首っ引きで調べてくれたり、ヨーロッパに居るライオン先生にも幾度も連絡を取ったりしたわ。先生は多彩な人脈をフルに活用し、全てのお弟子さんにも協力を呼びかけ、海上探査船やヘリコプターまで手配したほどだった。
そして、三ヶ月ぐらいの試行錯誤のすえ、私たちは遂に伝説の世界の入り口、阿武隈の奥の洞窟に辿り着いたの」
「待って！……本当に本当の話？」
「為せばなることもあるのよ」
恵子は信じられないような顔の一平に、くすりと笑った。
「もう、七年になるわね。……月日の流れるのはあっと言う間」
「で、ユウマ君に出会うことが出来た？」

「ノンよ、所詮はメルヘン。メルヘンの世界は入り口を見つけるまで。
中に入った七郎先生達と私は、異世界に導くはずの洞窟の中の小径が、どうしようもないほど完全に塞がれているのを見たわ。地震か何かで岩が崩れていたの」

「それで？」
恵子はそれまで自らを支えてきた奇蹟の夢が果たし得ないと分かった時、込み上げる感情に七郎の胸に縋って泣きじゃくったのを思い出した。
「諦めるしかなかったわ。……でも、私的には無駄じゃなかった。その扉の向こうにユウマが生きているって実感だけで十分だった。希望は生きる最大の糧。そう考えれば、途が閉ざされていて良かったのかも」

「七郎先生たちは？」
「諦めきれず、心底から悔しがっていたわ。中には削岩機を入れて岩を取り除き、さらに何とか夢を遂行しようと主張した方もいたけれど、七郎先生が諸々の状況に鑑み、果て無き夢の終了を宣言したの。そして私には、最高に素敵な慰めのメルヘンを語ってくれた……」

恵子は我に返ったように顔を寄せた。
「こんな取り留めの無い空想っぽい話、本当に聞きたい？」

「七郎先生の話って？」
「恵子が考えることは、向こうの世界のユウマも考えるはず。だから、待っていればユウマは何時の日か此方に必ず迎えに来るって」

「ママはそのメルヘンを信じ、待ち続けることにしたんだ……」
「そう！そして、三年後に愛しの一平君が目の前に現れたの」
「本物じゃ無いけど」一平は溜息を漏らした。

「ううん。私にとっては、寧ろ本物よりリアリティがあるわ。
……それに、そんなことはもういいの。この世で本当に大切なのは結果なのだから。人生には解決なんて無いのよう。
ただ、進んでいくエネルギーがあるだけ。そういうエネルギーを作り出さねばならない。解決はその後よね」
恵子は物憂げに欠伸をした。

それから、一頻り南相馬時代の取り留めのない思い出話を語り、やがて二人は一時を惜しむように抱きあい、眠りに落ちて行った。

＊　＊　＊

全日本学生選手権を終え、夜の宴会用に着替えるためアトリエに着くと、テーブルの上にメモが走り書きしてあった。

【素晴らしい活躍、テレビで見ました。デジャヴに出るので遅くなります】

一平はシャワーを浴び、着替えて歯ブラシをしながらアトリエをぶらぶら歩き回り、今挑んでいる恵子の大作を見た。

フレスコ画を思わせるアクリルの擬似古典的手法が駆使されている。

夕暮れの中、葡萄棚の下で一房の葡萄果に片手を添え、もう一方にパンフルートを持っているギリシャ風のトーガを身に纏った若者が描かれている。

特徴である深い光と陰の演出に加えて、日本画と西洋古典画のミックスが窺われ、特にその絵は静寂の中から奥深い神秘性を漂わしている。

そこには恵子が言う霊的感動があった。

竹原恵子とは？

画家であり、心蕩かす歌姫。

美大心理学講師、酒場の女、占い師、慈母、セクシーで官能的な女。

冒険家、遊び人、自然保護運動家でベジタリアン、多面性を持った不思議な自由人。

――そして、一平の愛するアマン。

十話・打ち上げ

新宿の宴会場は日応大剣道部員と関係者で満杯になり、二階のフロアーは貸し切り状態だった。

一平は今大会のヒーローとして、お祝いと、慰めを受けた。

今大会における真の個人戦優勝者は一平であり、審判は誤審だと。

そして団体戦、大将を務めて見事帝応大を三位に導いた功績を皆一様に賞賛した。

一平は時田（カマッキ）に決勝戦前のアドバイスを感謝した。

「適切な助言、助かったよ」

「でも、結果が結果だからね。因みに、聴こえてくる呪文のようなのは、お前のマントラ（真言）じゃないかな」

「マントラ？」

「古代インドの言い伝えで、人は夫々魂の秘密言葉を持っているって」

「魂の？オカルトかぶれを振るなって。結構お前を頼りにしてんだからさ」

「馬鹿ね！現象を素直に受け取らなくちゃ、物事は進展しないのよ」

「カマッキ、医者っぽくなってきたじゃん」

「全く！　その内、高い請求書を回して上げるわ。

……ところで、私をカマッキ言うの止めてくんない？　女っぽいのは、四人姉妹の下の末っ子で育ったせいなんだから」

急に義明は声を潜め、
「三年生の亀井理恵、私のこと、何か言ってない？」と、尋ねた。
「理恵さんが、カマッキのこと？」
「一平と親しいから、何か話してるかと思ったんだけどなあ」
「意味が分かんねえ」
「付き合いを申し込んだんだが、梨の礫なのよ」
「お前が理恵さんに？」　一平は噴きだした。
「私が恋しちゃ可笑しい？」
「いや、正直、意外にイケてる組み合わせだと思うけど」
「けど？」
「お前の素晴らしさが分かるほど彼女大人かな？」
「ホント、理恵が一平ぐらい大人だったらね」
義明は席を移していった。

「先輩！おめでとうございます」　涼やかな声。

大きい瞳だ。
顔を合わせる度に何時も一平は感嘆する。
噂の亀井理恵がビール瓶を持って目の前に座っていた。

「噂をすれば、何とか。今まで医者の卵と君の話しをしていた」
「それ、時田先輩ですか？ろくな噂じゃないんでしょう？」
「君ほどクールな人はいないってさ。付き合いを申し込んだんだって？」
「私なんかには、もったいなさ過ぎて無理に決まっていますわ」
と、手を振った。

「奴は良い男だよ。
変わってるけど、人間がデカく誠実みがあるし、付き合うのも悪くないと思うがな」
理恵はビールを一平に注ぎ、
「決勝戦は残念でしたね。結果は悔しいけど素晴らしい試合でした」と、微笑んだ。

「いや、君こそ三位入賞おめでとう。理恵さんがあそこまで行くとは思わなかった」
「今回は出来過ぎと思いますが、ちょっぴり自信が付きました」
「優勝した本山ゆりとの試合を見る限り、理恵さんと殆ど差が無いように思えた。
因みに優勝したゆりは僕と同じ三島武錬館道場の出身で、昔から良く知っているんよ」

一平はこの中性的で、浅黒く引き締まった一見エジプト美人を思わせる気さくな後輩を気に入っている。

「マジ、力的には君のほうがちぃっと上のような気がするんだ。
……ただ、僕も理恵さんも言えることは試合が巧いほうじゃない。その辺が課題だね」

理恵の声が跳ね上がった。
「先輩と同じなんてとても光栄です！」

「理恵さんには、来年十分学生チャンピオンの可能性があるのでマジに期待してるよ」
注がれたビールを一平は一気に飲み干した。

「メチャ感激！　佐々木先輩に冗談でも『期待する』って言われたなんて、知れたら羨ましがられて大変だわ。
先輩は全女子の憧れの的なんです。他の学校の部員なんかには一緒に稽古をしているだけで羨ましがられるんですよう」

「そりゃ、まるでアイドルじゃあ」
一平は笑い飛ばした。

「本当なんですよう。その辺のアイドルなんて目じゃないんだから。
だから決勝戦なんて先輩の応援で女子部の盛り上がり、凄かったんですよう。
もっとも、私的には相手の戸田さんも好きな選手だったのでドキドキものでしたけれど」

理恵はどこかむきになっている。
一平は笑いながら理恵にビールを注いだ。

「戸田君がタイプ？」

顔を微かに赤らめて理恵は手を振った。
「違いますよう。戸田さんの剣道に惹かれるんですっ」
「それにしても、彼の剣道が好き言うのは中々。今回の試合で彼の剣の深さを思い知らされた」

理恵は頷く。
「正直に言えば、戸田さんの巧さを先輩の強さが打ち破るのは難しいと思っていました」
「僕もそう思っていた」

「実は先輩と戸田さんの試合で不思議なぐらい戸田さんの狙いが読めたんです。
最初戸田さんが出頭面を打つための罠をかけ、それを先輩がその裏をかいて引き面を打った時、これは『凄い試合になる』って思わず鳥肌が立ちました。
チェスの名手のような剣道をする戸田さんが逆に心理的に追いこまれて行くのが見えました。戸田さんの意図が見破られ見事に粉砕されて行ったって感じです。
ホント、あの先輩の上段には驚きました。見ていてあんなにワクワクした試合は初めてです」

「結局は負けたけどね」
「まさかあ、あれは先輩の勝利ですよう。相手の戸田さんだってきっとそう思っているはず」

「理恵さんの専攻は何でしたっけ？」
「心理学ですけど？」
「鋭い訳だ」

「それって褒めているんですか？　私のは、心理学でも児童教育心理学なんですう」
そして、急に思い出したように
「そう言えば戸田さんは運動心理学が専門ですよ」と付け足した。

「さすが、戸田フリーク」
「あら、先輩の事だったら、もおっと、もっと良く知っていますよう」
「怖いな。あまり知らないでてよ」

理恵は突然声色を変え、手を優雅に上げたまま預言者よろしく話

し始める。
「ところが、……見えるんです。例えば、……明後日、先輩はＶＩＰな人のお供をして……東北の方向へ……電車に乗っています」
驚きに、一平は固まった。
「どうして？　まさか……本当に？」
その様子が可笑しかったのか、理恵はクスクスと笑い始めた。
「ヒロコに教えてもらったんですよ」
「ヒロコ？」
「牧野・ゼッターランド・ヒロコですよ。知らなかったんですか？……うーん。言っちゃいけなかったのかなあ。福島に同行するみたいですよ」
「同行する？」
漸く笑いを収めた理恵が説明する。
「ヒロコってグラビアなんかに結構出ているんですけど、先週も週刊エンゼルに確か天才美人剣士ってタイトルで出ていました」
「週刊誌は結構見てるんだけどな」
「私と二回戦で対戦した相手で延長戦になった京府大の」
理恵は探るように一平を窺い、
「私が小手を決めた。と言っても、……分かりませんよね」と、説明を続ける。
「思い出した！背が高くて変わった掛け声で男の子みたいな」
「そう、そうなんです。高校の同級なんですけど、少年っぽいっ

て言うか。
彼女、牧野博士の秘蔵孫なんです。めちゃめちゃ優秀なの。アメリカの飛び級で既に博士号の学位を取得しているって。
とっくに教授に成っていてもおかしくないぐらいなんですよう。
綺麗で、剣道だって学生選手権に出るぐらいだから、天は二物どころか三物を与えたって言うところ」

そして声を急に潜めて悪戯っぽく囁いた。
「それがね、先輩の大ファンなのう。もう、クレージーって言ってもいいぐらいなんです。
先輩が一緒に行くのを知ってから、毎日のように博士に連れて行くようにおねだりしたって聞いたわ。
……あ！　この話、私が言ったのは内緒にして下さいね」

「理恵さんが牧野先生を知っているとは……」
「シュタイナー教育理論研究の第一人者なんです。
……もっとも、それも最近知ったことで、昔はただの優しく楽しいヒロコっちのお祖父ちゃんって感じに思っていました」

理恵は独り言のように呟いた。
「私も行きたくなっちゃった」

一平は多少の期待を込めて、
「来ればいいじゃん？戸田君も来る様なことを言ってたよ」と、誘った。

＊　＊　＊

会は十時を回って漸くお開きとなった。

朝からの激闘と宴会の酒に、流石の一平も疲労を覚える。
多少名残惜しい気持ちを抑えつつも、二次会の誘いを断り、帰ることにした。

出際に、義明が声をかけてきた。
「理恵は如何だったの？」

「カマッキは勿体無いほどに素敵過ぎるってさ」
「如何言う意味かしら？」
「押せば、何とかなんじゃない」

「ＯＫ！　来期に請うご期待だわ。一平、美田村先生の預かり物忘れないでよ。
それから先程、東体大の畠山師範からの伝言。『十一時までクラブ異空間に居るので顔を出せ』ってさ。取りあえず、伝えたわよ！」

一平は手を振って応じ、外へ出た。

十一話

畠山は一平にとって何でも相談できる兄貴のような存在である。しかし、竹原恵子と半同棲を始めてからというもの、何とはなしに足が遠のいていた。

一平と恵子が出会う切っ掛けや、以前からの畠山と恵子の付き合いを考えると現在の状況を報告しなければいけないのだろうが。会いたい反面、億劫で今に至っている。

表に出ると夜の風が頬を撫でた。雑踏のざわめきが心地良い。

東体大は十年ぶりの団体戦優勝を果たしたので、さぞ大騒ぎをしているのだろう。

以前何度か足を運んだことのある、宴会場から徒歩五分ぐらいのクラブ異空間には、東体大剣道部員二十数名と畠山が二次会の酒宴を上げていた。

ドアを開けて室内に入るや、畠山が大声で叫んだ。

「今日のヒーローが来場だ！ようこそチャンピオンに成れなかった裏チャンプ」

皆が歓声を上げ、拍手で迎えた。

見慣れた東体大のライバル達が座っている。

拍手に応えて一平は手を挙げた。

「団体優勝おめでとう御座います！ちっとばっか、挨拶に伺いました！」

一人一人と握手を交わし、畠山の隣に座ると一平は耳打ちした。
「今日は大分飲んでいますんで直ぐに帰ります。先輩の顔を久しぶりに見に来ただけですので」

畠山は落ち着かない感じだ。
「いや、中々お前とも話す機会がないからなあ。今日誘ったのは俺の近況を報告しようと思ってな」

畠山は立ち上がり、カウンターでバーテンに何か指示を与えているタンクトップの女性に手招きした。
「うちのマネージャー、戸倉みどり。この店は戸倉のお父さんが経営しとる内の一つ。こっちは……」
紹介を遮るように、
「もちろん、知っているわ、有名人ですもの。三年ぶりかしら？以前、先生に紹介していただいたわ……」

一平にとって忘れもしない。
悲嘆のどん底にあり、悶々と無為に過ごしていた時に誘われた、あの恵子と出会った日の酒食会である。
ちょっと刺激的な思い出だ。

＊　＊　＊

隣に座った初対面のみどりに、一平はいきなり耳元で囁かれた。
「君って素敵、私の好みよ。今度遊ばない？」
そして、素知らぬ気にテーブル下の脚を絡めてきたのだ。

ギョッとする一平に含み笑いをしながら、
「そんなに吃驚しないで、恥ずかしくなっちゃうでしょ」と、ヒソヒソ声で告げる。
驚いた事に、戸倉みどりは一平と同じ一年生で十八歳であった。
「剣道って面白い？」
一平は触れている脚が気になり、答えもそぞろだった。
「みどりさんは剣道部じゃないの？」
「とりあえず、今は剣道部。最初は新体操部だったの。でも生活規制が厳しすぎて、直ぐに諦めたわ」
「規制って？」
「酒、煙草どころか、食事制限もあるの。睡眠時間から男女交際までありとあらゆる規制」
みどりは声を潜めて言った。
「セックスまで禁止なのよ。信じられるう？」
「一番きつかったのは？」一平まで声が低くなる。
「食事制限かな。一日量がダイエットのため、スプーン一杯の蜂蜜なんて時もあったわ」
「で、どうして剣道部？」
「畠山先生よ。結構、先生って人気あるのよ。ね、今度デートしよう。私、帰国子女のせいかステディがいないのよ」
みどりは密かに一平の手を握りしめて尋ねた。

「私を嫌い？」

一平は小声で答える。

「とんでもない、みどりさんは素敵だし……。でも今は、そんな心境になれない状況なんです」

みどりは気抜けするほどあっさりと脚を解いて、手を離した。

「残念だわ。でもその状況言うのが変わったら連絡してね。一平君なら即ＯＫよ」

その夜、些かハイテンションになった一平少年は酒食会の最後までみどりの側で飲み騒いだ。

＊　＊　＊

三年の歳月はみどりを落ち着いたエレガントでシックな雰囲気のレディにさせていた。

畠山はみどりの肩を抱きながら照れくさそうに告げた。

「婚約したんだ。来季、結婚する予定になっとる。自由で優雅な独身も年貢の納め時ってこと」

「あら、私は別に縛ったりしないわよ。今まで通り自由で素敵でいて欲しいわ」

「先輩、おめでとうっす！メッチャ嬉しいっす」一平は大袈裟なジェスチャーで声を上げて畠山に抱きついた。

みどりが席を外すと畠山は躊躇気味に言った。

「結婚式に当然お前と竹原恵子ママも来て欲しいんだが……、お前とその何だ。……ママの関係は如何言うのかな？……と思ってね」

「恵子ママは僕にとって母親代わりみたいな。ママにとっても僕は亡くなった息子の優馬君。言わば養子関係ってところなんです」

畠山はほっとしたように溜息をついた。

「すみません。わざわざ状況を説明するのも変なんで」

「美田村の親爺がね、……結構心配しているのよ。お前は先生の息子みたいなもんだから。会わせた手前、俺も多少なりとも責任があるんでな」

畠山は急に話題を変えた。

「そう言えば親爺、今日はすごく喜んでおったなあ。何しろ、女子のゆりちゃんの優勝、母校のうちが優勝、それにお前の活躍だろう。

団体に男女個人とくれば、武錬館にとっても、親爺自身にも最良の日だった」

一平が言葉を継いだ。

「それにその母校を優勝に導いたのが武錬館出身で大学後輩の純蔵監督ですからね」

畠山はグラスを持ち、嬉しそうに首を傾けた。

「ちぃっとばっかし、出来すぎだな」

それから、急に思いついたかに尋ねる。

「そうそう、俺の送った電撃警棒受け取った？」
「いいえ、まだ確認していませんが、どうして警棒を？」
「先生に『一平に護身用の何かを』って頼まれたのでな。俺の武器コレクションの中では結構な優れ物だぜ。
だけど一体、お前は大悲山に何しに行くの？」
「それが、良く分かんないんです。とにかく師の命は絶対ですから」
グラスを少し上げ畠山は片目を瞑った。
「それはそうだ。親爺の頼みは断れない」
「先輩は大悲山をご存知なんですか？」
「学生時代、美田村の親爺のお供で二度ほど行ったことがある。あの頃、七郎先生も元気いっぱいで、直接稽古をつけてもらった。それと、俺と先生の息子の広重君が、同年齢で当時、学生界きってのライバル関係でもあったんよ。
何度か稽古する機会に恵まれたが、生涯を通してあれほど厳しい稽古をしたことがないな。とにかく、強くて凄いのに尽きた。大悲山行きは、剣道馬鹿だった俺には視野を広げると言う意味で素晴らしい経験となった……」
青春時代の思い出を畠山は嬉しそうに話し続ける。
暫くして、クラブは騒然となった。
東体大の理事長と学長が取り巻きを連れて現れたのだ。

慌しさの中、応対に忙しい畠山に暇を告げ、バー異空間を退出した。

ビルの外までみどりが見送りに付いて来た。

「誘ったの、覚えている？」

一平は頷いた。

「あの時、好きな人と別れた直後だったの。純蔵さんは振り向いてもくれなかったし、誰かに受け止めて欲しかったの。私から誘ったのは君が最初で最後。結構本気モードだったのよ」

みどりはにっこり微笑み、握手を求めた。

「もう君が望んでも、遊んで上げれないわ」

握手した手をみどりは離さない。

「君のことは亀井理恵から聞いていたわ。あの子、小中学高校もずうっと私の後輩で幼い時からの付き合いなのよ。明後日、牧野先生と相馬の小高に行くんでしょう？」

一平は予期せぬ話の展開に驚いた。

「じゃあ、みどりさんは牧野ヒロコさんを知ってる？」

「ゼッターランドでしょう？でも、何故？」みどりはまだ手を離さない。

「同行するらしいんです。今日、理恵さんから聞いたんだけど」

「私と同様帰国子女、メチャ綺麗で、その上、天才だって。それにしても、理恵と言い、君の周りには美人が多過ぎるわ」

ようやく、みどりは手を離した。
「結果を教えてね。楽しみにしているわ」

十二話

アトリエに戻ると、まだ恵子は帰っていなかった。

風呂上り、バスローブのままカウチに寝転び、製作中の大作を眺めながら極冷えのアップルタイザーを飲んだ。

ＦＭラジオから流れて来るアラビアの祈りの歌が、妙にその絵にフィットしている。

クーラーの適度に利いている涼しい部屋。

力を使い果たした心地よい疲労感に程よいアルコール。

睡魔が波のようにゆったりと押し寄せて来る。

＊　＊　＊

砂漠の中、岩山の麓にオアシスの集落。

懇々と湧き出る清水は果てしなく透明で清らかで、深い湖底に魚燐の群れがきらめいている。

取り囲む棗椰子の樹々と草原。
たわわに実る果物と色とりどりに咲き乱れる花の群れ。
爽やかな香りに乗って、隊商と駱駝等のざわめきが遠くに聴こえる。

少年は白い衣装を風にそよがせながら蜜蜂と蝶の舞う花と緑の野を歩んでいた。

せせらぎの辺に花を摘む少女。
心躍る笑い声、薄紫の蝶が花から花へ舞うように美しい。

やがて、目にも鮮やかな夕日が地平線に沈み、祈りの歌が魂を鎮めるように地に響く。

満天の星と月の光りに照らされ、葡萄棚の下で少年は心を込めて葦笛を吹いた。

オアシスの畔にシェルターの群れ、煌々と照らされた篝火の中に行きかう駱駝、馬、商人、村人等の喧騒。

定められた旅立ちの時が来た。
煌々と照らされた月夜、広大な砂丘を隊商が越えるとき、駱駝の背からオアシスの輝きが遥か遠く、星の如く見えた。

＊　＊　＊

古時計が午前四時を刻む時、早朝の冷涼に目覚める。
何時の間にか、一平はバスローブのままカウチに寝込んでいた。
恵子はまだ帰っていない。

＊　＊　＊

恵子が戻った時、既に朝六時を回っていた。
「愛しの一平！メチャメチャ君が好き。何時までも、何時までも、愛しているわ」
芝居がかった口調で恵子が叫ぶ。
賑やかな御帰還だ。
はしゃいで抱きついてキスの雨を降らすかと思えば、涙を浮かべ、
「時の流れが二人の愛を追憶の彼方に消し去る時も……、思い出だけは心に輝き続けるの……」
と、日仏チャンポンに歌いながら踊りだす。
常軌を逸し、狂気じみている。
アルコールと恵子愛用アロマのローズが入り混じって匂った。
クーラーからワインを持ち出す。
「心溶かすシャトウデケィムよ！　アムールを包み込むメモリアル・アロマとブーケ。

運命に、乾杯！会って、愛して、別れ行く。何て悲しく素敵で残酷なの！」

狂騒の中、アルゼンチン・タンゴが部屋一杯に響き渡った。
ワインを一気に呷り飲み、髪を振り解き、パートナーのない一人踊りを始める。

恵子は嬌声を上げ一平の手を引き、狂気のダンスに一平を引きずり込もうとする。

やがて焦れたように、大きく喘いだ。
「ルガルデ（見て）！」瞳が濡れ、声が掠れている。

何と！恵子はリズムに合わせ、一枚一枚服を脱ぎ始めた。
パンティを脱ぎ、最後にブラジャーを取って一平に投げつけ、ハイヒールだけになる。

唖然とする一平に、全裸の女は仰け反るようにして笑った。
腰をグラインドさせて脚を開き、あるいはターンしてヒップを突き出し、扇情的に煽る。

流れる髪を両手で掻き上げては悶えるように乳房を揉み上げた。
ブラインドを透して朝の光に白く映る肉体の迫力、一平は息を呑んだ。

「襲っておいで！ギャルソン（坊や）」
恵子はヒールを脱ぎ捨て、一平を尻目に嬌声を上げてシャワールームに走り去った。

突如、狂暴で爆発的な欲情が駆け巡る。痛いほどの高まり。

瘧病のように震え、もどかしくローブを脱ぎ捨てるや、一平は咆哮を上げてシャワールームへ突入して行った。

ベッドに縺れ込み、飢えた二匹の獣は狂ったように貪り合い、明日が無いかに求め続ける。

十二話（後書き）

次回は牧野博士との出会いへと進みます

十三話・旅立ちと会合

出発の時間が迫り、空席は残り少なくなっていた。
「新たなる世界への門出」
恵子が繰り返し言った意味を、ぼんやりと考えている。

突然、太い張りのある声で一平は我に返った。
「佐々木君かな？」
中肉中背、白い麻のスーツにパナマ帽の老紳士がスレンダーなサファリ仕立ての女性を伴って立っている。

一平は慌てて立ち上がった。
「この度、ガードを美田村から仰せつかった佐々木一平です」

「牧野や。世話になる」老人は微笑んで帽子をとった。

「孫のヒロコです。御一緒させて下さい」鈴を振るように心地よく通る声である。

栗色の短髪。些か硬質の感はあるが、美形だ。
その深い緑色の瞳を覗いた瞬間、既視感に襲われる。

「アンナ……」
「アンナですって？」
「すみません。勘違いしたようです」
一平は自らの口から発した覚えの無い名前に戸惑った。

ヒロコはくすっと笑った。「ミドルネームがアンナなんですよ」

鞄を荷物ネットに置くのを一平に任せながら、席に座ると老紳士は開口一番に謝した。
「この度は老人の趣味に付き合わせて申し訳ない」
矍鑠として七十歳を越えているには見えない。銀髪なのを差し引いても六十歳前半と言ったところだ。
「独り行動が許して貰えん様になってしもうてな」
生きる伝説を前に、一平は緊張している。
老紳士は一平を見詰めていたが、唐突に
「額の小さな窪みは生まれつきのものかな?」と、尋ねた。
「はい。子供の時は結構目立っていたんで、ミッツメと呼ばれていました」
「私も三つ目小僧言うニックネームを付けられとった」と、自ずからの額の微かな窪みを指して笑った。
「これは第三の眼言うことにしよう。我々は特別に選ばれた仲間言うことや」
「先生はそうかも知れませんが」
「いや!姿形も君は図抜けておるがな。
ところで、……私の推理が当を得ていれば、今回は平穏な旅とは言いかねる」
「護身用の武器をと言われ、特殊電撃警棒を用意してきましたが」

老人は目を丸くした。
「学生剣道チャンプに特殊警棒とくれば、これ以上に頼もしいことはないな」
「僕はチャンピオンではありません」一平は否定する。
「テレビで試合を見せてもらったが、あれは君の勝ちや。ヒロコもそう思うやろ」
「はい、不可解なジャッジはさておき、ボクも佐々木さんが勝っていたと思います」
ヒロコは真っ直ぐに一平を見て答えた。
（ボク……？）
「スポーツ化と言えば、そうなんやろが、武道全体が分かり難くなってきているわな」と、牧野は言った。
「と、仰られるのは……？」
「柔道を例に取ると、効果、有効、技あり、それから至る所に指導なるものが付いて回る。
嘗ては無制限一本だけで優勢勝ちなる物がなく、一目瞭然やった。今は道衣を着たレスリング紛いや」
「剣道もそうなんでしょうか？」一平は漸く緊張が解れてきた。
「勿論や。場外反則なんて訳の分からん代物はなかったし、制限時間もなかったので、当然優勢勝ちもなかった。
斬り合い言う原点までが飛んでしまっていて、左小手、左胴は一本にはなり難いとか、袈裟斬りや手の甲は駄目とか、引き技で、間が切れてなければ一本にならない等々。様式に走り過ぎ言うか、武道としては退化やな」

「武道家・美田村の弟子として、常々ギャップを感じるところです」

「おお、ハンサムガイ言うのは耳にタコやったが、人物も中々や」と、老人は感心したように側のヒロコを見る。

ヒロコは紅を散らすように上気した。

「侍に師事しているんじゃあ、色々と大変やろ」

「先生は武道に精通しておられるようですが？」

「まあ、友人に七郎大先生みたいなのがおるんで関わりがなくはない」

「じゃあ、剣道を？」

「護身術として柔術のようなのも。当時は柔剣道両方やるのが普通でね。私は主に剣道やった。

もっとも、七ちゃんと剣道の稽古をした日にゃ自信喪失も良いとこやったがな……」

老人は感慨深げだ。

「ただ、七ちゃんは日本や学生のチャンピオンになったわけやないし、君や、彼が育成した優秀な弟子達ほどの戦績があると言うわけでもない。が、何といっても、彼の凄いのは武道を通して世の中に与えた影響や」

「……」

「彼はノーブル・サヴェッジ（高貴なる野蛮人）、日本男子は斯くあるべしの典型や。

蛮勇があり、信じた事は、不可能と思える事でも躊躇せずに実行

する。世間を恐れず、迎合する事もない。
しかも彼の情熱は伝染する。催眠術と言うか、あれは特殊能力やな」
「お祖父さまは、今でも七郎先生に何かにつけて相談するんですよ」言葉の端々に、祖父への仄々としたものが感じられる。
「七ちゃんの描いた夢は、自らを吉田松陰に準え、大悲山道場を世界に雄飛する現代の松下村塾にしたかった……」
「夢は叶ったんでしょうか？」
牧野は首を傾げる。
「そうやなあ、……彼の弟子は孫弟子の弟子までを加えると文字通り世界中に国籍人種年齢性別を問わずごまんと居るようになった。ま、夢ばかり語る法螺吹き言われているあたり、私と同じでね……」
「七郎先生は素晴らしい方ですわ」ヒロコが話を挟んだ。
「今回の旅は、人生の総ざらいみたいなもんでな。茨城に会っておかなきゃならん分身みたいな奴も居るし、まあ何かと面倒をかける」
特急常陸は上野を発し、一路福島の平駅（現いわき駅）を目指していた。
そこで各駅停車に乗換え、小高へ向かう。
一平は美田村から預かった手紙と分厚い古本を取り出し、牧野に手渡した。

「有り難い、何時も気にかけてくれる」
と、押し頂き、それから徐に毛筆で書かれた手紙を開く。
「何時もながら、達筆に恐れ入る」
牧野は手紙を読みながら一々頷き、一平に話しかける。
「一平君、君のことを言うとる。若干にして当代指折りの剣士であり、現在進行形で急成長中、とある」
「過分な言葉です」
「義之君にとっては息子のような者なので、息子の息子、つまり私・牧野の孫息子として……と、言うとる」
手紙から目をはなし、牧野はにっこりと微笑んだ。
「言うわけで、私は思いがけなくも念願の孫息子を得たようや」
「僕のような者が、偉大な先生の孫と言うのには……」一平は恐縮する。
すると、老人は真顔になり、
「私では君の祖父としては役不足かい？」と、声色を変えた。
「いえ、それは……その」
牧野の突然の変容に一平はしどろもどろになった。
「契約成立。一平君、その線で気楽に行こうや」
破顔一笑、芝居気たっぷりの老人は掌を差し出した。
「ヒロコ姫、素敵なお兄さんが出来たようやな。そうか、お前はそんなんじゃあ物足りんか……」

「お祖父様！」
からかう祖父をヒロコは睨んだ。
「まあ、そういうこと」

十四話・大悲山伝説

手紙を読み終え、牧野は渡された分厚い書物を取り上げた。

「これは貴重な逸品！良くぞ見つけたりや」

感心したように呟き、パラパラと本を捲り始めた。

スイッチが切り替わったように本に集中する。

ヒロコも一平も眼中にないようだ。

一平は側でにこやかに見守っているヒロコに話しかけた。

「内の亀井理恵がヒロコさんに宜しくと」

目を見開いたヒロコが聞き返した。

「理恵が？……何か余計なこと言っていたんじゃありません？」

「ヒロコさんのことは、綺麗でカッコよく、超優秀な幼馴染と」

「理恵って、お喋りが欠点なんです」

「でも、さっぱりしていて気さくで、話していると楽しくなる」

「そうなのよ。あの可愛い感じで、物怖じしないので、昔からすごくもてて、何時もボーイフレンドを沢山引き連れて闊歩していたんです」

「彼女の場合はもてるって言うより、もっと友達感覚に近いような気がしますが」

「それが、告白されたり、レターを貰ったり、大変だったんですよ」

それは理恵に関して意外な気がする反面、案外そんな感じがしな

いでもなかった。
「確かに。彼女を好いている奴が居ることは居る」時田の顔が浮かぶ。
「彼女、そういえば今回大悲山に来たいような話をしていました」
ヒロコの涼やかな瞳が大きく見開いた。「理恵が？」
「戸田君が大悲山に来るのを話したせいかもしれない」一平は話の前後を微妙に変えている。
「戸田って？」
「剣道学生チャンピオンの戸田……」
「まさか、隼人君のこと？」
「え、彼を知っているんですか？」
「家が近くで、幼い時からの遊び仲間ですわ。彼が大悲山に？」
「話しているうちに、一緒に稽古を大悲山でしようかって」
「理恵、絶対来るわね。隼人君を気に入っているし、それに何と言っても、佐々木さんは憧れの先輩ですから」
本を捲り続けている牧野にヒロコは語りかける。
「お祖父さま。聞いています？隼人君から理恵まで大悲山に来ちゃいそう」
「楽しくなりそうやな」老人は捲る手を休まず答える。
一平は牧野の手元を見て、息を呑んだ。
尋常ではない読む速さだ。ページを捲る速さが半端ではない。
しかも時々捲る手を止めては頷いている。読んで内容を吟味して

いる様子だ。

既に分厚い本の残り僅かに取り掛かっていた。

唖然としている一平に、ヒロコは説明する。

「お祖父様の読書スタイルなの。速いだけじゃなく、理解もパーフェクトなんです」

暫し、牧野の様子に一平は見入った。

「これで、内容を把握ってのは奇跡っすね」

やがて捲り終えた古本を再び押し頂き、笑った。

「こんなのに奇跡いう言葉を使っちゃ遺憾」

「速読法……ですか？」一平は興味津々だ。

「幼いとき受けた訓練の賜物や」

「昔、テレビで公開したことがあるんですって」得意げにヒロコが言った。

懐かしそうに牧野は話す。

「昭和三十年ごろ、ＮＨＫで『私の秘密』言う大人気の番組があってね。多少の自己顕示と、テレビ放送自体に興味があって出場したんや」

「どんな風に公開されたんですか？」

「スーパー記憶マン。局が用意した一冊の本を丸ごと一分間で完璧に暗記してみせる言う。

私が目を通した後に司会者が適当に開いた部分が何ページか告げてもらい正確に2ページぐらい大きな声で諳んじて見せたのや。

トリックやないのを証明するために手当たりしだいの本を、挙句の果てに観客の学生が持っていたドイツ語の本を原語のままドイツ

語で二ページ諳んじた時には、受け過ぎて局全体がパニックになったわな」

「それは……驚きます」

「でも、やり過ぎやった。反響が大きく、雑誌や新聞まで大きく取り上げたものやから、私の過去がバレてしまった」

「過去って？」

「戦犯容疑」

「戦犯？あの東京裁判のですか？」

「勝者による典型的な理不尽デタラメ報復裁判。終戦間際に私は気が狂ったと言うことにして、精神病院に逃れた。狂った真似は十八番やったから」

聞いてはいけないことを聞いてしまったような緊張が一平に走る。

老人は楽しそうに話し始めた。

「当時、私は十代にして軍の科学技術の開発部を担当していたのでね。

レーダーシステムを提案したのは英米より早かったし、レーザー狙撃銃の提案等。軍の官僚化で柔軟性を欠いていたのか、上層部は殆ど相手にしてくれんかった。

核の可能性と危険性も先駆けて報告したのやが……表向きのクソ罪状は精神破壊兵器、そして核兵器開発らしいんやけど、実際に使用した連中に残虐呼ばわりされ、糾弾されるのは真っ平やった」

「精神破壊兵器？」

「精神破壊どころか進歩兵器と言いたいぐらいや。まあ、冗談半分で始めた研究が採用されてね。目標物が５０メートルぐらい離れたところまで実験は成功したんやが」

牧野は自嘲気味にぼやいた。

「君はマリファナを経験したことがある？」

一平は頭を振った。
「いいえ、……友人に大麻ジャンキーが居ることは居ますが」
「大麻吸飲の酩酊状態になると著しく闘争意欲を削ぎ、一様に平和愛好家に変化してしまう。私は特殊な電気刺激で大麻の酩酊状脳波に変化させるのに成功した。
そのパルスをある種の電波で遠距離の敵にぶつけると言うわけや。成功した暁には全世界に敵味方を問わず無制限に発信すると言う妄想を抱いておった」
一平は老人の軽妙な語りが冗談なのか、戸惑っている。
「それって……悪いことなんですか？」
「戦争遂行者にはね。ベトナムでは米軍が自軍の大麻使用に悩まされた」
「表向き、と仰いましたが、実際は何っだったんですか？」
「麻の応用研究。日本の石油不足を補うために亜炭、菜種、海草、松根油等々研究を重ねた結果、遂に麻から細菌を利用して多量に上質なバイオ燃料を作るのを開発したんや。
肥料もなしに速成無尽蔵に繁茂する麻。人類にとって、ポスト石油として重要な意味を持つはずやった。
しかし、それはアメリカを中心とする石油メジャーには無視できない問題を孕んでいる」
「麻が、……ですか？」　首を傾げる一平。
「その辺は、後々たっぷりレクチャーしよう」牧野は楽しそうだ。
そして、声を潜める。

「ここだけの話やが、その代替石油燃料研究で知り合った楢崎皇月なる天才と共同で古代支那の仙道を研究している時、瓢箪から駒みたいな偶然に、核分裂核融合を従来のシステムから見ると比較にならないぐらい簡単に、さほどの施設なしにやれる方法を見つけ出したんや。

だが、それによって起こるだろう人類の悲惨な事態を考えると、軍には報告できなかった。後に広島と長崎に核が使用された報告を聞いた時、結果を予想していただけに戦慄した。あれこそ正に許されざる悪魔の所業と言う他はない」

「発表したら……？」

「世界のエネルギーシステムがドラステイックに変わる。何しろ核融合エネルギーの対消滅反応を利用すれば、たった五グラムの燃料で東京ドーム一杯分の湯を沸かせれるんや。

ま、……今でもまずいやろな。たいした設備もなしに、気軽に実験室や町工場で核爆弾を作れるのが分かったら危険すぎる。

棺桶に入るまで私の胸の中に収めて置かなけりゃならんやろ。核分裂に常温核融合。まあ、発想がコロンブスの卵みたいなもので、何れ誰かが気がついて発表するやろうがね」

「古代支那って言うのも吃驚です」

「今の核爆弾だって、元を言えばナチスが古代インドの叙事詩にヒントを得てるんで五十歩百歩や」

一平は話の展開に、次第に興味が募ってきた。

「戦犯が発覚してから、如何されたんですか？」

「当時、負け犬自虐史観真っ只中の巷において戦犯は極悪犯人扱いだったから、それは大変やった。

大阪と東京に『緑の家』言う戦災孤児や米軍の占領混血児の養護

施設が在った。そこに七っちゃんが関わっていたので、勤めていた教職を辞めて大阪支部の保護司として潜り込んだ」

「訓練の賜物と仰いましたけれど、教育機関か何かですか？」

「それこそが今回のテーマなんや」

牧野はにっこりと微笑んだ。

「専攻は歴史と聞いているが、君はサンカと呼ばれる人々を知っているかね？」

「いえ、専攻と言うのも恥ずかしいぐらいなんで」

「漢字では山に住むと書く、瀬振りとか岳人、サンワとも呼ばれている。

一般に定義されているのは、山地や河原などを移動して、竹細工や狩猟などを生業としている人々となっている。遥か昔から野山に存在している連中や」

老紳士は説明するのが楽しそうだ。

「一平君、彼等を知れば歴史の見方が根底から変わる。私は幸いなことに、幼い時から南相馬地方の特異性のお陰で彼等に接することができた」

牧野は特異な奥州相馬の概要を話した。

奥州相馬は、源頼朝の奥州征伐に転戦した軍功により相馬氏が奥州浮田国・行方群を拝領したのが縁で、その後元享三年に房総半島の流山からの国替えで移り住む。

その頃の国移りは大名が指定された領地を力で狩り取らなければならなかったのだが、相馬領では何らの抵抗なく、寧ろ積極的に占領者を受け入れた。

そのため、地侍や先住者が彼の地の経営に共同参加できる素地と

なり、他と異なる独特の風習が残ったと思われる。
相馬領の先住者は大蛇（おろち）と、呼ばれ、生活、習慣、文化全てにわたって大和人と異なる人種的にも異人と言える人々であった。

地元歴史では、彼らを秘教集団（エソテリック・グループ）だとしている。
しかし、当初は移封（国移り）がスムーズにソフトランディングが出来て豊かさを享受しては見たものの、所詮相馬氏は農地主体の石高経済の枠でしか経営を考える事が出来なかったため、その豊かさの原点であった熊野海洋氏族の地侍達や、流通貿易を主とする大蛇を理解することが困難だった。特に、オロチには土地への従属を厳命したため、実質経済力の落ち込みだけではなく、壊滅的な混乱を与えた。
そこで彼等は、地侍等と協力して、サボタージュ、陳情、デモ、逃散などを繰り返したとある。

「で、その効果はあったんですか？」

牧野は首を振った。
「一層の弾圧が行われた。そこで、一族は最後の手段に訴えようと計画するのや。
彼らがそれまで領内に作り上げていた治水のための河口堰や土手や疎水路を破壊し、農地を水浸しにする方法。それを、巨大台風の来る日に合わせて決行することになった。
追い詰められた彼らには、縛り付ける農地が駄目になれば流通経済に藩がシフトターンするのではないか言う一縷の望みやったんやろう。
しかし、計画は失敗した。その辺の事情は、大悲山の伝説として残されている」

「結局は……？」

「皆殺し。……言うことやが、一部が大悲山に立て篭もって抵抗した以外は逃散した。寧ろ弾圧は一族に協力的だった地侍の方に厳しかったんやな」
一息入れてから、牧野は話を続ける。
「ところが、藩にとっては問題が生じた。元来、相馬藩は三万石と思われたのが実は六万石だったという話が【相馬二遍返し】の民謡にモデファイドされているが、実質は農業生産に海産物と流通産業によってあがる収益をプラスすると十八万石級と言う信じられない豊かさがあったんや。それが、この事件後、急速に藩の経済がダウンして文字通り二から三万石になってしまう。焦った藩は急遽、海洋地侍の代表として鈴木氏を船奉行に、そして、サンカ族折衝役として大悲山の乱の鎮圧に功績のあった牧野氏を登用する」

「それって、ボクたち牧野家の牧野ですの？」
「我等が牧野家は以後サンカ族の融和に尽力することになる」
「経済の回復は？」
「六から七万石位までは何とか。しかし、残念ながら既にサンカの拠点は他に移動してしまっていた。
そして、皮肉なことに幕末時に隠れ山人の二宮尊徳が、疲弊していた藩の経済立て直しに寄与することになる」

「二宮尊徳って、薪を担ぐ金次郎ですか？」
「よう知っとる」
「中学に銅像がありましたので……」
「お祖父様、サンカって、お母さんやお祖父様がよく言っていたミイヤのことなのかしら？」
「そうや。牧野家は代々彼らと、密接な関係を保ってきた。それが為、相馬では牧野家はサンカの一族のように思われている。ミイヤは牧野家惣領をオダイ様と呼び、特別の敬意を表していたが、幼

少時にひょんなことで私は彼らの中で生活する羽目になり、そこで特別の教育訓練を受ける事になった」

一平は恵子の寝物語を思い出した。

「ミイヤって、ミシャセ、ヒックソスあるいはハタイットとも言いませんか？」

牧野は目を見開いた。

「それを知っとるんは吃驚や。ミシャセは『異邦人』、ヒックソスは『光を齎す人』、ハタイットは『鉄の人』ミイヤは『竹細工作り』と言うような意味や」

「先生は竹原俊英画伯を存じていると思いますが？」

「俊ちゃんは私や七ちゃんより一つ上で、悪いことをし捲くった仲やが……」

「画伯の娘で、やはり画家の竹原恵子さんから、相馬地方のお祭りの思い出にミシャセのことを聞きました」

「おお、ジョリ・レーヌ！……彼女とは二十年前まではちょくちょく会う機会があったんやが、私がパリに居った時に国際電話で話したのが最後になる」

「お祖父様がパリに居た時言うと、七年前……？」

「で、……どうして、レーヌちゃんと？」

「先輩に、彼女がママをしている原宿のショウパブ・シャンソンカフェで紹介されました。偶々亡くなった僕の母と同年齢で、母の故郷が小高町の隣の浪江町でしたので」

「お母さんは同郷者やったんか」

「三年前に交通事故で亡くなりましたが、彼女も僕と同じ年齢の息子さんを以前に事故で喪っていまして、同病相哀れむと言うか……」

「ユウマ言うんやなかったかな？」
老紳士は逸らさず静かに一平を見つめている。

十五話

「縁は異なものとは言うが……」
牧野は遠い記憶を探るように話し始めた。

「戦後間もなくパリに渡航した俊兄が、パリジェンヌのミレーユと一粒種のレーヌちゃんを連れて小高町に現れたのは十年後やった。
シルク・スクリーンの特異な画風でパリの画壇を席巻しての凱旋で、大家族の上に貧乏性の七ちゃんや戦犯まがいの私にとっては羨ましい限りやった。
彼の田舎家には画商やら米軍の将校が頻繁に訪ねては商談等していた。とにかく、私と七ちゃんは帰郷しては彼の家に入り浸っていた」

「ボク、竹原恵子先生にお会いした事があります」と、ヒロコが唐突に割って入った。
「友人に誘われて竹原恵子絵画個展を見に行ったんです。迫力に圧倒されて、二人とも絵の前に座り込んでいたの。その時、立ち寄られた竹原先生が話しかけてきたんです」

それが、如何にも恵子らしい。

「ボクにモデルになってくれないかって仰っるのよ」
「引き受けたんか？」
「まさか。……それでも、ボクがソルトレークでの、現代日本絵画フェアで竹原先生の絵を拝見して以来のファンなのを話したら、凄く喜んで名刺まで頂きました」

一平が尋ねる。「ソルトレークって、ユタ州の？」

「パパが教授なんです。日本では生命工学と言うのかしら？それと人類学」

牧野は思い出したように「そう言えば、トムから先日電話があって近々日本へ来るような話やった」と、告げた。

「パパが？嬉しい！　会うのは二年ぶりよ」

恵子が誘うだけのことはある。表情の変化が、花蕾の綻びのように清しい。

牧野は一平に「ヒロコの父のトーマス・ゼッターランドは私の娘婿になる以前からの友人でね。サンカ文化に非常に関心が強く世界中の類似の文化を研究している。今回も大悲山に随行したくてバタバタしておったんや」と、説明する。

「アメリカの教授がサンカ、ですか？」

「訳語によってのネーミングは異なるが、【彷徨える謎の人種たち】言う本を出しとる。

ボストンで二コラ・テスラ特別記念講演があって、彼と生前交流のあった生き残りの一人として、私も思い出を少しばかり話させて貰ったんや。その時、聴講しておったトムが興味を持って、アプローチして来たのが始まりやった。

一平君はテスラを知っているかな？」

「恥ずかしいことに、知らないことばかりです」

「最高の科学者や。多相交流システム、高周波発電機、テスラコイル、無線操縦システム等、彼がいなかったら、我々は電気利用を現在のように享受することは到底出来なかった」

「それにしては、あまり名前が知られていないような……」

「彼が名声を欲しなかったことや、あのエジソンが才能を羨み、執拗に誹謗中傷したこともある。でも、一番の理由としては、軍事

機密の名の下に、兵器研究所の奥深くにしまいこまれてしまったものが少なくない」

「軍事機密ですか？」

「物質透明化、粒子ビーム兵器、無線誘導ミサイル、磁力推進飛行、レーザー兵器、そして地震兵器等。何しろテスラの発表した理論や完成させた新技術が、当時の科学レベルを遥かに超えて革新的やった」

牧野は話し始める。

「私は幼少時から既に天才と言われておった。それで国の情勢も情勢であったので、今で言う飛び級言うのかな、旧制中学二年にしていきなり帝大の仁科先生等が率いる科学開発研究室にピックアップされた。

当時、綺羅星のように出現していた偉大な科学者たちの中で、ニコラ・テスラの評価はズバ抜けており、国としては早急に彼をマークする必要性があった。で、十六歳の天才なる少年に白羽の矢がたった」

「白羽の矢？」

「渡米してテスラに接近して彼の研究を調べて報告する、言うことや」

一平は目を丸くした。

「スパイみたいじゃないですか？」

「みたいじゃなくて、そのものや。ま、要請ではなく任意であったがね」

「先生は十六……ですよね」

「それがミソや。歳の割りに老成しているとは言え、十六は所詮十六。賽を投げるのに、三人の友に相談することにした。七ちゃん、

初恋の人、そして、ミシャセの羅門や」

「ラモン？」

突然、剣道選手権決勝の最中に感じた鼻から頭に抜ける例の痛みに襲われる。

「野性の力に熱いハートを擁する、理想のハタイットや。羅門は渡米には反対やった。

理由は『日本とアメリカは開戦し、日本は敗北する』と断言した」

「七郎先生は何て仰ったのかしら？」

「彼を家の方に訪ねると、幼いときから通っていた三本松剣道場へ稽古のため泊まりっきりとのことやった。

道場に赴くと稽古中だった七ちゃんがいきなり、『久しぶりに稽古をつけてやる。面を着けろ！』と言うのや。七ちゃんは私を散々にこ突きまわし、挙句の果てに『根性無し、一発ぐらい返してみい！』と、言いよった。

私はかーっとなり、怒りに火の玉のようになって飛び込むと、意外や面一本を打つことが出来た。すかさず『さすがライオン！天才は狙ったものは外さねえ』と激賞したんや。私は忽ちその気になってしもうた。結局、相談はしなかったが、彼に会って渡米を決意した」

武道おたくの一平には感動ものの話である。

「稽古で意思を伝える七郎先生といい、それを受け止める牧野先生。古の達人物語ですね」

「そりゃ、買い被りや」牧野は照れくさそうに笑った。

「初恋の方のも是非お聞きしたいわ」

「その時が今生の別れとなったな。『渡米するのは、避けられない宿命』その言葉に尽きた」

列車は陽光を浴びながら千葉に抜ける県境の山間をひた走っている。

暫し、外の景色を眺めていた老人は再び口を開いた。

「テスラとの取り持ちは、帝国機関が全てやってのけた。

……私はテスラの熱烈なファンが高じた、助手希望の貴族の子弟と言う触れ込みで、まんまと彼の少年助手として滑り込んだわけだ。

当初、思い上がりの私はテスラ何ぼの者やの気分やったが、やがて驚異の才能と壮大な計画に圧倒され、完全に参ってしまった。彼もまた私を大変買ってくれて、ボーイ言うて、まるで孫のように可愛がってくれた」

牧野は若き日の思い出に浸っている。

「エスペランチストを自任していた我々は、英語でもなく、彼の母国語でもなく概ねエスペラント語で交わされ、周囲を煙に捲いた」

「エスペラント？」一平には初めて聞く言葉である。

「当時、世界共通語になるだろうと思われていた言葉。ポーランドのザメンホフが考案した人造国際語」

「宮沢賢治に良く出てくるわ」ヒロコが言うと、牧野は頷いた。

「そう、イーハトーヴ言うのは岩手をエスペラント読みにした。私の信念やが、世界が一つになるのには世界共通の言葉が必要。そして、それは何処の国の言葉であってもいかん。

イスラエルは建国時、発音が不明だった古代ヘブライ語に適当な発音を当て嵌めて共通の言葉を作り、それを近代ヘブライ語として定めた。集結したユダヤ人の大半は英語を話していたにも拘らずや」

老人は話を引き戻した。

「彼と過ごした二年間は私の人生にとって何物にも変え難い」

「スパイの方は？」

牧野は肩を竦めた。

「報告したんやが、日本では役立った気配がない。不可視化実験、テレポーテーション、電磁気による時間軸の創出等々、レベルが高過ぎてチンプンカンプンだったんやろ」

「お祖父様、テスラの研究テーマは？」

「全世界に向けた無線送電の確立。これを可能にさせる理論が遠隔地球力学（レジオダイナミックス）。

彼は地球自体の電気エネルギーを利用することで、遠隔地への無線送電が可能になると考えた。 言わば、地球を『巨大なコンデンサー』として利用する。その研究が真骨頂を迎えたのはアインシュタインの特殊相対性理論の出現やった。

それは、質量、エネルギー、時間などは絶対的なものではなく、相互に変化しうることを証明したんやが、宇宙はその姿を我々の前に顕にし、重力と言う謎のエネルギーを解明する糸口を開いた。

以後、アインシュタインは自らの穴だらけ理論を補完するため、生涯をかけて追い求めたものが重力場と電磁場を統一する理論や」

「統一場理論ね」ヒロコが合いの手を入れた。

「ヒロコさんは科学に詳しいんですね」話が一段落した後、一平は話しかけた。

「ＵＳでの専攻が物理学なんです。テーマは量子物理ですの」

「量子物理？」

「お祖父様が仰るには、アッパラパー向きの研究なんですって」

「ヒロコのようにまっさらでないと量子学は追求できん。理論ありき、の従来の科学でなく、どんな現象もありのままに認知し、先

ず事実（現象）ありき、が基本やから」

牧野は今回の目的の一つが、その量子学のフラクタル或いはホログラフィー理論の私的な実践証明でもあることを告げた。

「相似性理論の糸口になる。阿武隈の奥地に磁場の強烈な変異があり、幼少時に、スターゲイトらしきものを経験しとるんでな」

「何故それがホログラフィーのフラクタルですの？」

「その門を通り抜けた亜空間彼方の世界は、概ね此方の世の映し鏡のように構成された奇跡の世界。古来語り継がれた日本の量子学とも言える万物雛形説は、厳然たる事実に基づいている」

「信じがたいわ」ヒロコは首を振った。

「ミス・ゼッターランド、これは我が人生における宿命の追求でもあるんよ」

一平は二人の会話におずおずと割り込んだ。

「あの……恵子ママと七郎先生たちが、その不思議世界に挑戦したとか……」

牧野は目を円くした。

「おお、その時、私は偶々パリにいたのや。七ちゃんから再三電話を受けた」

「結局は……」

「やるだけやって、駄目と分かるや、七ちゃんらしく、すっぱりと諦めたらしい」

ヒロコは話を引き戻す。

「お祖父様が、その奇跡のスターゲイトと量子学理論との関連に注目したのは？……」

「量子学に触れた初っ端、自らの経験が、その理論証明の入り口に居ると知った」
「済みません！量子論が僕には何が何だか……」
混乱気味の一平に牧野は噛んで含めるように量子論の概略を説明した。
「一平君、詳しくは、専門のヒロコ姫にじっくりと教えてもらうと良い」牧野は思わせぶりに目配せした。
頬を染めて睨むヒロコに、牧野は咳払いをして、話を戻す。
「その大統一場理論に最も近づいたのは、実践の場からアプローチして行ったニックに他ならない。
惑星地球からエネルギーを引き出すという大胆な発想、周波数を地球と共振させる事で電気を全世界に配ろうとする夢。
そして、その理論を追求するうちに重力場と電磁場との相関関係を知り、未踏の空間重力コントロールの核心に触れた」
老人は声を落とす。
「しかし、ニックは生涯をかけた研究成果を発表しなかった。
何故なら、その空間重力コントロールに関わる技術が、気象兵器・地震兵器という恐るべき怪物を生み出し、人類どころか地球生命体そのものさえも抹殺しかねないのを懸念したからや」
若い二人は耳を傾けている。
「ニックは米海軍の要請でレーダーを含めた全面不可視化（ステルス）実験プロジェクト、物質の透明化実験をフィラデルフィア・ノーフォーク港で半ば成功させたが、タイムワープや兵士が鉄壁に融合する等、実験に伴う超常現象で可なりの人的被害を受ける。安全のための延期を主張するニックは実験推進派のアインシュタイン、フォン・ノイマン等と激しく対立し、遂にはプロジェクトから外されたんや。

哀しいことに終戦が近い時期、ニックは寒いニューヨーク、マンハッタンのホテルの一室で、誰一人にも看取られることなく孤独な死を迎えたらしい。
戦争が差し迫った頃、私は帰国することになったんやが……」

「スパイは発覚しなかったんですか？」
「知っていたのか、知らなかったんか、彼は何も言わんかった。彼にとって、私は唯一の心開ける存在となっていた。……それは二人ともソウルブラザー（魂の同胞）であることを知ったからや」

「ソウルブラザー？」
「その頃、頻繁に会っていたカール・グスタフ・ユングの受け売りなんやが、同じ幹から分かれた枝のような関係」
「ユングって、心理学のユングですか？」
「そう、彼は躁鬱から脱して研究を再開していた時期なんやが、ウイルヘルム・ライヒ等を伴って良く訪ねてきた。カールが良く話したのはチューリッヒ時代の思い出話やった」
「凄い人達との交流ですね」

「だが、皆一様に孤独やった」
老人は思い出に浸るように遠くを見ていた。
「ニックが死んだ時、私は帝大の研究室に居ったんやが、彼の強い気配を感じた」

「虫の知らせ……？」
「そんな曖昧なものやない。マンハッタンにいた時の作業着姿で、研究室に居た時のように『ボーイ』って話しかけて来た。自然すぎて、本当に生身で来たのかと勘違いしたぐらいやった。最後に、エスペラント語で別れを告げた」

「幽霊？怖いわ」

一平は二人の会話に幽霊とか霊魂なる言葉が交わされるのに違和感を覚える。

「霊とか魂とか、お二人のような科学者も意外に迷信的なんですね」

老人は一平を見つめた。

「君は霊的体験或いは奇跡を実感したことはないんかな？」

「もちろんありません。非科学的なことは信じないことにしています」

「体験していないことは無いのやから、それは非科学的となる？」

「だと思いますが？」牧野の問いに一平は不安そうだ。

「例えばＵＦＯの存在を考える場合、見たことがなければ、存在するかしないかはフィフティで分からないというのが合理的な見方。不透明な箱の中にクッキーがあるかどうかは蓋を開けて見なければ分からないというわけや。外から見て、見えないからクッキーは存在しないと決め付けるのは非科学的やろ」

「確かに。仰るとおりです」

「正直、此の世では率直に見れる人が少ない。取り分け、権威のある先生方にはね。例えば、古代では地球は球体であるのが常識やったのが、コンスタンチヌス以後のローマン・カソリック支配において、地球は平らであることを強いられた。ガリレオの例を採るまでもなく真実を述べるのは命がけにも拘らず、球体説は絶えず囁かれておったんや」

「それは、如何して？」

「航海術。天測に頼らざるを得ない航海では、仮に球体として天測航行していた。船乗りにとって坊主の言う通りにしとったらオマ

ンマの食い上げやから、端からずうっと地動説やった。ま、何事も率直に見れば随分と楽や思うけど、そうは中々遺憾のが現実や」

牧野は付け加えるように、

「ところで、君は霊的あるいは奇跡のようなものは縁が無い言ったが、もう既に君は奇跡の中に居る。遥か生命の起源から連綿と遺伝子を受け継いでいる驚異の存在なのや。

つまり、遺伝子的には無限とも思える競争相手を尽く打ち負かしてきた天文学的勝利者。しかも細胞一つ一つにある五十数億の塩基の配列に構成されたＤＮＡプログラムの細胞は協力し合って組織、臓器、やがては個体を作り、個体は生きるためのエネルギーを細胞に供給している。

それと、我々は生まれ、必ず死ぬ。我々は執行日を知らない死刑囚や。そう、漏れなく我々は生誕と死、言う霊的体験を避けられない」

老人は一息つくと、内ポケットからアンティークと思われるお洒落な携帯用の皮に包まれた四角い小瓶を徐に取り出し、

「一平君。一杯やらんかね、二十五年物のザ・マッカランや」

と、蓋になっていた飲用のカップを差し出した。

カップは二重三重に重ねられており、多人数で飲用できるようになっている。

「便利っすね」

「女房の形見でね。私のためにパリの蚤の市で買ってくれた。英国製や」

「パリなのに、英国製ですか？」

三人はゆったりと打ち解けていた。

「呑み助の私のためによくスコッチを準備してくれたよ」

「ヒロコさんは飲まないんですか？」一平は尋ねた。

「ボクは宗教上飲めないんですの」

目を丸くする一平にヒロコは笑った。

「冗談ですわ。でも、飲む習慣がないんです」

牧野はグイッと杯を飲み干し、自らと一平のキャップに更に酒を注ぐ。

「美味い！極楽や」

「お祖父様はアルコールが入ると要注意ですのよ」と、ヒロコが囁いた。

ウイスキーの味はほろ苦く、匂い立つシェリーとピート香はあくまで深く熟成の時を感じさせた。

特急列車は既に千葉を抜け、茨城平野を走っている。

牧野翁はご機嫌だった。

十六話

「率直、人生はこの言葉に尽きる。

……例を挙げるが、戦後の進駐軍制日本国憲法から見れば、自衛隊（軍隊）は集団的自衛権の無い日本では違憲。しかし主権国が生存するためには集団的自衛権もしくは交戦権が不可欠。この矛盾を補うには属国として他国に生存を委ねるか、国を亡くすしかない。左翼リベラル派や自虐大新聞などが言うのには、他国のなすがままになれば、誘拐、麻薬、人身売買、偽札造り等の犯罪で食いつなぐ地上の楽園になれるらしい。生き残るために憲法に違反するか、憲法を守るために国が滅びるかやな」

「国が駄目になれば、憲法どころじゃないっすね」

「当たり前のことが分からなくなってしまうのは、物事を真っ直ぐに見れなくなってしまったからや。

だから、自分たちだけの利益のため国を売っても甘い汁を吸おうしているような政治家・宗教家とか、厚顔無恥なマスコミゴロのパフォーマンスに騙されてしまう」

牧野は不快そうに話す。

「馬鹿馬鹿しさに尽きるのは、原爆使用に正しい原爆か悪い原爆かの話や。

アメリカの原爆使用は正しかったとか、チャイナやソ連の原爆は正しい類の話。

原爆に正しいも糞もあるかい、最悪最低に決まっとる。核兵器は人類どころか地球の生存に関わる最大の挑戦や。……情けないことにそんなことすら見れなくなっている」

一平は博覧強記の天才翁に、懸念していることを尋ねた。

「あの……経済と言うか、景気は如何なんでしょうか？恵子ママは何かにつけ、先行きの暗さに日本脱出を仄めかしているんですが」

牧野が笑った。

「腰の軽いのは俊ちゃんのＤＮＡやな」

「自粛と聴くと、ゾッとするらしいんです」

「同感や。そもそも変動相場制言うのは良好な経済状態を保ち安くするための制度なんや。

現在のような軽度のインフレーションは最も快適な状態と言える。国が凡その相場設定を置き、増資（増札）と減資（回収）の金融調整でバランスよく保つようにすれば問題がない。

ま、デフレ脱却には増資の勇気が、インフレには減資の忍耐が必要ではあるがね」

牧野は一平を指差した。

「君の学校の若手経済学教授なんやが、バリバリのデフレ派でね、有力政治家の経済顧問などをしとるようやけど、これが口が巧い。柔和な語り口、人の良さそうな風貌。偶々話す機会があり、私が『デフレ誘導政策と構造改革をセットにしているようやが、それによって起こる不況で増える失業者等はどないするねん？』言うたら、『ワークシェアリングすれば良い』と吼ざいた」

「ワークシェアリングですか？」

「構造改革とデフレ策が鉄の塊のように不可分らしい。アメリカ近代経済学とかで、ポピュリズム政治家に信用されているようやが、こんな石屋の使い走りみたいな増刷金融大国共の尻拭いフェイクが、政策に採用されることになったらと思うね」

「そうなったら、マスコミが黙っていないんじゃあ……」

老人は鼻で笑った。

「馬鹿を煽っているのがマスコミや。このまま行くと、空前の好景気をバブルの一言で切捨てて、進んで苦渋の不況に突き進むようになる」
「マスコミが……ですか？」
「ポピュリズムがオピニオン・リーダーになりつつある。売国大新聞社さま等は、いまだに日本の自立を妨げようと画策している。彼らは胸糞悪い独裁国家を地上の楽園と上げ奉ったりして、戦後意図的に醸成されてきた無見識な日本人の自虐性につけこもうとする。人間は否が応でも他人に依存せねばならない故、共通の意識基盤としてのイデアを必要とするのや」

「イデア……ですか？」
「バベルの塔の崩壊後、共通の言語を失った人類は、それに代わるものとしての共通論理を構築し、競争したり協力したりしながら発展させてきた」

（イデアにバベルの塔！）
一平は頭がショートしているような気分になっている。

「再崩壊の兆しがする。聖書や神話、伝説の類は単なる架空の物語ではなく、必ず何らかの真実を反映しているってこと」
「再崩壊ですか？」
「共通言語に代わる共通論理が崩壊しつつあること。つまり、矛盾を矛盾と思わない不思議な意識の変化等や」
牧野は反応を楽しむように話す。
「例を挙げれば、戦闘禁止の軍隊とか、教育を否定する教師、加害者擁護の人権主義者、他国に護ってもらっている主権国、信仰なき祈り等を唱える宗教家、愛国心無き国会議員等。まあ、今日日、溢れるほどそんなのが大手を振って闊歩している。拝金主義は目を覆うばかりで、親が子を食み、子が親を食む（保険金殺人）。論理

の崩壊は倫理を破壊する」

一平はホッとしたように息をついた。

「……美田村の説ですが、諸々の社会状況は、やはり先の大戦における日本の敗北から来ているのでしょうか？」

「義之君が？」

「不愉快なことを突き詰めていくと、概ねが大戦の敗北に行き当たるらしいんです」

「先の大戦における日本の功罪は多々言われとるが、唯一言えるのは、日本が関わることによって、日本を除き、ほぼアジア全域の国々が欧米の植民地から脱して独立できたことだけや」

「日本を除いてですか？」

「日本は逆に、真の意味での自主独立を失った。それ故、日本が欧米文明のアンチテーゼとして世界に与え続けた少なからぬ影響力が失われた。

辛うじて引き継いでいる物創りの伝統を除けば、日本に残されるのは安物のブリキのような欧米のまがい物だけになる」

「戦前のイメージと言うと、不自由、否定的な社会を連想するのですが」

「戦勝国のプロパガンダのせいで重度の記憶障害に罹ってしまっているのや」

「記憶障害っすか？」

「幕末から昭和初期まで世界規模に与えたジャポニズムは相当なものやった。

歴史、芸術、文化、思想、武道、それに科学や軍事に至るまでアインシュタインあるいは若きマッカーサー将軍などにまで深い影響を与えている。

差別が無ければ、ノーベル賞なんかはごまんと取れていた。楢崎

皇月、東北大グループの原子物理学とか、高田蒔、北里柴三郎、鈴木梅太郎、高峰譲吉、小林六造、山極勝三郎、長岡半太郎などは業績をパクられて名前すら消えてしまっている。
あれほど世界の医学会を席巻した野口英世など候補にすら挙げられん。それどころか、フェライトの武井武、音声映像の一体増幅器の望月富にいたってはパクられた上に特許料支払いまで要求された」

「極東の小さな島国が、何故世界にそれ程の存在を示せたんでしょうか？」
「某歴史学者が世界を八つの主要文明に分け、唯一日本文明は、日本一国のみと言っておる。それを孤立している、と取るのか、孤高の存在と取るのかで、天と地ほどの差がある。
幕末に、硬直した官僚主義が黒船にぶっ飛ばされ、三百年醸成されていたものが一気に吹きでた。
日本人は己を知り、世界を知る。明治から大正にかけては、稀に見る発展的自由が横溢したわけや」

「今よりも？」
「今は性が下劣になっただけや。
憲法からして現在の小学生の作文にもならんようなものではなく、完璧とはいかんが、君臨すれど統治せずの立憲君主制に超法規保険の祈り人（天皇）を据えた日本独特の神秘性を有するまあまあのものやった」

「超法規保険？」
「日本を特異たらしめている万世一系たる天皇の存在。因みに大戦後、ソヴィエトの戦略的意を受けて天皇制なる造語で歴史を歪めることになる。
理解するには、天皇を日本精神伝統の文字に置き換えれば良い。精神文化象徴の実体と言ったところや」

牧野は、首を捻っている一平に話す。
「超法規保険は、時代の節目の危機的状況に突然発動する。戦国時代の天下統一、明治維新、先の大戦の終結時等に機能した。
発動しなければ、アジア・アフリカ同様、とうの昔に支那、コリア共々欧米の植民地になっていたやろうし、あるいは日本全土は原爆攻撃によるジェノサイドの憂き目にあっとる」

「今の憲法って、そんなに駄目なのかなあ……」

「憲法と法律の違いが分かるかな?」
言葉を拾うようにヒロコが答えた。
「国民を護るものが憲法、国民が守らねばならないものが法律ですわ」

「で、我が日本国は義務は要求するが国民を護らない。役人は護るが、国民を護れない、類例の無い情けない憲法や。
外国から理不尽な要求、誘拐や冤罪が生じたとき、その加害者国家や犯罪人のお情けに縋るしかない。人権は加害者だけや。重度の相続税は貴重な文化すら守れない。国民と文化を守れない主権在民らしい憲法と、益々厳しくなる酒も煙草も自由も賭博も何もかも制限していく唯物マゾ法律」

「結構悲惨ですね」
「その上、矛盾だらけや。例えば参議院って意味があるかね?衆議院まがい議院と名前を変えた方が良いとは思えんかね?
以前はノーブレス　オブリージェを叩き込まれている誇り高い連中が貴族議院で個人の利得に影響されないオンブズマン的役割を担っていた。
そして、それが参議院に移行しても、全国区言うことで地域の利

権から離れて、多少はその役割を担っていたんやが……。
歪な抜け穴だらけの税制や選挙制度等。調べれば調べるほど、占領軍場当たり憲法からはボロが出てくる」

牧野は吐き捨てるように話した。
「頭の弱い唯物主義者が不磨の大典化し、カルト宗教のように『護憲』とか言うて正邪を議論することすら許されない、聖なるバイブルの如く崇め奉っておる。
馬鹿と死者は金輪際その意見を変えないと言うがな」
「如何して、そうなっちゃったんだろう」

「弱いものは概して現実と直面できない。その上、努力しなくとも平和と言えば平和、豊かと言えば豊かになると言う、言霊的思考（夢見るＤＮＡ）がある」
「耳が痛いっす」
「真理と薔薇には棘があるんよ」
「……日本は何故、舵取りを誤ったんでしょう？」

「官僚指導の行政や」牧野は言い切った。
「官僚行政……？」
「国とか憲法の精神など屁とも思わぬ曲学阿世の徒が、制度的実権が官から政に漸く移らんとする日本の重要時期に好き勝手に国を引きずり回したせいや。
古今東西、国を誤らせるのは、頭でっかち狭視的世界観である役人の暴走が大半や。特に昭和十年あたりから国民の生活は息苦しいまでに制限されていった」

「超法規機構と仰る天皇は？」
「どっこい、十重二十重に小役人どもにシールドされ、畏れ多くも役立たずの生き神様に祭り上げられていた。戦争終結の玉音放送

で辛うじて、彼らを出し抜けたのや」
「古今東西と言いましたが？」
「マイナス志向の役人（公務員）が性不浄にして厄介なのは定説や。有史以前から先の大戦に至るまでほとんどが硬直した官僚制度が体制を滅ぼした」

「先の敗戦は、物量の差だと思っていましたが」一平の声は少しく上ずっている。
「それが主やない。例えば、日清、日露の戦争も物量では遥かに日本は劣っていた。ベトナムとアメリカも然り。歴史を検証すると、物量の劣っている方が勝率がいいぐらいや」
「先生から見ると、今の日本の状況は……？」
「経済的には、宿木体質と占領者のお情けが功を奏して偶々うまく運んだが、必ずしも良い方向に向かっているとは言えんな。
選挙の比例代表制、杓子定規な定年制のような個人や経験の排除、中身の空っぽなポピュリズム、卑猥なジェンダーフリー、特に愛国心排除教育等、情報操作がこうも頻繁になってくると何時の間にかそれに捲かれてしまう。マスコミと官僚は不気味なほどの相似性があり、自らの正体を隠し、権威を嵩に一般を洗脳・管理しようとする。彼らの一貫した一般国民と共有する根本思想は、【他人の不幸は蜜の味】言う下劣な感覚や」

突然、牧野はトーンを変えた。
「最近、頓に思うのやが、二十世紀を席巻した四つの理論を過去の歴史的遺物として葬り去らねば、人類の輝かしい未来は無いと思える」
「葬り去らねばならない理論？」

「独断と偏見やが……」
老人は声に抑揚をつけず明るくさらりと言った。

「マルクス資本論、ダーウィン進化論、フロイド精神分析学、そして、ニュートン物理学。これからは、分離している科学、宗教、哲学の統合に向かわねばならないのやが、これらには統合のために不可欠な主観（人間の内的世界、精神世界）と客観（外的、物質世界、現象界）の融合を拒否してきた。つまり、本質的な敬虔と愛に欠け、観察者の存在とはまったく別個の、客観的な器としての世界が措定され、人間の精神の働き（モーツアルトの音楽や、ラファエロの絵画、シェークスピアの戯曲等）すら脳内の化学作用の産物にすぎないと決め付けられた。世界は個人の内面とはまったく無関係に存在し続けるものとなっとる」

「確かに、仰る通りだわ」

「万象は神の内にあるが、ある空間に置かれるようにではない。しかし、万象は別の仕方で非体的なイメージの内に置かれている」

「意味がまるで……？」一平は頭を捻る。

牧野は笑った。

「ヘルメス文書や。超古代のトート文明。と、言ってもオーソドックスな歴史専攻生には馴染み無いやろな」

「単位合わせのいい加減専攻生としては御手上げです」

牧野は咳払いをしてから、再び饒舌に話し続ける。

「私は何時もシンプルに考える。善悪の判断の目安は他所様に迷惑をかけるか否か、心の底から心地良く感じるか否かで決める。

悪い奴は推理小説のセオリー通り一番得する奴、それを手助け或いは援助する奴も悪い奴や。そう言うのは決まって見えすいた人道とか正義とかを振りかざす。

今の世は物と金とセックスに凝り固まった現世利益のカルト宗教や権威その物のようなのが蔓延っているんでな」

一平が話を挟んだ。
「話題のオーム真理教などですか？」
「小物過ぎて話にもならん。ただ教祖の食べ残したメロンや入浴したお風呂水を有難がったり、金をばら撒いて得た不名誉博士号や市民権の数、あるいは独裁将軍様の見え透いた演技に感動したりするのは馬鹿さ加減の良いサンプルになる。
因みに世の中で一番信用できないのは権威を頻繁に引用する奴や。顔無しの無知は他人のみならず自らも騙しこむほどに害悪を流す」

「先生が仰る第二次バベルの塔崩壊後は？」
「洗いざらい膿が出た後、新しい時代が始まる。歴史学言うのは過去の検証学なんや。過去に起きたことは未来に起きる」
「それは……人為的に起きるのでしょうか？」
「宇宙から見れば、全てが自然現象や。そして、全宇宙は遍く数式で構成されている」

牧野は「そう言えば」と、声を上げた。

「話は逸れるんやが、私が客員やっとる学校の教授が、ピカソの絵を手に入れた言うて、自慢たらたらやったのや。
私がそれを『見るに値せん』と感想を言うたら、私をピカソも理解できん科学アホ呼ばわりしたんや」

ヒロコが口を挟む。
「それ、医学部長の長尾教授じゃありません？」
「その長尾のブランド大先生がつい此間、可哀想に贋物を掴まされていたのが判明したんやな。ピカソを上海の自由市場で超格安で手に入れた言うんやから、顔無しの欲呆け恐るべし。学のある間抜けは、無知な馬鹿よりも、もっと馬鹿と言う奴や」
「お祖父様、言い過ぎですわ」

孫娘にたしなめられて、老人は口を閉じる。

「ま、一平君、真実を見極めるには権威とか我欲に惑わされては遺憾ということや。そのものを率直に見れば贋ピカソを掴まされることもないと言うこと」

と、締めくくった。

十六話（後書き）

牧野博士の思想感はこんな感じです

十七話・出会い

ひた走る電車、取り止めも無く和気藹々と三人は語り合っていた。
「そうや、一平君。君に見て貰いたい物がある。荷台から鞄を降ろしてくれんかな」

偉大な老人は、まるで子供のように嬉々として年代焼けしている赤茶けた鞄を開ける。
中から二尺半ほどの錦織の包みを取り出した。
金糸の組み紐を解き包衣を取り去ると、鮫皮の柄と鞘が藤蔓に仕立てられた剣が現れる。

牧野は一平に手渡す。
「抜いてごらん」

ずっしりとした柳刃を鞘から抜き放った。
鈍く青光りを放った輝きと刃上に無数に走る白金色の蛇目紋様、一平は魅入られたように見つめる。

「元来はもっと身厚やった思うが、長期の研磨にこれでも薄くなっとる。
剣銘はガルガンで、シャーム隕鉄で作られたと思われる古代剣。外装仕立ては伝統的ミシャセ造りになっとる」

「シャーム隕鉄？」
「数万年前ダマスカスを直撃したと言われる最大級の隕鉄や」

ヒロコは呟く。「迫力が在りすぎだわ」
「切れ味も耐久性も絶品やで」

「まるで、生きているような……。ジャンル的には日本刀なんでしょうか？」

「刀でなく剣や。日本刀への発展過程の蕨手刀と呼ばれる山刀剣に近い。

古代社会ではダマスカス隕鉄鋼は群を抜いておるが、これは最良のダマスカス鉄と最高の剣鍛治との傑作や。しかも、今もって磁力反応までである」

「古代日本にダマスカスと言うのも……」

「オーパーツや」

「先生が如何してこれを？」

「羅門兄の形見。彼は葦籠で川に流されていた捨て子だったのやが、お包みにこれが一緒に包まれていたと言う話や。

今まで、山歩きの時は必ずこれを身に着けていくようにしていたが、是非とも……君に携帯して貰いたい」

一見の一平に対して、牧野の気に入り方は、徒事ではない。

一平は、手応えとその妖しい輝きに、懐かしさのようなものを覚えていた。

「以前にも、何処かで……」

「デジャ・ヴ？」

耳元で囁くヒロコの声に、一平は間近に大きく涼やかな瞳を見た。

頭上から大きな濁声が降った。

「コラコラ！怪しい少年少女、こんなとこで、物騒なものを弄っちゃ駄目だっぺよ」

銀髪の老人が、褐色に日焼けした長身の若者に伴われ、通路に微

笑んでいる。

一平は驚いて牧野と見比べた。見れば見るほど牧野そっくりだ。

（双子？）

「康熙（こうき）やないか！」牧野は驚きの声を上げた。

「水戸で、叙勲祝いをしてくれると言うんで孫息子付き添いで出席する。食堂車から来たんだが、お前が居るんで吃驚したっぺよ」

「叙勲？」

「日本遊戯協会の代表でね。ライオンは小高に行くのげ？」

「人生の総ざらい。この二人は老人の夢に付き合うボランティアや」

「こっちは……まさか、ヒロコちゃん？」康熙なる老人はヒロコに顎を杓った。

「そう、まさかのヒロコ姫や。えーっと、君は絵描きで売り出している鬼三（キサン）君やったな」

名指しされた青年は照れたように目礼した。

ヒロコが牧野の袖を引いた。

「お祖父様、紹介して」

「それが、何とも言い表し難いんや……」

謎の老人は自己紹介する。

「ドッペルゲンガー。分身と言うか、一卵性双生児と言うか。詳しくは御祖父ちゃんから聞いてください。和名は李山だ。ヒロコちゃんのことは小さい時から良く知ってるよ」

「和名……？」ヒロコは祖父を見た。

牧野が紹介する。

「謎の在日朝鮮人。帰化しているので……だったやな。

賭博業界の雄で、世界的なリッチマンや。息子が有名なＩＴヤッピーの李山正継で、鬼三くんはその三男坊言うこと。確かＵＣＬＡに行っとったな」

「絵描きって仰るのは？」

青年はにっこり微笑んだ。

「トロピカルな絵が、たまたま売れ筋に乗ったもんで。ヒロコさんのことは祖父から聞いたり、雑誌などで良く存じ上げています。それに、ロスでゼッターランド博士の講義も受けたことがあるんです」

ヒロコは目を丸くした。

「お受けになったのはバイオかしら？」

「いいえ、アンソロポロジー（人類学）の方。歴史好きのお祖父ちゃんの影響で、文化人類学の専攻なもんですから」

日焼した肌にブリーチング爽やかな白い歯の、如何にもウエスト・コースト風サーファー然としている。

「お前はサーフィンと空手の専攻だっぺよ」康熙老人は茶々を入れた。

「ザッツライト！めちゃめちゃ空手と、特にサーフィンにイッちゃってます」

若者は屈託ない。

「そうそう、こちらは佐々木一平君や。ボディガード言うことになっとる。

美田村の息子・義之の門弟で、若いが剣の達人や」

ガルガンを鞘に収め、立ち上がっていた一平は頭を下げた。

「以前会ったことがあるかな？」
李山は無遠慮にしげしげと一平を見詰めている。
「初めてだと思いますが」
「いいや、確かに君とは何処かで会ってんなあ……」
牧野は笑い出した。
「相変わらずやな、そのしょうも無い祝いとやらが終わったら小高に寄るんやろ？」
「それがな、間もなく出発しなくちゃなんねえんだ。例の北極行きを決めたんでな。年来の希望が叶う」
「と、云うのは？」
「極付近で七十年来の強烈な磁場の嵐と変異が認められた。我々が後援している冒険カメラマン安藤昭治の北極単独横断計画にキサン共々便乗して行くんだ。
李山コーポレーションのレジャークルーザーを探検用の調査船に改造したのよ。
お前が作った磁場変異探査器を勝手に使わせてもらうことにしてんだが……」
「あれを使うんか？　作りがいい加減だから充分な試しが必要やで」牧野は眉を顰めた。
コウキ翁は笑った。
「大丈夫。お前同様、外見に似合わず賞味が切れてねえ。そう言えば、昭治君は、まだ大悲山に居るはず……」
「希望言うのは目覚めている人間が見る夢。それが、お前の持論やったが？」
「微かな希望に縋ってみたくなったんだ」

電車内に水戸到着のアナウンスが流れる。

「……フリンに会えたら」牧野は言葉を呑んだ。

李山は頷いた。「七ちゃんに宜しくな」

牧野の唇が微かに震えている。

二人は互いに手と手を強く握ったままだった。

「再見(ツァイ・チェン)！」

瓜二つの老人は別れを告げる。

キサンはヒロコと一平を見て言った。

「又お会いする日を楽しみに！皆さんとは縁が有りそうな気がします」

目頭を熱く立ち尽くす牧野に、

「僭越ですが、降車まで李山さん達を見送ります」と、一平は彼等の後を追った。

プラットホームまで降りて、見送りの礼をする一平に、李山翁は尋ねる。

「大悲山は初めてげ？」

頷く一平に、老人は告げた。「君はわし等が敬愛する好漢に瓜二つだ」

康熙翁は手を差し出す。

「ライオンをよろしくな」

老人の手には優しい温もりがあった。
席に戻った一平が「お送りしました」と、告げると、瞑目していた牧野は一平を一瞥し、ポツリと呟いた。
「これも人生や」

十八話・もう一人の自分の人生

抜けるように青い空の下、特急は水戸から平に向かって、コバルトブルーに映える日立海岸をひた走りに走っている。
真夏の田園は濃い緑を鮮明にし、眩く輝き始めた。

ヒロコが話を切り出した。
「お祖父様、李山さんが仰ったドッペルゲンガーが良く分からないのですが……」
「ドッペルゲンガーは分身言う意味やが……」
「言葉の意味じゃなく、お祖父様と李山さんの関係ですの。ドッペルゲンガーには一寸した経験があるので、違和感はありません」

「君らはアメリカによる東京大空襲を知っとるかな?」牧野は唐突に尋ねた。
「爆撃があったのは知っていますが……」一平はヒロコを見る。
ヒロコは肩を竦めて首を振った。

「自虐教科書ではそんなもんやろな」牧野は話し始めた。

「あれは、市民をターゲットにした未曾有とも言える大虐殺作戦やった。
阿鼻叫喚地獄。空から降り続ける焼夷弾は東京を灼熱の溶鉱炉と化し、触れるもの全てを徹底的に焼き焦がす。数十万の老若男女を問わず、犬も猫も樹木も生きるもの全てを焼き尽くした。
断末魔の叫びと夜空を満たすB17の轟音は今でも耳に残っとる。
燃え盛る炎の中、私は研究所のスタッフとも逸れてしまい、防空頭巾を被ったまま荒川の河川敷目指して無我夢中やった。
……その時や、方向感覚を見失った一人の若者が羽織を頭から被

って我々の行く方向と全くの逆方向に走り抜けようと突進して来た。
むざむざ炎が渦巻く灼熱の世界へ突入しようとしているのを見過ごすことは出来んと、声をかけ体当たりに阻止したんや。
そして、羽織を外して若者が顔を現した時、私は一瞬時間が止まったように感じた。……それは私自身やった」

「それは如何言う……？」

「つまり何だな、彼がもう一人の私自身であることに気づいたのや。
河川敷の方向を示すと、彼は混乱に紛れて風のように走り去った。
ほうほうの態で河川敷に辿り着くと、其処は正に地獄絵そのもの。累々と横たわる焼け焦げた死体、焼ける肉と嘔吐を覚える腐敗臭が鼻を衝き、呻き、泣き叫ぶ声が辺り一面に満ちていた。私は火照りを鎮める為、水の中の群がる死体を掻き分けて川に身を浸して燃え盛る市街を振り返った」

ヒロコが話しを遮るように尋ねた。
「その出会ったのが、李山さんですの？」
「そう、康熙やった。それが、その後ひょんなことから再び出会うことになる。
我々は満更に知らない関係でもなかったのや。
私の同窓にして兄貴分のような男で、茨城県に竹内佛林（フリン）言う歴史家兼冒険家を自称しとる夢想家がおった。以前から彼は私と彼の幼馴染である康熙をそっくりや言うて、しきりに会わせたがっていたが、似てる言うだけでは会いに行く気にはならんかったので、そのままになってしまっていた。
ところが、例のＮＨＫ・私の秘密、の出演を偶々見た康熙が緑の家を探り当てて訪ねてきたのや」

「まさに、奇跡ですね」
「更に吃驚なんやが、その私にそっくりな若僧が、当時資金繰りに行き詰まっていた『緑の家』に驚くほどの高額の寄付を申し出たんや」

「出来過ぎた展開だわ」
「とにかく、終日二人は合わせ鏡のように飽かずお互いに見入っていた。何とも驚いたことに、異なっているのは過去の経験だけ。でも、その人生の記憶ですら、やがては混同してきて互いに交叉し、共有するに至った。
以後、我々は、感応し合い、夢の中で入れ替わったりして、二つの人生を生きているような気がするようにまでなった」

牧野は李山康熙から聞いた、そして彼自身となって経験したもう一つの人生を話す。
康熙は大正十七年茨城県磯原に南関東方面軍所属李大尉（後の李山大佐）の長男として生まれた。
朝鮮王家の外戚に当たる家の出で、いずれは朝鮮出身で初めて帝国陸軍、もしくは日本帝国を背負って立つであろう陸軍士官学校きっての逸材と謳われていた。
幼い時分、康熙は職業軍人である父の影響で軍人を志向している。
その父が康熙の小学生時に奇妙な事件の渦中に巻き込まれることになった。

磯原天津教竹之内事件である。
事件の概要は、茨城の磯原にある皇祖皇太神宮第六十六代管長竹内巨麿なる人物が南朝の天皇家から受け継がれた門外不出の超古代史、所謂、古史古伝と総称される古事記より古い文献の一つ、『竹内文書』なる物を公開したことに端を発した事件だ。
それは文書といっても、文字資料だけではなく、古代の世界地図

やその他多くの神宝類を含む総称であった。

神代文字で書かれた原本の成立年代は不明だが、残された資料は武内宿禰の孫で五世紀後半の大和朝廷重臣として知られる平郡真鳥によって、漢字仮名まじりに書き改められたと言われている。

五世紀後半とすれば、現存する古文献の中で、日本最古のものと学会に認定されている古事記より二百年以上も古い。

しかも、その内容が既成の歴史通念から著しく逸脱していた。

記述は天神に始まり、現天皇につながる神倭朝まで総計すると天文学的年数になる壮大なものだ。

永遠とも思える長寿、平和の中に統一されている人類世界、天の浮舟・鳥船・磐船と呼ばれる飛行船、多分に虚実入り混じった古代人のロマンチックで神話的なものが含まれていた。

古史古伝には『竹内文書』の他にもいくつか伝わっている。

『九鬼文書』、『宮下文書』、『上記』、『秀真伝』、『東日流外三郡誌』等だ。

これら古史古伝は『古事記』『日本書紀』に基づく国家神道の系譜（皇国史観）とは異質なものが多く、タブー化されていた皇室のルーツ問題に抵触する。

内容も歴史の常識を逸脱すると言う理由で、古事記史観一色の学会はその資料的価値を全く認めようとはしなかった。

竹内文書が他の古史古伝と大きく異なったのは、竹内巨麿なる人物の胡散臭さをさて置き、文字資料と別に伝えられている数々の神宝類のせいで、興味を持って関与した多士多彩の人々だった。

軍官政財界、宗教、芸術家、地方の名士、歴史家に至るまでの人材。そして、地元交友関係の著名な人物として李山中佐が浮かび上がった。

昭和十一年、当局はその無視できない広範な影響力を鑑み、竹内巨麿を不敬罪で起訴し、九年の長きに亘る法廷の論争をおこなったのである。

結果は無罪。資料として提出した『竹内文書』の真偽が問われたが、贋物と証明することも出来ず、寧ろ逆の歴史を混乱させるオーパーツ化してしまった。

この裁判で、李山中佐に対しての数回にわたる事情聴取は、中佐の中に猛然と民族意識を引き起こす。

避けて通ることのできない自らのルーツである朝鮮民族の歴史。中佐は嘗て強大な言語も文字も民族も統一されている文化国家が鴨緑江以北の満州（中国東北部）から遼東半島全域にわたって存在し、その広範な影響力は東は大和・蝦夷地、西は中国・西域やインドに至るまで及んでいたのを知る。

特に彼が注目したのは、遥かなる古代（漢字以前）に用いられたと文献に伝えられている神代文字の一つが、朝鮮李朝の世宗王が創意したと言われているハングル文字に酷似していたことだった。

中佐は近代日本の爆発的隆盛の根本は世界一の識字率にあると見た。

そして、その驚異的な識字率の根本は日本の表音言語に合わせた習得するのに極めて容易な平仮名、片仮名と、表意・象形文字である漢字の併用にあると看破する。

中佐は朝鮮民族興隆に不可欠な要因として、民族の識字率を高めることに着目した。

漢文オンリー主義を排し、表音ハングル文字の一般普及を、重要なライフワークと位置づけたのだ。

ところが、ハングル普及の前には大きな障害が横たわっていた。

朝鮮の支配層・両班の識字への特権意識と、長い中国支配による小中華思想に骨の髄まで浸っていたことだ。

当時、朝鮮では最高の出世である朝鮮両班になるためには科挙のテストをパスしなければならないのだが、その学問と言えば唯一無二ひたすら漢字と漢文（特に儒教）を学ぶことであり、膨大な量のそれを生涯をかけて記憶するのである。

科挙の中の科挙国家、まさに本家を超えた中華思想。

文化、習慣、文字、清国人ですら真っ青の纏足に至るまでの漢民族文化に対する憧憬。

中華の小番頭化した朝鮮は、自らの偉大な大韓国の文化と歴史を文字と共に消し去り、自らを儒教国と称して中華思想を無批判に、まるで自国文化のように受け売りしている状態になってしまっていた。それが故、朝鮮では便利で簡易なハングル等は日本の仮名同様の下品な文字と決めつけられていたのだ。

日本帝国による朝鮮のハングル文字習得・普及は、朝鮮両班の漢字至高主義の抵抗にもかかわらず、日本語教育と平行して急務の文盲排除運動として強制的に施行される。

中佐は軍務も厳しいおりに、朝鮮出身の俊才・朴少尉等と共に東奔西走し、遂には平仮名・片仮名とハングル文字普及によって、文盲をほぼ完全に駆逐することとなった。

国と民族に全てを投げ打つ、清貧にして高潔な帝国軍人の家庭に育った康熙少年は、磯原の竹内家（特に、幼馴染で一歳年上の竹内佛林）と密接に交流している影響もあって、次第に歴史に興味を持ち始める。

竹内フリンは磯原事件の当事者である教主の次男坊であり、一人息子の康熙にとって兄貴分とも言える幼友達だった。

喧嘩が滅法強く、悪餓鬼どものボス的存在であり、その上、学力抜群、スポーツ万能、特に柔道の東日本優勝者である文武両道に卓

越したフリン。
フリンは十歳時に、福島の阿武隈山中に存在すると言われていた神秘学院に入学との理由で、忽然と康熙の前から姿を消した。
フリンはその三年後の磯原事件時を契機に、強烈にパワーアップした天才児として帰郷し、少年とは到底思えぬ八面六臂の猛烈にして強力な事件弁護の支援活動を始める。
彼はエネルギッシュでタフな天才ネゴシェーター少年として注目を浴びていたが、康熙の前では相も変わらずの夢見る歴史好きの腕白小僧だった。

「不老不死の黄金の国・エルドラード、聖人の住む理想郷・アガルタやシャンバラ、大海に沈んだと伝えられるアトランティスやムー大陸、北方の彼方に在ると言うヒュペルボレアとトゥーレ、謎の桃源郷アルタイ、恐怖のドラゴンワールド、永遠のネーデルランド、そして幻の鏡の国と言われる相似の世界テラ」
語るフリンの瞳は喩えしようもなく輝くのだった。

フリンは康熙を弟のように可愛がり、三年間に得た人脈を片っ端から紹介する。
憧れの先輩に、満更嘘とも思えない冒険物語や独特の歴史講釈をのべつ耳元で聞かせられているうちに、康熙は漠然とながら将来の志望を軍人から次第に歴史学者にシフトして行く。

「お前にそっくりで、小生意気なライオンって言う小僧が福島の南相馬におる。
道院中は三年間そ奴と一緒に居る羽目になった。だから、久し振りにお前に会った時も三年間って感じじゃなかった」

康熙も時折襲われた奇妙な感覚をフリンに伝える。
「僕もズーっと一緒にフリン君といたような気がする」

フリンは笑った。
「共時性（シンクロニシティ）だな」

帰ってきてからのフリンは聞きなれない難しい言葉を時々使うようになった。
康熙が沸林を追うように旧制水戸第一中学に進学する頃、国際状況は風雲急を告げ、唐突な感じで大佐に昇進した父は副総督として台湾方面軍に転属することになる。
フリンの強い勧めもあり、康熙が家族と離れて水戸に一人自炊のアパート住まいが始まると、フリンは当たり前のように生活管理人と称して入り浸りになる。
フリンはしかも、父の李山大佐を「親爺さん」と呼び、頻繁に連絡を取っており、その信頼は大変なものだった。

「学業・生活の万事は沸林君に相談するべく云々」等の手紙を康熙に託すほどである。
フリンは大佐の信頼を良いことに、学業も物のかは、康熙を南相馬の鈴木・牧野家やサンカの一族に会わせたり、修業と称して山籠りに付き合わせたり、いい様に連れ回す。
それは康熙にとって、最も幸せな時期だった。

康熙を引き回していたフリンが東京の大学に入学した為に水戸から居なくなると、康熙はまるで傀儡子のいないマリオネットのように途方に暮れた。
翌年の正月、フリンの後を追うべく大学受験の猛勉強の最中、アパートに現れたフリンは康熙の父・李山大佐の推薦でベルリンの大学に留学することを告げる。

驚く康熙に、

「仔細は全て親爺さんに報告してあっから」
と告げ、
「志を追い求めることこそ、我が人生だ」
と、不退転の気持ちを述べるのだった。

以後、ベルリンから度々近況を知らせる長文の手紙の連絡があり、その内容はフリンらしく、多種多彩な人物交流と独特の歴史観が常に心躍る文に綴られている。
そして、フリンからの最後の手紙。それはまさに驚天動地の内容だった。

ヒットラー総統肝入りの大掛かりなプロジェクトであるオペラツィオン・ドイッチェ・アルネンエルベ（目的は、超自然・最先端科学・宗教といった様々な側面を持つ遺物・秘物あるいは太古の叡智によって作られた装置等の徹底的な収集）の一環で、地球内部の伝説の世界への艦船による命懸けの探検計画とある。
内部への侵入口が高度飛行の探査によって、北極付近を移動中なのが発見されたと言うことで、急遽十三名の特別探検隊が編成されることとなった。
卓越した言語力と、東西古代歴史の造詣の深さを買われてのメンバー採用。

隊では最年少にして唯一の外国人であると誇らしげに報告している。

「我が決意、伝説の地に到達せずんば、生きて会うことなく、その存在微塵も疑うことなし。帰ることあたわざれば、何時の日か、彼の地で会い見えん」
手紙の末文はそう結ばれており、興奮と並々ならぬ気負いを表していた。

後に、フリンの実家である竹内家に告げられたドイツ政府からの報告にはこう告げられている。
「彼の地には到達し得たが、帰還中の嵐口に遭難し、帰れたのは緊急ボート二艘のうち一艘のみで他船は行方不明。生還者は辛うじて乗員クルー一名のみ」

そして更に、康熙にとって人生最大の衝撃が。
米英開戦が噂されている最中、開戦反対派陸軍の中心人物と目されていた父の李山が、台湾から中央の大本営に転属早々に他界したのだ。
李山大佐、享年五十歳。
死因は急性心不全である。台湾在住時に罹患したマラリアの後遺症と診断されたのだが、若くしてしかも、あまりにも急激な死は米英開戦派による謀殺の噂も飛び交っていた。
以後、日本は急速に米英開戦に傾いて行く。

心の支柱であった先輩親友の失踪に次いで、康熙の人生指針そのものと言える父の訃報、そして夫の後を追うような母の衰弱死は、トリプルパンチとなる衝撃だった。
それが故、己が無力さに嘆き、悲憤慷慨に疲れ果てて生きる希望も消え失せ、やがては、自暴自棄とも言える放蕩無頼な生活に埋没して行った。

（希望なんてのは、目覚めた人の見る夢にすぎない）
それは、康熙の口癖になりつつあった。

日米開戦。命運を分けたミッドウエイ海戦の敗北。そして、あの東京大空襲。
火炎地獄の中に方向感覚を失って闇雲に走り回る康熙を抑えて、

生への指示を与えてくれたのが己が分身・自分自身だったことは、改めて生きる価値を考えさせられた。

（会って、自らを確認したい）

終戦を迎えると、康熙は帝国将軍の御曹司、戦勝国でも敗戦国でもない第三国人、失われた王族家、命知らずの無頼朝鮮人、等の特異なポジションを使い分けて、米軍や日本政府あるいはヤクザ等の裏社会に取り入り、遂には経済的に出色の成功を収めることとなる。

一方、荒んだ生活の癒しとして、かつてフリンが紹介してくれた小高の鈴木家を時折訪れ、息抜きの羽休めをしていた。

そして、ＮＨＫテレビ番組『私の秘密』の中に、康熙は捜し求めた牧野修也を発見する。

驚くなかれ、その修也が七郎の幼馴染の親友であり、嘗てフリン兄が会わせたがっていたライオン少年その人だったのだ。

＊　＊　＊

牧野は己が分身の人生を語り終えると、大きく息を吐いた。

「所詮、全ては一炊の夢や」

一平は込み上がる思いに胸が詰まった。

「でも、その夢の中で、ポジティヴに生き続けなければならない！」唐突な強い口調に、老人は驚いた。

「僕は精神に変調を来たして現実と夢想の区別がつかなくなったことがあるんです。
そこで気づいたことはたった一つ、時間は在ってない様な物であり、存在は今生きている意識だけと言うことでした」

一平は穴の開くように見詰める老人の視線に顔を赤らめた。
「分かったようなことを言ってしまいました」

「確かに！過去は取り戻せないし、未来は分からない。今を大切に生きることや」

「お祖父様が他人の忠告を素直に聞くなんて。嵐でも来るんじゃないかしら」
と、ヒロコが茶々を入れる。

牧野は、青年の好意が思いの外に心地よく感じられるのだった。

十九話

真夏の太陽は眩く、鮮やかな真紅に燃える夾竹桃が沿線の至る所に咲き群れている。
冷房の利いた車内は別世界のように涼しく快適だった。
暫し車外の風景に見入っていたが、徐に牧野は話を引き戻した。
「ヒロコが言った、ドッペルゲンガーの経験とやらを教えてくれないかね」

「端にもならない話ですわ」
再三促されて、ヒロコは話し始める。
「……八歳の誕生日だった。登校のハイスクールバスに乗り込もうとした時、ボクにそっくりな若い女の人に突然呼び止められ、このバスに乗っちゃいけないって、強く引き止められたの。
結局、乗るのを止めて遣り過ごしたんですけど、女性の姿は消えてしまっていたわ。
二十歳ぐらいで歳も離れていて、確信の根拠は無いけど、あれは間違いなくボクその者だった」

「何のため乗車を止めたんですか？」
「それが、悲惨な事故だったの。直後に暴走運転のコンボがそのスクールバスに衝突したんです」
ヒロコは肩を竦めた。「ドッペルゲンガーを見たものは間もなく死ぬ言う言い伝えをパパから聞いて、ボクは暫くの間びくびくしていたわ」

「しょうもない奴っちゃ。水瓶座のせいか、トムと私は妙なところが似ている」

一平は目を丸くした。

「科学者の先生から星占いが出るなんて」

「ロールシャッハなんかより、当てになる思うんよ」老人は照れくさそうに笑った。

「それにしても、如何して八歳のヒロコさんがハイスクールバスに？」。

牧野が代わって答えた。

「ヒロコは進みすぎて、飛び級の特殊クラスやったんや。

因みに十一歳で大学を終了し十二歳で物理学博士号を修得することになる」

「信じられない。……素晴らしいですね」

ヒロコは首を振った。

「必ずしも、そうとばかりは言えないわ」

「僕がそうだったら、夢のようだけど……」

「レゾン・デートル、自己の存在理由といったら良いのか。それを確認するため、日本で高校に入り直すことにしたの」

偉大な祖父は孫娘に尋ねた。

「で、今の学園生活は？」

「それはもう！今はオーソドックスな青春を人並みにしてますわ」

そこで、一平は聞きたいことを尋ねることにした。

「失礼とは思いますが、この際、お聞きしたいんですが」
「失礼なのは嫌やな」
「お祖父さま！」
ヒロコは祖父の癖である混ぜっ返しが嫌いなようだ。
「お二人とも天才と言われていますが、僕等と一体何が違っているのでしょうか？
興味本位の質問で申し訳ありません」
「正しく興味本位や」牧野は笑った。
「ちょっと待っていただけます？」と、ヒロコが色をなした。
「ボクも天才ってことなのかしら？お祖父さまならともかく、ボクに関しては見当違いですわ」
「いやいや、うっかり者では天才かもしれへん。ま、むきになるほどのことでもないがな」
「いえ、お祖父さま。ボクの場合はそんな噂が立つと、ますますお嫁に行き難くなるでしょう？それでなくても、何かと特別に見られているんだから」
うっすらと上気させたヒロコが一平を真っ直ぐに見つめている。
「気に触ったら、……申し訳ありません」
（十二歳で博士号を取るような女の子を天才と言わず……？）
取りあえず謝ったが、一平はヒロコの如何にも天才らしい外れっぷりに呆れた。
「噂の元は理恵ね。会ったら、とっちめなくちゃ！」ヒロコは息

巻いている。

「ヒロコさんが特別に素晴らしいと言うのは……理恵さんだけでなく、東体大の戸倉みどりさんからも聞いています」理恵に矛先が行かないよう、一平はみどりの名前を出した。

ヒロコは先輩のみどりが出てきたのに驚く。

「如何してみどりさんを？」

「僕の兄貴みたいな人と、婚約したんで……」

「お祖父様、憶えてます？高校在学中に英語の野尻先生との構内恋愛で話題になった帰国子女」

「帰国子女はお前と、あの娘しかいなかったからな」

「とにかく、大変な発展家で、情熱的な人だったわ。夢見るボクたちにとってみどり先輩は憧れの的。

結局先生は離婚までしたのに先輩に捨てられちゃったんです。……いけない！ワイドショーしちゃった」ヒロコは舌を出した。

この些か慌て者の才気煥発な天才に、一平は少しずつ惹きつけられている。

「ごめんなさい、話を遮ってしまって。天才について、でしたわ」と、ヒロコは我に返った。

「そうやなあ、連中に共通しているのは共感覚がある言うこと」

「共感覚ですか？」

「音を目で捉えたり、景色や絵を聴いたり、五感が入り混じり複合的に感じられる。

ま、……大なり小なり、人は幼い時に共感覚を有している。がしかし、成長に従って感覚にはっきりと垣根が生じ、共感覚は消え失

せてしまうんや」
「何故、消えるんですか？」
「必要がないからや。いや、むしろ有害なんやな」
「体にとって、と言うことですか？」
「宇宙の秩序のため」
一平は首を傾げる。「仰っている意味が……」

老人は笑った。
「追々説明させてもらうが、……先ず私の特別と思われている能力は生まれつきではなく、感覚の垣根を払うと言う特別な訓練を受けた結果なんよ」

牧野は問う。「一平君、人の脳は不必要に大きいのを知っとるかな？」

「いいえ。……それは、どう言う？」
「人間は持って生まれた脳力の半分も使わず、成長期を終えると、スリープしている脳細胞組織は退縮して行く。
そして、ほんのちょっと余分に働かせる者が天才とか超能力者と呼ばれるのや」

「でも何故、使用もしない脳が備わっているのでしょうか？」
「良い質問や。これは人間だけでなくイルカ等にも当てはまるんやが、理由は三つのどれかと考えられる。
一つは自然の悪戯。しかし、起こることは全て意味があるはずやから、この偶然説に関してはＮＯ。
二つ目は必要があるから発達すると言う見地から、人類の進化過程でそれだけの脳力を使わねばならない環境が存在したと言う、過去の遺物」

「現代より脳を使う時代環境は存在しなかったはずですが」
「しかし、我々に備わっているはずの能力から言えば、情報社会の現代ですら人間の脳には退屈で勿体ないと言わざるを得ない」
「不思議ですね」

「そして、三つ目。私の持論でもある人間の発生起源が所謂自然発生では無い言う……」
「自然発生じゃ無い？」
「人類のみならず全生物の発生学と歴史を突き詰めていくと、何時もその辺に行き当たるんやが、一種の人為的……」
「それは……？」

「その辺のところは追々。ま、今回は私の人生においての疑問を解く、言わば人生のミッシンリングを埋めるタイムトラベル言ったとこなんや」

そして、ウイスキーを自らと一平に注ぎ、自らの現在に至った特異な体験を話し始めるのだった。

十九話（後書き）

投稿の間隔が遅くて申し訳ない。
次から少し速度早めて投稿します

二十話・ライオン

「信じるか否かはともかく、そんな御伽噺が存在するかもしれんぐらいに聞き流して欲しい」

話す牧野は懐かしそうだ。

「牧野家は代々南相馬における庄屋で、房州流山以来の相馬家の家老を務める藩の重鎮であり、サンカ族との特殊な関係もあったせいで藩内では一二の最も豊かな家やった。しかしながら、牧野家の宗家には代々何故か男子が生まれない。私の代になっても女しか生まれんかった。

私は貧乏分家の二人兄弟の長男に生まれたんやが、本家の養子として迎えられることになった。何しろ当主の周次郎は中風で臥せっており、義母は私より四歳上の加奈子を産んだときの状況が悪く子供を産めない体になっておったんや。

因みにその加奈子が三十年前に死んだかみさんで、ヒロコのお祖母ちゃんに当たる」

「お祖父さまが何歳の時ですか？」

「親父がシベリア出兵の際の事故で死んでから四年後のことで、尋常小学に入る一年前やったから六歳の時や。

本家の敷居を跨ぐのは初めてやったから、屋敷の立派さには圧倒された。お袋がやけにぺこぺこしとった」

「その家って、小高の牧野家の？」

ヒロコも初めて聞く話らしい。

「あれは分家の方や。本家は浮き舟城跡から二キロほど下った所に六千坪ぐらいの広さやった」

浮き舟城は小高町にある相馬の出城で、巨船が空中に浮いているように見えたので、そう言われている。

「……幼くして養子に入った寂しさは言葉に尽くせない。唯一の救いは、姉になった加奈子が弟や言うて、彼方此方ひっぱり回したこと。夜は寂しくないようにと、私の離れ部屋に毎晩のように出向いて、添い寝してくれた」

牧野は淡々と話し続ける。

「初めのうちこそ、お袋は弟の麻八を連れてちょくちょく来てくれていたのやが、やがてそれも無くなった。思うに、お袋は見るからに典型的なミシャセやったので、大牧野と呼ばれているお大尽な本家に、未来の当主のお袋面をして頻繁に出入りされて欲しくなかった」

「酷い話！」

牧野は憤慨するヒロコを制した。

「当時、その手の話はそれほど珍しいことではなかったんや。まあ、そのお陰言うのは何やが、貧乏だった私の生家も本家の援助で大分助かった」

「六歳でしょう？母親の温もりが欲しい時期ですわ」

「ま、そのせいか段々反抗的になり、二、三年経つと、毎日のように道草を食っており、学校から直接家に帰った記憶がほとんど無い」

「道草って、何をしてたんですか？」

「概ねミイヤのところで遊んでおった。特にミシャセが頭領の息

子やった羅門が可愛がってくれて、自然生活、野外生活等を遊びながら教えてくれた」

「それは、どんなことですか？」

「自然に身を委ね楽しく生きること。鳥や獣、虫などの言語システムを理解したり、風の流れや匂い、雲の動きや形などで天候を見たり……」

老人の瞳は幼少に戻っている。

「私がミシャセたちに家族のように、いや、それ以上になったのは、牧野の御曹司いうだけでなく、ある事件を契機にしてからなんや」

それは、当時の陸軍航空局が小高町にあった原野と田畑を潰して飛行場にする計画を発表したのに端を発する。

問題は、その一部にミイヤの聖地とも言える甲子大国神社が含まれていたのだ。

ことは、ミイヤにとってアイデンティティに関わる重要事である。サンカは接収される田畑の地主と共に猛烈な反対運動を繰り広げた。

建前上、大国神社は牧野家の所有地であり、当初は御国のためと接収に応ずることにしていたのだが、牧野少年は八歳にしてミイヤへの仲間意識から進んで運動に加わった。

神社を所有する相馬で重鎮の子息が、それも僅か八歳の子供がサンカのために立ち上がったのは、社会的に結構なインパクトとなり、連日新聞やラジオが取り上げ始め、やがては全国的に知れ渡る。

結局、小高町の飛行場は取り止めになり、現在福島第二原発の楢葉町に作られることになった。

以来、修也少年をサンカ族は聖地を守ったオダイとして、三つ目のラ・オダイ（真のオダイ）と呼び始める。

「妙な気分やった。羅門兄たちと一緒に騒ぎたい理由でミイヤの運動に参加しただけなのに、お祭り騒ぎの延長が何時の間にか一人歩きして、気が付いたら伝説になっていた」

牧野翁は急に話を変え、一平に尋ねる。

「ところで、私がライオン言われているのを知っているかね？」

「そう呼ばれているのは伺っていますが……」

相馬地方は祭りと民謡の郷である。

野馬追い、お盆祭りが終わると秋祭りがやって来る。

当時小高町の秋祭りは相馬の旧領の中でも取り分け盛大で、ミイヤたちの大祭である甲子大国祭も併催され、大変な賑わいであった。

その祭りに合わせて毎年サーカスがやって来る。

牧野修也はキの印がつくぐらいのサーカス大好き少年だった。

笛と太鼓を鳴らしながら街を練り歩き始めると、もう居ても立ってもおられずにパレードの間中、終始彼らに付いて回っていた。

サーカスの出し物は、空中ブランコ、綱渡り、動物芸、後は自転車や一輪車等を使ったもの、皿回しやら奇術、滑稽なピエロの演技等々。中でも特に人気なのが動物芸、取り分け白ライオンによる猛獣ショウだった。

獰猛な人食い白（白化）ライオン・シンバが散々猛獣使いを手こずらせてから火の輪くぐり、最後には猛獣使いがその凶暴なライオンが開く口の中へ、強引に自らの頭を突っ込んで見せるというショーだ。

修也少年は毎日欠かさず見に行くほどの入れ込みぶりだった。

しかし、初めのうちこそ、そのスリリングさに興奮していたが、毎日のように同じものを見ていると、見えなかったものまで見えてくる。
やがて、動物とのコミュニケーション訓練を受けていた少年は、凶悪な人食いと称する白ライオンが、実は単なる気の良い大きなドラ猫であるのに気付く。

忘れもしないその夜、七郎少年が大牧野の屋敷に忍んできて、離れにある修也の部屋の窓を叩いた。

「冒険に行こうぜ！」
七郎少年の提案は〔夜のサーカス小屋探検〕だった。

その夜は雲ひとつない星空で、月が煌々とサーカスのテントを映し出し、夜の広場にくっきりと浮かび上がっていた。
大テントの後方に取り囲むように点在する団員の居住テントには仄かな灯りがちらついていて、生活の匂いが感じられた。
二人の興奮はただ事ではなく、後々まで、思い出すだけでドキドキするほどだ。

もぐり込んだ大テントの中は微かな明かりはあるものの、人気はない。
二人は中央にある玉乗り用の大玉を転がしあったり、綱渡りや空中ブランコ用の安全ネットに飛び込んでふざけ回った。

やがて一頻りの忍者ごっこを終えると、内部の探索を始める。
舞台裏を探索中、目の前に照らし出された人影に肝を潰し、小道具に足を取られて修也は引っくり返った。

正体は壁に吊るされた縫いぐるみだった。

突然、テントの外側から人の気配があり、ステージ中央の照明が突然灯されて作業服の中年男性が入ってきた。

侵入者達は固まった。

一目見て修也は、それが昼間のピエロ役であるのに気付いた。

男は酔っている。

彼は広場の隅に立てかけてある大箒とバケツを取り上げて、引き上げようとした。しかし、広場の真ん中に転がっている玉乗り用の大玉に気づき、立ち止まった。

男は首を傾げ、辺りを見渡してから再び歩き出す。

七郎は修也と顔を合わせ、ほっとしたように大きく息を吐いた。

すると、再び男は酔い足を止めて楽屋裏を窺うように見て「誰か居るのか？」と声をかけた。

彼は役柄のピエロのように大袈裟に肩をすくめ、照明を消して立ち去ったが、怖気ずいてしまった二人はそそくさと大テントを脱出して帰ることにした。

ところが、動物達のテントを通り抜けかけた時、修也は白ライオンを思い出した。

「待って！挨拶しておきたいのが居んだ」

修也は七郎少年を尻目に動物テントに潜り込み、ライオンの檻を見つけ出した。

修也がライオンに友達のように話しかけると、シンバは鉄格子に擦りより、低いくぐもった唸り声を上げた。

修也はシンバが退屈で飽き飽きしているのに同情し、閂を外し檻

から開放してやることを告げる。
「冗談だべ？人食い猛獣が放されたら大変だぜ」
「こいつは聞き分けの良いデカ猫だよ。それにお利口だから話が解る」
修也はシンバに、夜の散歩を終えたら檻に帰るよう真剣に（冗談なしに）言い聞かせている。
当然、七郎は修也の行為を止めようとした。しかし、修也が格子越しにシンバの頭を撫で、親しそうに意思を疎通し合っているのを見て、七郎は納得せざるを得なかった。
帰り道は冒険を終えた楽しさにゆっくり歩きながら静かに話し合っていた。
しかし何時の間にか何かに追われるように歩みが次第に速くなり始め、別れるときにはもう既に走っており、話と言うより怒鳴り合っているような状態。
屋敷に帰った時には完全に息が上がっていた。
「で、ライオンは如何なったんですか？」
話しの中に一平は入り込んでいる。
「それがやはり気になった。所詮は獣、意思の疎通が十分とは言い難かった」
遠くを見るように牧野は話し続ける。
「九時頃かな、町中にサイレンと半鐘が一斉に鳴り響いた。やがて、月夜を切り裂くように二発の銃声が聴こえた。
加奈子が離れの部屋に枕を持って来て、不安そうな様子で私を抱きしめ、『サーカスの人食いライオンが逃げ出したらしいの』と、

姉さんぶりながら添い寝してくれた」

「ライオンが撃たれたんですか？」

「それが意外な展開でな、突然、障子戸を通して外から大きな息吹きと微かな唸り声が聴こえたんや。怯える加奈子をそのままに出てみると、心臓がひっくり返るほど驚いた。

入り口の近くの植え込み中、肩口に血を滲ませた白ライオンが窺うように潜んでいた。その碧い瞳には激しい怒りと恐怖が見て取れたので、気を静めようと私は必死であやすように語りかけた。

そして、穏やかになったシンバを撫でながら傷口を点検したんや。傷は差ほどではなく、銃弾が掠っただけのようで僅かに皮膚が剥げ血が乾いて固まっていた」

「如何して先生の居場所を知ったんでしょうか？」

「それは追々として、奴が助けを求めていたのだけは分かった。途方に暮れた結論は、決断の七ちゃんや」

「結局、七郎先生なのね」ヒロコは茶々を入れる。

「私はシンバに止まっているように命じて、七ちゃんを迎えに行った。

彼の家である鈴木歯科医院は町のほぼ中央に在り、その裏庭の離れに弟の昭男君・康夫君と寝起きしていたんや。門を乗り越えて、部屋の雨戸を叩くと彼は直に戸を開けた。彼もほとんど眠れなかったらしい。

康夫君を残して、昭男君を加えた三人がシンバのところに戻った時には、七ちゃんらしく郊外の大悲山部落の羅門兄の家までシンバを移送する計画を立てていた。

私は加奈子に夜が明けたら状況を義母に説明するように言い残し、麻縄で引き綱して羅門兄のところまで連れて行ったんや。

町内は警察やら猟銃会やらがサーカス団と共に血眼になっていたので、実にスリリングな道中やった」

「大胆と言うか、凄い話っすね」

「人生観を変える経験になった。俊の兄貴などはその冒険に彼を誘わなかったことを責めるぐらい羨やましがっていた」

「それから、どうなったんですか？」

「部落中の大騒ぎになった。何しろ、ラ・オダイ少年が仲間と共に白い百獣の王を従えて身を寄せて来たんや。長老会議が直ちに開かれ、ライオンと私たちの処遇について町やサーカスと折衝してくれた。

それにしても、その日は何処から湧いたのかと思えるほど多人数のミイヤが我々を見物しに集まった。

シンバも束の間の自由と、しし肉をたらふく食べさせてもらい幸せそうやった。大きな白い猛獣が私の言うとおりに動くと、その度にどよめきに包まれたんよ。

それからまあ、次の日の夕方にはサーカスと警察が引き取りに来て、その件はドンと払い。

以後、三つ目改めライオン少年の名を不動にしたわけや」

一息ついて、語り部は喉を潤すかにウイスキーを飲み干した。

「問題はそれ以後の学校生活や。特にクラス担任の芦川言う教師が最悪でな。ある種の妬みだったのかもしれんが、私を矯正教育する言う名目で、陰湿なイジメが始まった。

それがあんまりなので、見かねた七ちゃんが職員室に抗議をしに行った。それがまた、教室ぐるみのイジメに拍車がかかったみたいで、あれには流石に参った。まあ、今も昔もイジメの原因は担任の先生や」

「どのように打開したんですの？」
牧野は得意そうに笑った。
「学校に行くのを止めた。逆立ちしても嘘つきで狡猾なイジメ教師には対抗出来ん。
彼らは【加害者も悪いが被害者にも問題がある】言う思想、つまりイジメられる奴も悪い言う日本人の思考を利用する。
私はせめてもの、その教員の悪口を言い触らし、不登校を決め込んだ」

車窓を眺め、思い出を探るように老人は話す。
「牧野家は相馬郡でも指折りの有力者で、町も学校も私の不登校はかなり困ったらしい。
色々なところから働きかけがあった。しかし、もう学校自体に行きたいとは思わなくなっていたのや。その間は日課のように羅門兄の井理家に通い、一人で当てもなく山野、海岸を彷徨うのが日常になっていた」

驚きも露に、一平が牧野の話を遮った。
「羅門さんの苗字は井里って言うんですか？」

「井里やが、それが何か……？」

「母の旧姓が井里なんです！羅門さんは体が大きかったんですよね」
「と言うことは、君のお祖母ちゃんは……」
「ユメです」

「羅門がお祖父ちゃんになるんかあ。それじゃあ、君は本当に私の孫みたいなもんや」

牧野は大きく頷いた。
「道理で、初対面のような気がせんかった。君は容貌も感触もお祖父さんにそっくりや」
老人は考え込んでいる。
「これは偶然やない。先ほどの康熙との思わぬ出会いと言い……」
暫しの沈黙。
「すみません、話を逸らしてしまって。不登校してから、先生は？……」
と、一平は話を戻した。
「出会いの日々やった。……通常では知り合う機会のなかったと思われる樵、猟師、乞食、修験僧、博徒、漁村の漁師たち諸々と出会い、親しくなって、貴重な経験と知識を得ることになった。
そして、年明け早々に、忘れもしない私の運命を決めた日。
年賀にしては大仰な人数、十数人のミイヤが正装して牧野家に来訪した。その中に羅門兄もおった。
例年のきまりきった年賀の口上後、彼等は、阿武隈の山奥にあるミシャセの特別英才養成所（修学道院）で私を三四年教育したいと申し出たんや。
で、話し合いの末、それは了承する事となった」
「よく牧野家は承諾したわ」
「いや、牧野家も私の頑固さを持て余していたようだし、渡りに船やったんやないかな」

二十話・ライオン（後書き）

次回から牧野博士の少年時代の話となります

二十一話・サンカの祭り

羅門兄が一頭の驢馬を引いて迎えに現れたのは、それから約一ヶ月後の早朝だった。

見送りは町中総出で，　実家の母や弟の麻八等親戚、七郎や俊英等の遊び仲間まで駆けつけた。

加奈子は涙をいっぱいにして、身に着けていた紅玉石の勾玉ネックレスを外して修也の首に掛ける。

「これは、代々家宝のお守りなの。着ける者は全てと通じ合えるようになり、災難を祓ってくれるって」

万歳三唱を背に、勇躍二人は牧野屋敷を後にした。

一旦、外れ部落の井理家に立ち寄り、長身の羅門用に大きな騾馬（驢馬と馬の混血）等を調達。防寒の装いを新たに出発の準備を整える。

牧野修也の数奇な人生の旅は、大悲山の薬師堂石仏観音（通称大蛇神社）の参拝から始まった。

山門の傍らに大悲山の謂れと大悲山・琵琶法師物語が記されていた。羅門はその物語に隠された歴史の背景と、ミシャセの辿った苦難を噛み砕くように説明する。

苔むす石段を登りきると、樹齢一千年を越える古代杉の二本の巨木が辺りを睥睨するかに聳えていた。

古色蒼然とした社の錠前を外し扉を開けると、数百年間の時を越えて色鮮やかな磨崖佛群が佇んでいた。

仰ぎ見る薬師堂石仏、阿弥陀堂石仏、観音堂千手観音仏、そしてその側に琵琶を弾く法師を巻くように一頭の大蛇（竜）が聞き惚れている。

そこには大悲山物語・大蛇と琵琶法師の出会いから、大蛇が妖女に化身し神矢に射殺されるまでが克明に彫り描かれていた。

寒く古黴の匂いに満たされていた社を出ると、修也は生き返ったように大きく息を吐いた。

羅門が笑った。

「いざ、我等が劇場の幕開けだぜ！」

二頭の騎馬は大蛇神社の参道を通り抜けて山道を歩み、そのまま獣道に踏み込んで行く。

狭く薄暗い谷間を抜けると、自然の木々や岩等の地形に隠蔽されている舗道が忽然と現れた。

路面は細かい礫石で平坦に固められ、騎馬二頭が悠々と並走できる幅があった。自然の地形に沿うように岩壁を穿って造られている。

それはミイヤたちが昔から利用している隠密のサンカ道だ。

騎行すること二時間、純白の霧氷に輝く木々の間から目にも鮮やかなコバルト色の鳶沢沼が眼下に見える。

舗道は緩やかな坂道を降り、山林を抜けて、木製の風車が乱立する草原に続く。

二頭は何時の間にか、騒然とした祭りの中に入り込んでいた。

神澤村（サンカの隠れ村）。行きかう人々は色とりどりの祭り衣装を纏っており、村全体が極彩色に飾り付けられている。

色鮮やかなミシャセのテントが村を取り巻くように所狭しと張ら

れていた。
羅門と修也は村に一泊し、更に二人の新入修学生と合流する手はずになっている。
太陽復活祭（通称、早春祭）はハタイットたちにとって最も重要な祭儀の一つとのこと。
犇めき合っている出店や呼び込み、大道芸、笛や太鼓、サンカ琵琶などが鳴り響き、大変な賑わいだ。
人群れを掻き分けるように歩む二頭に、子供たちが集まって騒ぎ始める。
「ラモンがライオン小僧を連れてきた！ライオンだ！」
騒がしい子供たちを引き連れ、村の最奥に鎮座している月山神社の鳥居の前で降馬。
社の馬繋ぎに手綱を置いた。
羅門は付いてきた子供たちに何やらサンカ言葉で叫び、やおら袋から包み飴を取り出してばら撒く。歓声をあげて拾い上げる子供たちは口々に祝福の言葉を叫んだ。
境内は参拝者で溢れており、中央の広場には薪が見上げるほど高く積み上げられている。
人ごみを縫うように二人は参拝し、御神籤や護符などを扱っている祈祷受付所の巫女嬢に来訪を伝えた。
本院の横を通り抜けると、表の喧騒が嘘のようにひっそりと奥の院が佇んでいる。
参道入り口の側に瀟洒ではあるが大きな茅葺の控え家が在った。

玄関の硝子戸を開けると、達磨顔に満面の笑みを湛えた神主服の禰宜が板張りの広間に導き入れる。
修也と同年代と思われる少女と少年が慌てたように麻縄座布団から立ち上がり、目礼をした。
大柄で薄茶色の瞳が輝く少年は修也より一つ年長の竹内沸林（フリン）、東日本小学校柔道チャンピオンにして、全日本小学部学力試験ナンバーワンの文武両道に卓越したスーパー少年である。
茨城の磯原から合流するために来ていた。

少年は修也と顔を合わせると、吃驚したように目を見張る。
修也も修也で、少年に旧知であるような懐かしさを感じるのだった。

短髪の少女（？）の方は長身で頭一つ小柄な修也より高かったが、やはり一つ年長で、当社宮司の一人っ子、秦野弓月（ユズキ）王。
中性的で、額の中央には微かな光を帯びた窪みがあり、きらきらした瞳と透き通るような肌の白さが印象的だ。
ユズキは桃色の祭服に金の冠を戴いていており、今祭りの中から抜け出して来たという姿である。
（全く親に似ていない）

「この度はお世話になります。何しろ早春祭はユズキが祭儀の中心となっていますので、抜けることが出来なく申し訳ありません。お二人とも、ここを我が家とフリン君共々お寛ぎ下さい。すぐ昼食を持ってこさせますので」と、宮司は慇懃に話す。

「委細承知しておりますので、お構いなく。ユズキちゃんが太陽復活祭の大采なのは承知いたしております。

明日は責任をもって高太石山修学道院まで三人を送り届けますのでご心配されないで下さい。
それに、噂に高い早春祭に参加するのが初めてなので大変楽しみにしております」

「それは誠に良う御座いました。何しろ太陽復活祭は我らにとって最も重要な祭儀の一つなのです。
竹内さんからも羅門さんにはくれぐれも宜しくとのことでした。私も竹内さんも引率の見届け人が羅門さんなので安心しております」

そして、宮司は祭儀のためにユズキを伴って退席するのだった。

食事を終えると、お祭り好きの羅門は居ても立ってもいられなくなり、早々に三人は連れ立ってお祭りに繰り出すことになった。
祭りは佳境に入っていた。
爆竹と絶え間なく打ち上げられる花火の轟音。社を取り囲む群集はリズミカルに打ち鳴らされる太鼓の音に合わせて榊の小枝を振り回しながら踊りまくる。

大きな爆発音が鳴り響き、もうもうたる噴煙が月山神社を包み込んだ時、突然社殿正面から煙を開くように金色衣を纏った八人の鬼に担がれた輿が出現した。
屈強な八人鬼は彩色化粧を施し、輿の上には黄金の冠を戴いたユズキが桃色の祭服を風に翻して立っている。

雅楽と笛太鼓、群集の異常な盛り上がりの中、輿は村道をうねるように進み、村外れの五色の色を湛えた不凍の天神沼に至った。

輿から降り立ったユズキは榊の小枝と五十鈴を手に、裸足で黒石に敷き詰められた寒風吹く沼原を歩み、岸辺に膝を折って祈る。

ざわめきは静まり、人々は固唾を呑んで見守っていた。
ユズキは立ち上がり、水面を静々と舞台のように歩む。
「まるで、キリストだぜ！」フリンが声を上げた。
太陽の御子は沼の中の小島に上がり、鈴を振って鎮魂の舞を舞う。すると、雲間から一条の光が射し込み、木枯らしが笛のように吹きわたった。
天女の舞を収めると、ユズキは再び水面を滑るように歩んで戻る。
岸辺に着くや、着火された路面が轟音と凄まじい炎を上げて燃え始める。
羅門は唸った。
「敷いてあるのは石炭だ。この燃え方はガソリンを染み込ませてる」
紅蓮の炎は静まり、一面が高熱の真っ赤なコークスとなり、近づくもの全てを焼き尽くしそうだ。
桃色の祭服を熱風に靡かせ、微かな青い光を帯びたユズキは素足のまま高熱の輝きを踏みしめて歩き始めた。
観衆の中から悲鳴が上がった。
一瞬、神の御子は立ち止まってその方向を見たが、何事も無いように渡りきった。
儀式を終え、見守る人々にユズキがにこやかに手を振ると、堰を切ったように喚声と足踏みが野山に木霊した。
一斉に花火が打ち上げられ、笛太鼓が耳を聾するばかりに鳴り響く。
盛り上がりは最高潮に達した。

「カールヤ（蘇えれ）ハッタイ―！カールヤバーベル！」
皆口々に、歓喜に狂ったように叫び踊った。
深夜に至るまで喧騒は止むことなく、奥まった宿舎の寝所まで潮騒のごとく聞こえていた。

翌朝、ユズキとフリンの加わった出立の時には、昨日の祭りと宴を露ほども感じさせない清涼さだった。
見送りは宮司と僅か数人でさり気無い。
防寒衣に身を固めたユズキの出立ちは、昨夜の妖精を思わせる優美さと異なり、凛としたメルヘンの王子様か、お姫様の趣だった。
一頭の大きな騾馬と三頭の驢馬が連なって集落を通り抜ける時、陽気に手を振る者や口笛を吹く者もいたが、殆どがテントをたたんだり荷馬車に荷物を積み込んだりの帰り支度に勤しんでいた。

二十二話

山道を深く入るに従い、雪が濃くなって行く。

原生林を騎行すること約三時間。

眼前に突然のように耳を聾する雄大な三段の滝が出現した。

「自然がもたらすブナの森の驚異！此間まで、滝なんて影も形もなかったのに」

呆然としていた羅門は我に返ったように告げる。

「もう直ぐ、松蟹沢沼の山津見大蟹神社に着く。そこで、お昼を取ろう」

松蟹沢沼は深く澄んで生暖かく、立ち上がる霧が辺り一面の視界を遮っていた。

「動いてる！」

フリンが沼縁を指差した。

岸辺に無数の蠢きが見られる。

「沢蟹が群れてんだ。ライオンよ、こんなのを見ると蟹まき餡飩を食いたくなるな」羅門が顎を杓った。

「蟹まきうどん！それって、沢蟹を具にしたうどんっすか？」フリンが尋ねる。

「否、沢蟹（モクズ）をそのまんま粉々に潰した搾り汁をミソ味にした熱い麺汁でうどんを食べる。太葱を刻むと最高よ」

「そりゃ美味かっぺなあ！今度食わして下さい」

道は湿地を避けるように迂回して、小高い丘陵地の古びた神社に

続いている。
社の周り一帯は地熱のせいで雪が無く、ほんのりと温もりが感じられた。

玉砂利が敷き詰められた境内の中央には、磨き上げられた御影石のテラスが巨人の食卓のように置かれており、それを十二本の大きな六方石が取り囲んでいた。
参拝を済ました四人はテラスの側に車座に座り込み、洗手お清め場から湧き出ている山の清水を酌み交わしながら、おにぎりの昼食を取る。
四人は知己のごとく打ち解けていた。

食後、羅門は社殿の縁で横になって休息し、ユズキはテラスの上で瞑想に耽る。
フリンと修也は夫々に境内の探索をしていた。
神社の歴史が書き彫られている石版を熱心に読むフリンに、修也は声をかけた。
「フリン君、それ面白い？」
「結構面白え。ハタイットがこの地に、はん祭をあげてんだ」
「はん蔡って？」
「生贄の動物などを焼き、神に捧げるのよ」
フリンは意味を理解しかねている修也に噛み砕くように説明する。
「神にご馳走を捧げて、神のご加護を請うのよ。ヤマツミノハタスメラミコトが、中村の松川浦に上陸してから霊山を経て、この地に至ったとある」

「神様って肉食なんだ」

修也のピント外れの言葉にフリンは肩を竦めた。

「他には何て？」
「冷害のため、人身御供をしたって」
「人身御供？」
「人間の生贄ってこと。その恋人が恨みのため大蟹に変身して大いに祟ったとある」

二人は連れ立って探索する。
「ところで、ライオン君。君には朝鮮人の親戚はいないのげ？」
「いや、ミイヤの血は濃いけど？」
「俺の弟分で、お前にそっくりで生意気な朝鮮の小僧が磯原に居んだよ」
「朝鮮人？」
「その親父が憧れの人で、カッコいい帝国軍人なんだ」

社の裏手に回ると小さな祠があり、それを守るように精巧な蟹のブロンズが置かれていた。

「蟹ばっかりだ」
フリンはうんざりしたように一匹の子蟹を捕まえ、食べるまねをしてから藪の中に投げ捨てた。

突如、森のしじまを破るユズキの叫び。
駆けつけると、羅門はテラスに立って沼を指し示した。

目を疑う光景だった。
沼から吐き出されるかに、薄黒い絨毯のような広がりが神社に迫りつつあった。

「蟹の群れだ！凄い数！」

ユズキが叫ぶ。「深い悲しみ！恐ろしい憎悪！」

鳥居前の馬繋ぎに急いで駆けつけると、地を這う蟹の群れに驢馬が怯えるように鳴きながら跳ね上がっていた。

沢蟹を踏み潰し、慌てふためいて神社から松蟹沢沼に架かる野積橋を駆け抜ける。

だがホッとする間もなく、いきなり前方に、大きな泡と共に沼底から水柱を立てて、何と象とも見紛う巨大な化け物蟹が飛び出て来たのだ！

磐のような化け物蟹は、行く手を遮るように凶悪な鋏を鳴らし威嚇する。

羅門は飛び降り、眦を上げて山刀を抜いた。

「待って！」

ユズキの声が鋭く貫いた。

ユズキは羅門を押しのけ、恐ろしい怪物の前に進み出た。

掌を向け、命令するように二三言叫び、大きな素振りで何事か訴える。

化け物蟹は周り一面に泡を撒き散らし、幾度となく無防備なユズキに必殺の大鋏をバチンバチンと鳴らした。

ユズキの断固たる態度と化け物の恐るべき脅迫は、シーソーのようにユズキと怪物の間を行き来した。

やがて大蟹は後退し、悠然と水底に姿を消して行った。

唖然としている三人へユズキは微笑んだ。

「もう、大丈夫」

這う這うの態で脱出した一行は、一転して清浄無垢な白一色の森

に入り込んでいた。
雪の森は深く、つい先ほどの騒乱が嘘のような静寂に包まれている。
羅門はユズキに驢馬を寄せて感謝した。
「君に助けられたようだ。今頃、俺達はあの化け物の昼食になっていた」
「私の方こそ出しゃばってしまいました。それに、あれは多分に私のせいなんです」
ユズキの答えは謎めいている。
小一時間緩やかな坂を上り続けると、雪渓の中に隠れるように葛久保の洞窟が在った。
「ここは聖地の中の聖地、神聖元郷の門あるいは異星界門と呼ばれる葛久保の洞窟だ。
……これからはきつい道程になる。此処で一休みしてから出発しよう」
洞窟の前の川砂利が広がった三角州に騎馬を進める。
高さ二十間、幅六間ほどの洞窟壁には、彩色がほとんど剥がれ落ちている妖怪めいた磨崖像が無数に彫られており、内から澄み切った清水が懇々と流れ出ている。
奥まったところに小さな社がひっそりと佇んでいた。
一行は下馬して参拝する。
羅門は洞窟の謂れを紹介した。

「この洞窟は役の小角の社で、幾重にも分かれたトンネルは葛城山は元より、世界中の洞窟、地下に通じていると言い伝えられている。
また、イザナギノミコトが黄泉の国からの脱出に岩戸を閉鎖したヨモツ平坂の洞窟にも通じており、時折、黄泉の国からイザナミとその使いが結界を破ってここから彷徨い出て、出会う人を死の世界に誘うとも言われている」

雪のない三角州の中央には焚き火の跡があり、まだ温もりがあった。

羅門が呟いた。
「半刻も経っていないな」
「猟師だっぺか？」
「否、道院行き。お仲間よ」

焚き火を囲むように座り、羅門から配られた包み飴を頂く。
落ち着くと、三人は松蟹沢の恐ろしい体験を話題に、ユズキへの感謝を表すのだった。

ユズキは意を決したように立ち上がる。
「先程の出来事は私のせいなんです。これからのことを考えると言っておいたほうが良いと思うので……。
羅門さん同様私も葦船で川に流されていた捨て子だったんです。身分を示すものは一緒に包まれていた青い水晶髑髏だけ。それを、今の両親が実の子供として育ててくれた……」

徐に、ユズキは鞄から布袋を取り出し、通常の人頭より小ぶりな青水晶の髑髏を公開した。
曇りなく光を屈折反射させる見事な逸品。

手に取ったラモンは精巧な作りに感嘆の声を上げた。

フリンは首を捻って、ためすがめす観察する。

「大きさから推定すると、身長四尺チョイと、言ったところ。人種的には小柄な東洋人みたいだ」

修也は恐る恐るスカルの滑らかな頭頂に触れ、溜息を漏らした。

三者三様の反応を傍らに、ユズキは淡々と話す。

「出生が関係しているかはともかく、あんなことは私の周りにしょっちゅうで、それが誰にでもある普通のことだと疑いもしなかった。

それが、とある事情で私にだけ起きる特殊な事と気が付いたんです」

フリンが説明を求めた。

「つまり、あの化け物は君が呼び寄せたってこと？」

「呼んだというより、違った世界に居てお互いに気が付かなかったのが、私の何かが原因でお互いの世界が見えて感じるようになるの」

羅門は唸った。

「審神（さにわ）と神懸りが合体して出現するようなもんなんがな？」

フリンが尋ねる。「特殊だって気付いた、その事情ってのを知りてえな」

「物心付いた頃からこの世のものではないものたちが見え、彼らと何時も一日中話しをしたり、聞いたりしていたんです。

でも、私以外は誰も彼等を見ることも出来なかったので、皆は私が独り言を言ったり聴いたりしているおかしな児と思っていたみた

い」

ユズキは、話すのを躊躇するように一旦言葉を切ってから話し出した。

「身内に女たらしで女衒を生業にしていた叔父がいて、性悪のうえ、異常な幼児趣味の変態だった。

それが、その邪な欲望の対象を私に向けて、東京から神の沢に帰ってくると、たえず昼夜を問わず私に付き纏い、私の悩みの種になっていた。

その頃、私は学校から帰る途中で毎日のように必ず天神沼の畔に立ち寄り、妖精たちと話したり遊んだりしていたんです」

「僕も独り言小僧ってよく言われるよ」

話の腰を折るように場違いな意見を修也が述べると、ユズキはむっとして言った。

「信じない人、見えない人、経験のない人は分からない」

「確かに。経験しねえと、信じられねえ」

フリンは化け物蟹が去った後に拾った、太い針金のような足毛をポケットから取り出した。

「台風前で、風が強く今にも雨が降りそうな午後だった。

……日没寸前まで、馴染みの妖精・エロイカと過ごしていたんです。

すると、叔父が突然現れて『道草を食って悪い子だ。お仕置きが必要だ』って、嫌がる私に酒臭い息をかけながら迫ってきたの。

抱きすくめようとする変態酔っ払いに激しく抵抗したため、叔父は怒って私に暴力を振るい始めた。

その時、叔父は突然の足の痛みに飛び上がり、その原因が私を助けようとした一尺にも満たない妖精エロイカだと気付いた」

フリンは話を遮った。
「他人には見えねえんじゃなかったの？」
「そう、見えるはずも触れることも出来ないはずだった人間と妖精が直に遭遇した」
「それで、どうなったの？」
修也が話を促した。

「叔父は信じられないような顔でエロイカを覗き込むと、突然野獣のような吼え声を上げて蹴り飛ばし、半失神状態の妖精を捕まえた。
そして、それをしみじみと見てから狂ったように笑い、『これは売り飛ばしたらいい値になる』って」

ユズキは話しているうちに感情が高ぶってきたのか急に涙ぐみはじめた。
「エロイカは私にとって兄弟姉妹以上で、共に喜び、苦しい時も悲しいときも私を励ましたり慰めてくれる存在だった。
家に帰った叔父はエロイカを鉄製の鳥篭に閉じ込め、家族や神社の全ての人に自慢げに見せびらかした」

ユズキは首を振った。
「必死だった。泣きながら『エロイカを解放してくれるなら、何でもするから』って、叫ぶと、叔父はいやらしい笑いを浮かべ、『言うことを聞くならば、放してやっても良い』って言ったんです。
そして『今夜、俺の寝所に忍んで来い』って、命じたの」

フリンは立ち上がり、落ちつかない口調で言った。
「それ以上は聞きたくねえような気もすっけど、妖精は解放されたの？」

ユズキはフリンの様子が可笑しかったのか、気を取り直してくすりと笑った。
「夜になると台風は一段と激しくなったけれど、私はそれどころじゃなかった。
行こうか行くまいか迷った末、大切なエロイカのため、この身を犠牲にするしかないと決心した。
激しい風雨の中、離れの叔父の部屋を訪ねると、叔父は素っ裸に一枚の寝巻きを羽織っただけのだらしない姿で、入り口に背を向けて机の前の椅子にもたれかかるように座っていたんです。
机の上にある鳥篭は開け放たれており、エロイカの影も形もなかった。そして、私の呼びかけに叔父は何も答えなかった」

ユズキは一旦話すのを止めて大きく息を吐き、話し始める。
「そこで、叔父が呼吸が停止して冷たくなっているのに気が付いた。眉間の真ん中に、小さな鉄の矢が羽元深く脳を貫くように突き刺さっていた」

「殺された？誰に？」
「妖精たちに」ユズキは微笑んだ。

「事件の事情聴取は否が応でも、いかに自分が世の中で非常識な存在で特殊なのかを認識させられた。
ただそれ以来、次から次と心に浮かんだことが実体化するようになり、いまだに上手く調節しきれないでいる」

「化け物蟹もそうなんだ」修也は頷いた。

「あそこには憎悪と悲しみが渦巻いていた。全ての希望に見捨てられた絶望の感情よ」

「でも、それって遥か昔のことだっぺよ？」
「関係ないみたい。時って、多分、思い込みなのよ」
羅門は徐に口を開く。
「それは制御が出来るようになんのかな？」
「私が修学道院を望んだ第一の理由が、出来るのは道院しかないと思ったからなんです」

二十三話

共に捨て子で山人に拾われ育てられたと言う二人（羅門とユズキ）は、長年来の知己のように親しく語らっている。
ユズキは鬱積した思いを解き放つかに話し続け、羅門は我がことの如く受け止めていた。

束の間を惜しんで、洞窟の奥に入り込んで何やら探索しているフリンに、修也は声をかけた。
「フリン君、何か見つかった？」
「此処は中々面白え。時間があれば、もっと奥まで調査できるんだがな」

修也は構わず話しかける。
「フリン君、さっきのユズキちゃんの話、どう思う？」
「思うも思わねえも、実際に浮世離れしている化け物蟹を見てる。それと、俺も蟹の群れに襲われた時、強烈な悲しみと憎悪を感じたんだ」

「ところで、ライオンよ」フリンは修也に呼びかけてから、洞窟前の焚き火で談笑するユズキと羅門を窺い見た。
そして、囁くような小声で聞く。
「お前、ユズキを好きになってっぺ？」

「仲間だからね」
「惚けんなよ。ユズキにほの字なのはバレバレだぜ」

フリンは暫し考えを巡らすかに修也を見つめていたが、意を決したように言った。

「言っとくけど、ユズキはまともじゃねえ。ガキが惚れるには重いよ」

フリンが口にしたのは衝撃的な事実だった。
「ユズキの指が六本あっぺ？」
「それは・・？」
「弓月王はアミリウスなんだ」
「アミリウス？」
「人間が男と女に別れる前の種族。先祖帰りで稀に出現するらしいんだ」
「先祖帰りって？」
「人類創生時の原型。六本指で、二成だよ」
「フタナリ？」

難解な言葉の羅列に頭を捻る修也に、フリンは噴き出した。
「何も知らねんだな。ユズキは両性具有者。ミシャセでは知る人ぞ知る話よ」フリンは噛み砕いて説明する。

葛久保の洞窟を出ると雪は益々深く、途はかなり険しくなっていく。

急勾配の森を抜けると、一面に開けた水境高原に到達する。
白銀の彼方に、目的地である高太石山がその雄姿を現した。
幾筋もの雪道は合流して広くなり、なだらかで踏み固められた街道となった。薄霧が地を這うように幾重にも棚引き、時折紫を帯びた濃霧が大河のように流れていく。
彼方此方にポツリポツリと高太石山行きと思われる騎馬の集団が見られる。

街道に合流していたグループから長身の青年が、派手な陣羽織風のマントを翻して騾馬を寄せて来た。
「羅門！ラモンだえ？」
長髪をポニーテールに纏めた、一見したところ薄化粧をはっているように見える色白のゾクっとするような美形だ。
「おおう！妖しげと思っていたら、エンキ兄。派手なイカレぶりは相変わらずだ」
「お前こそ、相変わらず口がへらね。岩手の石鳥谷を出る際に、お前が優秀な新入生を引率して来るって聞いてたんで、楽しみだったんだえ」
大きな騾馬に長身、顔立ちも何処か似ている青年二人は互いの右手を組むようにガッチリと握手した。
須佐野円気は、入れ替えで道院の指導員を任命されたことを話した。
「じゃあ、兄貴と入れ替えで去る指導員は？」
「まんず、稀代の能力者・亀井三郎だから、荷が重い」
ラモンは笑った。
「その三郎先生と道院で合流する予定なんだ。
それにしても、院一番のやんちゃだった兄貴が先生がや」
「格闘術教師を仰せつかっとる」
「格闘術？医専を卒業したんじゃなかった？それに、得意はギターのほうだべ」

羅門はエンキが背負っている楽器らしきものを指差した。
「それ、ギターじゃないの？」
「今は和楽器一筋よ。数年前から、妹の麻耶ともども琵琶に嵌ってる」と、引率してきたグループを指差した。
おかっぱ頭の美少女が羅門の視線にペコリと頭を下げた。
「琵琶？」
「和楽器と言っても、芸者なんかの色っぽいのとは訳が違うぜ」
羅門は首を振った。
「それにしても、エンキ兄が武術の教師先生とはな……」
「実戦柔術・和術諸賞流の皆伝だ。ま、今回は医療部の医務官も兼ねてのご指名なんだがな」
「ともあれ、兄貴が道院に居るのは心強い」
円気は話を変えた。
「お前のことはけっこう話題に上る。甲子大国神社の闘争は一躍、羅門の名をミシャセ中に轟かした」
「いや、あれは、ここにいる未来のオダイ・牧野修也に負うところが大きい」
羅門が修也に顎をしゃくると、須佐野円気は芝居がかった大仰な仕草で声をかけた。
「まんずまんず、聖痕のラ・オダイ少年とお会いできるとは光栄だなっす。人食い白ライオンを連れて夜間散歩したんだって？」
「恥ずかしいです」修也は顔を赤らめた。
「寺社合祀令反対の熊楠先生が君等の闘争に興味が有るらしくっ

て、何度か連絡をいただいたんだえ」
「クマクスって、南方先生がか？」
円気は何か可笑しいのか、くっくと笑った。
「我等が誇り粘菌学の南方熊楠よ、寄る年波には勝てんので、落ち着いたら和歌山まで連れて来いって」
エンキは楽しげにフリンとユズキを流し見た。
「君が学業日本一になった秀才・竹の内沸林君かあ。柔道も強いんだってな」
そしてフリンが答える間もなく、ユズキに向かって、
「超えてるオーラと麗しさ、天使も花の妖精もかくあるべしか！想念体アミリウスにして超天才って噂はかねがね」と、手を広げて大袈裟に挨拶するのだった。
円気の直入なアミリウス発言にギョッとして修也はユズキを振り返った。
ユズキは白面を紅潮させ、にっこり微笑んだ。

純白の聳え立つ高太石山麓の崖道を迂回するように騎行する。
白樺林の中から忽然と、無数の風車群に囲まれた風神の谷村が出現した。
温泉の蒸気煙が立ち上っている集落の中央は、半分が氷河に削り取られた渓谷の上に一段と競りあがった高台になっている。
慟哭の丘と呼ばれるそこには、大きな木造校倉（修学道院）と白いサイデングの温泉療護病院が、巨大一本銀杏樹を取り囲むように、

異国的な佇まいを見せていた。

突然、ユズキは目を見開き怯えたように立ち止まった。

「身を裂くような強く深い悲しみ！果てしない怨念！」

すると、フリンまでが「大樹から発する恐るべき力が……」等と、言い始める。

エンキが一行の異様さに気づく。

「如何したんだえ？お化けでも見たのか？」

羅門が説明する。

「ユズキは霊体質で、我々に感じないものを感じ、見えねえものが見える」

エンキは立ち往生している前に騾馬を進めて、妹の麻耶に叫んだ。

「姫っこ、用意しろ！弦を弾け！」

「はいな！兄さ！」素早く麻耶は降馬し、エンキから琵琶を受け取って構える。

エンキは深呼吸するように両手を空に掲げる。

「天上天下の神と竜と精霊よ、魂の息吹を御覧あれ！」

大気を切り裂くような鋭い大音声を発してから、やおら青光りした山刀を抜き放つ。

巧みに馬を操りながら少女の琵琶を伴奏に、大声で朗々と歌いながら踊り始めた。

長身のしなやかな肢体・流れる髪と相まって、金糸に煌めく陣羽織風マント、山刀の風をヒュウヒュウと切る華麗にして異様な躍動美に圧倒される。

歌、音楽、刀と馬が、エンキが操る奇跡の線上に躍っている。

やがて、息を呑む人馬一体の剣舞を鮮やかに舞い終えて鞘に収刀するや、エンキは馬を降り、騎士風に恭しく手を広げてお辞儀をしてユズキの馬口を取った。

「南部超絶破邪の舞。邪気はすっかり御祓い申し上げたので御安心されい。これより、須佐野円気が露を払って先導いたす」

一陣の風。弩迫力な剣の舞に度胆を抜かれたユズキは「恐れ多いです」と、頷いた。

期せずして、見ていた周りから歓声と拍手が一斉に湧き起こった。

何時の間にか琵琶奏者の麻耶が、寄り添うようにユズキの側に馬を寄せている。

羅門はエンキに騾馬を寄せた。

「見事な剣舞恐れ入った。雰囲気が雰囲気だがら、気が触れたかと思ったぜ。

初めて見たが、感動の超絶破邪の舞は南部藩の伝統芸なの？」

エンキは羅門の袖を引き、羅門の耳元に囁く。

「俺は演出家で創作舞踊もやる。偉才には沢山の玉手箱があるのよ。

道院生活は退屈しなくてすみそうだえ」

除雪されている集落の街路は正方形の敷石で全舗装されている。

既に灯されている街灯の中を、一様な黒ずくめマントの人々が此処かしこ静かに往来しているのが見られた。

道院に入ると、門の受付所は黒山の人だかりで、新入道院生の引率、あるいは指導員らしきが羅門と円気を見つけては、挨拶に駆けつけるのだった。

「ラモンさんは此処の顔なんっすね」フリンは感心している。

「此処は第二の故郷なんだ」羅門は懐かしそうだ。

「今回、此処に来たのはお前たちの引率だけで無ぐ、俺自身の旅立ちのためでもあんだよ」

二十四話・道院生活

道院は全寮制で、院生は東寮のヤマト組と西寮のハタイット組にクラス分けされる。

修也、フリン、ユズキの三人は西寮生に組み分けされ、アミリウスのユズキは特例として、女子の一人部屋に入ることになった。

入院式をかねた晩餐会は、制服の作務衣に黒マントを羽織った新入生および在院生合わせて百四十人強と、院長以下教職者、父兄、引率者が一同に会して行われた。

食事は肉魚無しで乳製品ＯＫの準精進料理であったが、それなりに贅を尽くしたものだ。

道院生は発酵乳と果汁、大人たちは猿酒（果実発酵酒）と濁り酒で乾杯し、大いに盛り上がる。

式次第は概ね教職員と道院生、それから引率者の自己紹介に当てられた。

修也が立つと、「ラ・オダイ！」や「ライオン！」の声が飛び交う。

そして、圧巻はユズキ自らのアミリウス宣言である。会場のどよめきは止まず、指導員が大声で再三たしなめるほどだった。

修学道院の日々のカリキュラムは週のうち六日、夜明けから日没まで智学、識学、行学、霊学、催眠学、その他に作務（生活労働）が義務づけられていた。

羅門は道院に三週間滞在し、エンキと交代で職を辞した亀井三郎なる能力者と共に旅立つのだが、修也たちにとっては何もかもが真新しく、息つく暇がないほどの目まぐるしさだった。

修也、フリン、ユズキと、麻耶の四人は羅門たちを郊外まで見送る。

羅門は一人一人と抱擁し別れを告げた。

「ボン　ヴォヤージュ！（良い航海を）」

羅門と三郎が水境高原の彼方に消えると、四人は四様に、夫々の感慨を胸に帰路を歩んでいた。

「島流しにされたような気分だ」

フリンが誰ともなく独り言のように話す。

「ここは毎日が変過ぎる。朝早くから働かされ、飯も不味い。その上、やってる意味が全く解らねえときた。

朝食に飲まされる山羊の発酵乳入りの薬草果汁とか言うのにも参る。もういい加減、牛肉と銀シャリぐらい食いてえよ」

ユズキが笑った。

「日と共に起きては眠り、自然に身を委ね、仲間たちと、好きな修行と勉強をして一日を過ごす。

皆優しいし、食事も美味しいし、言うこと無し。日々新しく心が拓いて行くって最高」

「絶対変だ！アースル・カタカム（遺伝子源語）とか、死語のラテン語やアルタイ語、それに、二進法、十二進法や六十進法やインド算数等。

それに、あの行学って、おかしいったらありゃしねえ。意味不明

の歌早読み、算盤計算・暗記、主題のないお絵かき。それから、祝詞を上げながらの目が回りそうな駒踊り。頭がくらくらしてパーになりそうだったぜ。
蝋燭瞑想も変といえば変だし。先輩なんてこの寒さに、冷い滝に打たれるんだぜ。あんな事をやらされたら泣きが入って、笑っちゃうしかなかっぺよ」

「フリンは軟弱なんだよ」
「オトコ・オンナに言われたかねえって」
ユズキの打つような仕草に追われて、フリンは頭を抱えて逃げ回った。

一騒ぎするとユズキは霧に霞む山の辺を振り返った。
「羅門さん、行っちゃったね」

しんみりするユズキに、修也は元気つけるように言った。
「大丈夫！僕らが何時も一緒だがら」

「僕らじゃなくて、僕がって、言いたいんだっぺ？」
と、フリンがからかう。

ユズキがフリンを小突いた。
「良いじゃない！ライオンは私のナイトなんだから。私、見かけよりずっと臆病なんだぜ」

フリンは節をつけて口ずさむ。
「ユズキは羅門に恋焦がれ……ライオン小僧はユズキに恋をするう……」

＊　＊　＊

雪が解けて春が訪れると、高太石山の麓は香り立つ色とりどりの花々に埋められる。

修学道院の修行は厳しく、個人の進展具合により授業内容も週単位に個別編成されていく。

取り分け、ユズキの勉学と修行への打ち込みは尋常ではなく、揺ぎ無い直向さは時として狂気を帯びてさえ見えた。

数ヶ月も過ぎると、ユズキの超天才ぶりは道院レベルを超え、もはや伝説の域に達していた。

修也は、追従を許さぬ厳しいユズキの修行に歯を喰いしばって食らいつき必死に併走しようともがいていた。

（ユズキと同じ世界を共有していたい！）

それはライオン少年の道院生活における執念の目標と化していた。

元々ユズキは、抜きんでて能力が発達しており、その類まれな才能に加えて、特異な生い立ちと経験、しかも、道を究めようとする強烈なモチベーションがある。

それが故、最初の出発地点からステージの異なる相手に張り合って行こうなどと、所詮は無茶な夢だった。

とは言いながらも、修也は如何なる荒行にもユズキが行うといえば、躊躇無しに修也も志願する。

たとえレベルを超えていようが、危険であろうが断固として挑戦する。

一旦、決めたことは他人が何と言おうと必ずやり遂げようとするのは良くも悪くも修也の性格である。
修也の執念の努力は脳力の爆発的開放と発達をもたらしていたが、精神は限界線に達しており、それが体調のバランスに影響を与え、常時軽い発熱状態にあった。

健康指導の円気が度々休養を指示したにも拘らず、寧ろ積極的に怯むことなく修行に邁進しようとするのは鬼気迫るものがあった。

そして、無理の積み重ねが思わぬ事故を誘発する。

その日は朝から、微熱に伴う軽度の頭痛があり、修也には珍しく作務や智学の記憶訓練に集中力を欠いていた。
午前の授業後、ぼんやりして椅子に座っている修也に、麻耶を伴ったユズキが心配気に話しかける。
「無理しすぎなんじゃない？」
「何だか、気が抜けちゃうんだ」
「そういう日は温泉に入って昼寝が一番。午後は休みなよ」
ユズキは阿武乱院長の朝礼時の言葉を引用した。
「疲れたら休め。彼等もそう遠くは行かない」

修也は気だるそうだ。

「ライオンの午後の授業は？」
「格闘術」
「兄さの授業なんだ」寡黙の摩耶が微笑んだ。
「そう。僕の好きな授業だ」
修也と麻耶の二人は柔術修行心得を口を合わせて唱える。
「桃栗三年柿八年、目突き三年金的五年、常在戦場」

呆れたように肩をすくめて行きかけたユズキは、ふっと立ち止まり再び戻って来て言った。
「休みなよ。嫌な予感がする」
修也は何時にもなく執つこく真剣なユズキに、気圧されたように「分がった」と、頷いた。
講堂を出際にユズキは再び振り向き、大声で叫んだ。
「きっとだよ！」
午後、頭痛の止んだ修也は格闘術授業に参加する。
格闘実技は、道院象徴の巨木銀杏が鎮座する丘下の院庭で行われた。
空はどんよりとして今にも降り出しそうであり、遥かに遠雷の響きを聞く。
微熱の修也には湿った微風が存外に心地よく、稽古の流れる汗と共に、体がふわふわと浮くように感じていた。
約束組み手のために二人セットになり、互いに定められた攻撃と受け技の反復を行う。
組み手のパートナーはフリンだった。
組み手課題は、相手の上段突きを手で捌きながらもう一方の手の裏指を目潰しに攻め、胴タックルに入る。
フリンがひそひそと話す。
「大丈夫か？ライオン、顔が赤い。ユズキが心配してたぜ」
「ユズキは心配し過ぎなんだ」
円気師範は気合を入れる。
「集中せえ！動きを気配で感じるんだ！」

修也が突きを誘おうと身を乗り出した時、対手フリンの背面に春雷の閃光が走った。
一瞬、気がそれた修也は棒立ちになり、フリンからの上段突きを捌くことなく顔面に直撃され吹っ飛んだ。

「何をボヤっとしとる！」
円気の怒声が飛んだ。

「稲妻に気をとられました」
修也は強がるように、上気した顔でふらりと立ち上がった。

「止め止め！口から血が出とる。もういいから部屋に帰って休んどれ！」

エンキの指示に対し、修也は渋々返事をした。
「ちょっとの間、大銀杏の木蔭から見学させて下さい。それから部屋に帰ります」

二十五話・大銀杏の伝説・上

直径三間もあろう銀杏の巨樹は氷河に削られた断崖の縁上に在った。

過去の雷撃のせいもあって根元は複雑な瘤状で、一部がまるで背もたれ椅子のように座りやすくなっている。

顔の痛みも治まり、微風を感じながら新緑の木陰にもたれていると、全身に微熱時特有の疲労感が広がり始めた。

眼下の訓練風景が現実味のない蜃気楼のように見えてくる。

（雨が近い）

銀杏の葉風に伴って、雨蛙と虫の音が気だるい微睡みに誘う。

大樹の陰に微かな気配を感じ，修也は身を起こした。

巨樹の裏に回ると、純白の薄絹を纏う臈たけた女性が樹の太根に蹲っている。

透けるように白い肌、真紅に染め上げられた長い髪は道院専属の外国語関係者であろうか。

「如何したんですか？」　修也は声をかけた。

女は吃驚したように身を起こし、深緑の瞳でまじまじと修也を見た。

「貴方は？」
「低学年生の牧野修也ですが……」
立ち上がり、瞬きもしないで逸らさず見つめる女性の視線に、修也はどぎまぎする。

長身の女は屈むように近づいて、紅水晶勾玉のネックレスを認めると、張り裂けんばかりに目を見開いた。
「これは火炎珠！様相を変えているけど、貴方はイサリね！」

「僕は牧野修也で、イサリと言う人じゃない！」
修也は否定するが、興奮の態の女は気に留める様子もなく、大空に手を広げて叫んだ。
「大いなる主よ、感謝します！最後の最後、イサリに会えるなんて！」

そして息が止まるほど、女は少年を抱き締めた。
常軌を逸した女の言動、修也は金縛りに身体を動かせない。

修也は、嵐のような記憶の渦に巻き込まれていた。

＊　＊　＊

眼前に広がる大パノラマ。
イサリは三十三の部落国家を統括するコウタン部族連合国の若き指導者である。

コウタンは物作りの民、天界由来の血筋を標榜する誇り高き種族だ。

王都・風の谷の中央に鎮座する銀杏の丘の麓に建つ壮大な高床式の宮殿。

イサリは、数日前に婚姻したコウタン女王（一年前に戦死した部族王の王妃）のギンゴットと同衾していた。

「祝言を終えたばかりなのに出兵要請、何てティヤマト（スメル族）は無粋なんでしょう。長の貴方が直接に出向く必要があるのかしら？」

若き指導者は妻に告げる。

「我とて貴女を、一夜足りとて独り寝させたくはないが、ティヤマト・コウタン連合、特にコウタンとっては部族存続を問われる正念場なのです」

ギンゴットは逞しい胸に顔を埋めて囁く。

「凱旋したら、貴方の王位就任式をしなくちゃ。あの可愛い腕白坊やがこんなにも逞しくなって、私を抱いているなんて夢のようだわ」

イサリは顔を紅潮させた。

「並み居る候補者の中から、最若年の我を選んでくれたのは感激の極みだった」

女王は愛おしそうに微笑む。

「まさか、イサリが後継の伴侶選択に名乗りを上げてくれるなんて！王位獲得のためとは言え、我が妹背として立つとは信じられなかった」

「我が申し込んだ真の理由は、王位ではなく、幼い時から憧れて

いた貴女こそが欲しいものでした。
しかし、誰しもがギンゴットは夜ノ森候・スエツギ（ダルシマ王の弟）殿を選ぶと思っていた」

ギンゴットは嫌そうに頭を振った。
「スエツギは好きになれない。ダルシマ在位の時から泥棒犬のように彼は私へ色目を使っていた。それに、戦場でスエツギが臆病風に吹かれなければ王は死ぬことはなかったわ。
……もし私が本当に欲しければ、私が指名した貴方に剣を持って挑むべきよ。
位から言っても、部族のしきたりではそれが許されている。スエツギは臆病の上に卑怯者よ」

イサリはギンゴットをかき抱いて告げる。
「先王ダルシマは比類なく偉大であったが、唯一つ為せぬことがあった。それは聖なる血を継ぐギンゴット妃に子供を生せなかったこと。
我はこの若く漲る力に賭けて、必ずや我等が女王に世継ぎを受けさせよう」

銀杏の丘、はん祭のため屠られた野鹿を焼く香りが充満する幕屋の内、神輿を前にイサリは跪いていた。

厳かに大巫女ギンゴットの詔が降りる。
出陣式を終えるや、イサリはコウタン全軍に伝令召集をかけ、風の谷の王軍三千を率いて出陣した。

出発の際、女王を抱擁してイサリは約束する。
「我が妹背にして敬愛する女王陛下、帰還する時、我は全ミシャセを貴方に捧げる。

そして、白い小人たち（クーズ族）と刺青の蛮族（ハッタイト・トミ）は、この地から一掃されるだろう」

ギンゴットは、身に着けているスメラの炎紅玉石勾玉を若き夫の首に掛ける。

「これは勇者を護る神器。私は何時も貴方と共にいる」

そして、コウタン象徴の巨大銀杏を指差した。

「勝利の日まで、大銀杏と共に。御無事の帰還を！」

若き指導者は愛馬シロオロチの上から告げた。

「我を熱く思い、孤閨を保て。ホーダバ（暫しの別れ）、ギンゴット！」

「ホーダバ、私のイサリ！」

壮行の大太鼓は耳を聾するばかりに鳴り響く。

コウタン、ティヤマトが合流の地は風の谷部落から二十里の行程、耶麻の海（現猪苗代湖）の畔・翁澤だ。

各所のコウタン部族はイサリの出陣の命に従い次々と雪だるま式に本隊へ加わっていき、一昼夜後のコウタン支配地を抜ける時には既に総数三万五千を超えていた。

コウタンの勇猛を誇る主力の重装長槍隊に加え、二千を超える騎馬、獰猛で名高い訓練狼群の夥しさ、コウタン族独特の伝統火気部隊、特殊工具隊の変化にとんだ編成であり、行軍は悠揚迫らざる勢いだ。

高揚した陣の中で引きも切らない斥候の報告を受けながら、イサリは漠然とした不安を覚えている。

スエツギの夜ノ森部落連合軍五千が未だ合流せず、連絡文で一言

【止むを得ぬ事情で二日遅れる。鬼生蛇の谷にて我らを待たれたし】と、あった。

遅参通告に、憤懣やる方ない若き指導者はスエツギの伝令へ申し渡した。

「夜ノ森がため、我らコウタン全軍は鬼生蛇の谷にて一日だけ待つ。万難を排し参陣せよ。さもなくば、叔父上と言えど処罰避けがたし」

初戦は夜ノ森軍抜きに行われた。

鬼生蛇の谷に至る行程にクーズが護る唯一の砦・蒼石城があり、既に内応の凋落済みだった。

戦闘が始まるやイサリはコウタンの火（地下から掘り出されて精製した発火性の油とゼリー状の麻油脂を包んだ、まくわ瓜大の布袋）を、組み立て式大投擲器で間断なく城内に投げ込み、一気に粉砕した。

コウタン軍は、噴煙を後に河の流れのように鬼生蛇の谷に向かって進軍する。

鬼生蛇の谷はヤマトの合流地点翁澤に向かう途中、白沢と西田の山並みに挟まれた平地があり、大人数が野営するのには格好の地だ。

山間の霧の漂う狭山道に入り始めた。

首に掛けられた炎紅玉石勾玉が熱を帯びている。

前方の山間から朱鷺と山鳥の群れが一斉に飛び立つ時、イサリの研ぎ澄まされた勘に言い知れない不安が過ぎった。

イサリは全軍に停止と戦闘配置の命令を下した。

コウタンの誇る特殊戦闘斥候を四方八方に発し、忙しなく次々と発令する。

「法螺を鳴らし、陣鼓を打て！全兵士は進軍歌を唱えよ！」

やがて、斥候からもたらされた情報は戦慄すべき状況だった。
野営予定地の鬼生蛇の谷を挟む南北の山には約一万づつのクーズ兵が取り囲むように潜んでおり、殲滅すべく今や遅しとコウタン軍の到着を待ち構えていると。
その上、後方約十里の彼方には退路を断つかに、忽然とウミサチノ夜の森部落連合と帯同するクーズの軍勢一万四千強が迫っている。
コウタン諜報隊の裏をかく隠密作戦。スエツギとクーズの罠は恐るべきものだった。

イサリは直ちに特殊斥候による敵の情報網の分断を指令し、コウタン軍を五手に分けた。
南の白沢山を攻めるイサリ直接指揮の一万一千の主力と北の西田山を攻める六千の別働隊、そのまま鬼生蛇の谷に直進する囮とも言える二千の騎馬隊とこのまま待機する戦闘狼群、そして、後方から迫るスエツギ・クーズ連合の進軍を阻むための工具隊と特殊斥候隊。

百戦錬磨のコウタン軍将校は、イサリの意図を即座に理解し迅速に動いた。

（山岳戦を鉱山堀の山岳民族クーズに挑むのは生半じゃない。
しかも一万四千の別働隊が鬼生蛇の谷に到着する前にけりをつけねばならない）

濃霧の中、部隊は密やかに左右の森に消えて行く。
鬼生蛇に半里と迫る時、旗を立て、中央道を悠揚迫らざる趣で行軍するのは戦闘狼群と騎馬隊を残すのみとなっていた。

更に、その中から八百づつに編成された囮の騎馬隊が次第に速度

をあげ、大袈裟に法螺・太鼓を鳴らし、旗を振りながら狂ったように隘路を走る。
そして、鬼生蛇の谷に達するや喚声をあげ、一斉に両側の山に潜んでいるクーズに誘いの火矢と鳴り矢をここぞと射かけた。

堪らず炙り出されるクーズは雨霰の矢を両側から射かけると同時に、仕掛けてあったクーズの鉱山用兵器・雷丸を谷の至る所で連続的に爆発させた。
崩れたつコウタン軍へ、クーズは山降ろしに両側の山から包み込むように攻撃を始める。

時は今！クーズの背部に満を持していたコウタン軍は、コウタンの火を一気に火炎の嵐にぶち込み、間髪を入れず雄叫びをあげて攻撃を敢行した。

突如、降って湧いた激烈な攻撃に、クーズは混乱状態となった。
特に南側は殆んど抵抗らしい抵抗も出来ず、算を乱して潰走する。

「勝ったぞ！勝ったぞ！殺せ！殺せ！」
全軍が叫び合唱し、息もつかせず追撃の手を緩めない。
南の白沢山を下り、谷下の道路の方へ逃走するクーズは待ち構えていた戦闘獣の群に襲われる。

「勝ったぞ！勝ったぞ！殺せ！殺せ！」

兵士一人一人の呪文のような叫びの合唱は狂熱的な音律を作り、喚声と盾を叩く音は山野天地に満ちた。
そして、南軍は奔流のように谷を越え、北の西田山まで一気に攻め上って敵を狭撃し、壊乱・掃討したのだ。

当に絵に描いたような勝利だ。
夜ノ森のスエツギ軍とクーズの連合一万九千が噴煙さめやらぬ戦場に辿り着いた時、コウタン軍は既に武器収集を終えて、勝利の歌を唱和しながら狭山道入り口に万全の構えで待機していた。

イサリは通告する。
【卑法にも罠にかけんと謀ったクーズ軍は我らの力の前に既に殲滅されている。
貴軍は直ちに降伏して我らに合流せよ！しからずんば裏切り者の兵士のみならず、その一族郎党に至るまで誅殺あるのみ】

折り返すように対峙する夜ノ森・クーズ連合軍より返書があった。
それは勝利の余韻覚めやらぬコウタン部落軍を心胆寒からしめる内容だった。

【イサリ及びコウタン軍に告ぐ。明朝までに恭順せよ。
降伏するならば、我が軍は状況を鑑み、一切のわだかまりを捨てて貴軍を友軍として迎える用意あり。
我が盟友トミ・ハッタイトは翁澤にてティヤマトを完膚無きほどに打ち破り、なおかつ貴軍を挟撃すべく現在鬼生蛇の谷に進軍中である。
また、我がスエツギ夜の森・スクナ（クーズ）連合軍は諸君の留守中に全コウタン部落を制圧せり。
ギンゴット女王はじめ貴君たちの父母、妻子は自家薬籠中にある。
抵抗するならば貴君たちのみならず、人質全員の命は亡き者と覚悟されたし。】

返書には見覚えのあるギンゴットの髪飾りが添えられている。

盟友ティヤマトの敗北。

スエツギの裏切りによるコウタン部落の制圧。
そしてギンゴット女王が自国で幽閉になった情報は忽ちコウタン全軍に知れ渡り、兵士たちの間に深刻な動揺をもたらした。

二十六話・大銀杏の伝説・中

遡ること一日。イサリたちの出陣を見送った後、風の谷部落に騎馬隊の一群が現れた。
緑地に車輪のコウタン王旗を立て門前に叫ぶ。
「王都・風の谷の守護をイサリ殿下より命ぜられ、取って返した。ご開門申す！」

騎馬隊が入城すると、黒マントの隊長らしきがギンゴット妃への目通りを求めた。

「お久しゅう。陛下は益々お美しい」
マントを脱いだ髭ずらの顔にギンゴットは驚き、立ち上がった。
「夜ノ森候。どうして貴方が此処に？」

スエツギは告げる。
「コウタン夜ノ森とクーズの連合軍は、ただ今を持ってコウタン王都・風の谷部落を支配下に置いたのです」

扉を破るように血まみれの護衛兵士が転がり込んできた。
「陛下、大変です！寝返った夜ノ森軍とクーズの兵士が・・！」

スエツギは兵士に歩み寄り、抜く手も見せず首を斬った。
そして、室外に引き出される血塗れの死体を省みることなく、平然と話し続ける。

「斯く言う訳で、王都とギンゴット陛下の命運は我が手の内となったのです」

夜ノ森の裏切りに女王は愕然として、玉座から立ち上がった。

「王弟が裏切るなんて！恥を知りなさい！」

「お間抜けな守備を棚に上げて、裏切り者呼ばわりは心外ですな。寧ろ、部族の魂をティヤマトのスメルに売った先王のダルシマ、貴女の若い色男こそ裏切り者の名に値する」

スエツギは一緒に入場してきた、青白い小柄な軽鎧少年とひそひそと話していたが、大きく頷いてギンゴットを見た。

「コウタンと同盟のティヤマト軍は、ハッタイト・トミの待ち伏せ攻撃に撃退された。その上、貴女の色男が我らの仕掛けにかかりそうなので、今から一捻りして来ます。

今度は陛下の色男の生首を肴に酒宴でお会いすることになる」

スエツギは玉座に上がり、ギンゴットの髪飾りを引き抜いて、それに接吻した。

「その時に、改めて婚姻を申し込む。念願の陛下をかき抱き、我が胸の下で悦楽に鳴かすのが楽しみですな」

厚顔無恥な亡き夫の弟が申し出にギンゴットは答えた。

「恥知らずの醜悪な申し出を受けるぐらいなら死んだ方がましだわ！」

憎悪を滲らせたギンゴットの即答に、スエツギは鼻白んだように首を振った。

「もし断れば、貴女を敵の頭目としてクーズに引き渡さざるを得ない」

スエツギが退出した後も、ギンゴットは呆然自失としていた。
部屋に残っている兵士の中から先ほどスエツギと話していた少年のクーズが進み出て、ギンゴットに話しかける。
「差し出がましいようですが、陛下は夜の森候の申し出を受けられた方がよろしいと思います。
陛下が我らスクナ（クーズ族）に引き渡しになれば、征服された首長に施行される、晒しの刑になります。それは受刑する者にとって、過酷この上無いものです」

ギンゴットは少年を見た。年の頃は十四・五ぐらいであろうか。
「貴方は？」
「陛下の監視役兼、占領区守備を仰せつかったスクナ（クーズ）のシャマイ王子です」
「王子？」
「アラハーと呼んで下さい。王子と言っても先王イワオシワケの二十八番目の王子ですが」
と、少年は顔を紅潮させた。

シャマイは晒しの刑の詳細を告げる。
「去る三年前まで、我らと蝦夷地の雄・エミシは厳しい敵対関係にあり、かの有名なトーワの丘の戦いにおける大勝利で我らは今の地を不動の物としたのですが、我はその時初めて捕虜になったエミシの酋長が晒しの刑にされるのを見ました。
酋長の身ぐるみは全て剥がれて全裸にされ、首を皮ひもで狗のように繋がれて檻に入れられました。
そして見世物にするため各部落を一糸纏わぬ素裸のまま何日もたらい回しにされ、十分な辱めを受けた果てに広場で吊るされたので

す。
嘗ての偉大な酋長は死ぬまで布切れ一つですら身に纏うことが許されなかった」
「女でも、その刑を受けるのかしら？」ギンゴットの声は引き攣っている。
「晒しの刑は敗者に辱めを与え、勝利の喜びを得るお祭りなのです」
シャマイは話し続けた。
「女はもっと悲惨です。三年前、美貌を誇るハタイットの支族ツボケ女王をさらしの刑にした時。
王衣を剥ぎ取られ、素っ裸にされている彼女を獣のように皮ひもで繋いでそのまま国中を引き回し、挙句の果て、命と引き換えに希望するスクナの男全てと、広場にあつらえた舞台の上での交合（まぐあい）を強要されたのです。
そして美貌が故、引きも切らず殺到する志願者たちを相手に勝利の祝いが終わるまで三日三晩にわたる輪姦の舞台が続けられた。
それは女王の誇りも何もない、全くの卑猥な見世物でしかない。
しかも最後の一人のまぐわいを終えると、そのまま全裸で皆の前に立たされ、鞭打たれ、女奴隷としての競りにかけられたのです」
「そんな……死んだ方がましだわ」
「だが、限界を超える屈辱を受け続けると、どんな形であれ生きたいと思うのが人の常。
ましてスクナに伝わる催淫の魔薬ハンツンバを呑まされると、鉄のように堅い意志を持つ乙女ですら、発情する雌犬のごとくなってしまう」
少年王子は囚われの女王を見つめた。

「美貌こそが禍となるのです。我の母は嘗て晒しの刑を受けたアラハバキ女王です。
競売の上、イワオシワケ王に奴隷妾として落札されたのです」

＊　＊　＊

その夜、ギンゴットは生々しい夢を見た。
スエツギを拒否するや、直ちにギンゴットはクーズに引き渡された。
会議の中央には変わり果てたイサリがさらし首になって置かれている。

泣き崩れるギンゴットに晒しの刑が言い渡された。
誇り高き麗人が一切を剥ぎ取られ、透けるような白い体が露になると、全員が手を叩いて戦勝の獲物に歓声を上げる。
皮ひもに繋がれた首輪が掛けられ、手で体を隠したり、僅かの抵抗にも容赦ない鞭が飛んだ。

部落中を引き回された後、観客席に一段高く設えてある舞台に立ち尽くす。
日没と同時に燈されたクーズの雷火は真昼のように舞台を照らし出し、笛太鼓は耳を聾するばかりだ。

下卑た小男が、鞭を鳴らしながら大きな濁声で舞台から見世物小屋の呼び込みのような口上。

「スクナの勇士たちよ！奇跡の肉体を隠すことなく誇示している真紅の髪の麗人は、天下にその美貌を轟かしたコウタンのギンゴット女王である。
この度の戦に利あらず、図らずも我が軍門に降った。そして、我が盟友・夜ノ森候のたっての結婚申し込みを断り、敢然と晒しの刑を受けたのである。
今宵はコウタンの存続および己が命と引き換えに偉大なるスクナの勇士たちとのまぐあいを承諾した。
我と思うものは勇を持って名乗り出られたし。そして我らが獲物にスクナの偉大さを知らしめよ。
女王は既に媚薬ハンツンバを飲んでおり、志願する者全てとまぐわう用意がある」

ギンゴットは自らの肉を求めて出番を待っている犇めき合うクーズの列を見た。
口上が終わるや、拍手、卑猥な野次と嘲笑、笛太鼓に導かれて、次から次と襲いかかる欲望の小人たち。

ギンゴットは自らの絶叫に目覚めた。
叫び声に兵たちとシャマイが寝所に駆けつける。
王子は幽閉の貴婦人が取り乱しているのを見るや、直ちに兵たちを退がらせた。

「夢を見たわ。恐ろしい夢」
「陛下、心静かに。運命は神の御手にあります」少年は慰めるように震える手を取った。

イサリは作戦会議の卓上に夜の森クーズ連合の勧告文を広げ、将

たちに問う。
「戦うか、降伏するか？添えてある女王ギンゴットの髪飾りはまさしく本物であり、陛下はもとより留守部落は裏切り者共の手の内にあるのは疑うべくもない。
スエツギは卑怯な愚か者ではあるが、自らの欲望ためには同族であろうが身内であろうが必要があらば躊躇なく殺せる。
現況は前門の虎（夜ノ森コウタン・クーズ連合）後門の狼（トミ・ハッタイト）であり、我の首を取りスエツギ・クーズ連合に降伏すれば、諸君の安全と辛うじての面目が立ち、女王と家族の命も助かるかもしれん」

イサリの問いを遮るように、筆頭参謀である女王弟のムサビ将軍が怒気を持って叫んだ。
「何をぬかす！我らコウタンは誇り高き専制王国であろうが。女王陛下が若造の御主をあえて良人として選び、先王の後継者として指名した時から、我らの運命は委ねられておる。降伏するも戦うも我らはお主に従うまで」

イサリは発言を是とし、直ちに会議を解散した。
国の進退を委ねられた若き指導者と参謀将軍は陣屋に相対して座したままである。

イサリは立ち上がり、周りを歩む。
「先ず我は将軍へこれまでの幾多の支援に心からの感謝の意を表したい。特にダルシマ王の後継に我を推してくれたことは身に余る感激であった」

「何の、ギンゴットが幸せになって欲しいと思うのは弟としては当然じゃ。
それに、お主にはコウタンの指導者としての才がある。今回の鮮やかな勝利はそれを証明した」

「知るとおり、我は四尾川に流されていた葦籠の捨て子であった。それをギンゴット皇女が見つけ、養子として育成してくれた。
海のものとも山のものとも知らない孤児を王族の一員として迎えてくれた」

「その捨て子が、今やコウタン部族連合王国の指導者だ」
イサリは大きな声で叫んだ。
「大恩あるコウタン国とギンゴット女王陛下に報いたい。そのためには我が命、我が誇り等、捨てるを厭いはしない！」

興奮を御しきれずに、歩き回る姿にムサビは話しかける。
「二十年前、ギンゴットが捨て子を拾い上げて可愛がり、挙句の果てには養子にすると宣言した時、そのあまりの執着振りを危ぶみ、イシュテルの大翁巫女に御伺いをたてることにした。
予言は『祝福されし捨て子は、コウタンを栄光に導き、我ら全部族の救いになるであろう』じゃった」

イサリはムサビを睨みつけ、吐き捨てるように吼えた。
「ならば、その予言を成就させねばならん！」

夕暮れが迫り、春雷が轟く中、夜ノ森コウタン・クーズ軍にイサリ軍からの伝令が届けられた。

【先刻、我がコウタン軍は鬼生蛇の戦いで勝利を得た。
しかしながら、現況を鑑みるに戦局に利あらず、ここに膝を屈して王夫イサリの命と引き換えにスエツギ夜ノ森・クーズ軍に和睦を請う。

コウタンの恭順に同意あらば、直ちにイサリの首を斬って武器を置き、軍旗を下げて貴軍の傘下に入りたし。
上将軍　カワウチ・ムサビ】

降伏文を受け取った夜ノ森コウタン・クーズは文書と状況を合同会議において分析・検討後、誤認なきを確認し、折り返すように返信する。

【委細承知。貴軍の申し出を受けたし。
我らは今回における貴軍の罪を問わず、恩讐を超えて寛容する。
貴軍は直ちにスエツギが旗下に入るべし】

漆黒の闇を時折切り裂く電光を縫って、再度コウタン軍は伝令する。

【ご好意深く感謝する。
一刻後、恭順の証しにコウタン首領イサリの首実検を謹んでお願い奉る。
我ら一同軍旗を降ろし貴軍のご指示を請う】

二十七話・大銀杏の伝説・下

閃光と雷鳴が轟き、一際強い風が上空を舞った。

シャマイはギンゴットにコウタンとクーズ・夜ノ森軍の戦況を告げる。

「辛い報告ですが、イサリ・コウタン軍は降伏しました。イサリ殿の首実検が行われるそうです」

ギンゴットは愕然として、打ち消すように叫んだ。

「嘘！そんなの有り得ない！絶対に信じない！」

「イサリ殿は、コウタンとその家族の安全を引き換えに自刃されたと……」

衝撃のあまり意識を失った女王は，王子の腕に崩れ落ちた。

＊　＊　＊

谷間は夥しい夜ノ森・クーズの軍兵に埋められている。

篝火の中、降伏の使者は白布を捲いた卒塔婆を掲げる弔い兵等と共に断首箱を軍中に搬入した。

広場に備えられた壇上に生首は開帳されるのだ。

首実検にスエツギが歓呼の中に手を振って登壇する。

しかし、開帳の実検首を見た瞬間、スエツギは恐怖に凍りついた。
「イサリじゃねえ！謀られた！これは罠だ！」
偽計が発覚するや、決死の弔い兵は卒塔婆に偽した鞘から剣を抜いて突進する。
突然、決死隊に呼応するかに、潜むコウタンの大喚声が左右の森から湧き起こった。
堰を切ったように火矢とコウタンの火が降り注ぐ。
紅蓮に燃え上がる炎は真昼のように、スエツギは雪崩れ込むコウタンの山野を揺るがす突撃声と、血に飢えた凶獣群の吼え声に慄いた。
ギンゴットの意識は戦場にあった。
雄叫びを上げるイサリと共に、敗走するスエツギとクーズを急追している。
「勝ったぞ！勝ったぞ！殺せ、殺せ！」
コウタン全軍は合唱し、津波のように敵を掃討して行く。
しかし、何と言う運命の悪戯！勝利目前に、騎上で剣を振るうイサリが、クーズの狙い済ました逆襲の一矢に胸喉元を射抜かれ落馬するのだ。
ギンゴットは、イサリの胸喉元を抉る矢面に身を挺して防ごうとするが、矢は幻体を通り抜けて突き刺さる。
幻想の中、落馬は幾度となく繰り返され、ギンゴットの有りとあ

らゆる試みも空しく、非情な矢は鎧を突き抜けて胸喉元に突き刺さった。
血を吐くような祈りの叫び！
「神よ、我が命に代えて、イサリの命を救いたまえ！」

＊　＊　＊

ギンゴットは、シャマイ王子に見守られて寝具の上にいた。
「よかった。一時は如何なるかと……」
「辛く悲しい夢を見ていたわ」
囚われの貴婦人と監視役の少年王子には、何時の間にか盟友と言うべきか、親子あるいは恋人とも呼ぶべき不思議な感情の交流が生じていた。
少年が女王の寝所を辞した時、降り始めた雷雨は天上の桶をひっくり返したような豪雨になっている。

激しく扉を叩く伝令の声にシャマイ王子は目覚めた。
戦況は一転して、クーズにとって悲惨な敗戦の状況にあり、コウタンもまたイサリが矢傷に倒れたとのことであった。
シャマイが状況を知らせるべくギンゴットの寝室に駆けつけると、影も形も無く蛻の殻になっていた。
等身大の銅版鏡が隠し扉になっており、微かな風が灯火を揺らしている。
巧妙に作られた脱出口だ。

シャマイは宮殿の内庭に走り出て叫んだ。
「馬を回せ！」
唯一騎、内門を潜り抜けて宮殿の外に出て、部落の中央部にある銀杏の半丘に馳せる。
闇の中、連続的に閃く閃光に照らし出されて、ギンゴットが大銀杏の周りを舞う白い蝶のように浮かび上がった。
一際高く屹立する銀杏の巨木の辺りは、落雷の危険域である。
間近の雷撃に乗馬を跳ね上げ、鐙を外した少年王子は巨木の麓にもんどりうって転げ落ちた。
シャマイは落馬を物ともせず、大銀杏にしがみ付くギンゴットに怒鳴った。
「樹から離れて！此処は危険です！」
「我に構わないで！」　全身ずぶ濡れの女王が叫び返す。
問答無用、シャマイは樹の下から引きずり出そうと突進した。
しかしながら、小柄な少年の腕力、細身とは言え雄大な肉体を誇るギンゴットに敵うべくもなく、掴みかかっては振り解かれ、飛びかかっては弾き飛ばされる。
激しい揉み合いに、精根尽き果てた二人は大銀杏の根元に重なるように横たわっていた。
王子は息も絶え絶えに告げる。
「戦況が変わり、我々は風の谷から退却せねばなりません。陛下は凱旋するイサリ殿を迎えねば」
ギンゴットは首を振った。
「イサリと私は生きて会い見えることはない。私はイサリの命と

引き換えに、我が命を捧げるはん蔡の祈りを発した。此処で、私は魂となってイサリを迎えるの！」

閃光と轟音が襲い、丘全体が帯電して異様に輝き始めた。

二人には風雨も雷鳴もなく、ギンゴットはアラハーにイサリの幻影を、アラハーはギンゴットに亡き母の面影を見る。

強烈な電光と耳を劈く爆音が大銀杏を雷撃し、丘全体が落雷に揺らいだ。

暗雲が去り、戦場は満月が煌々と照り渡って真昼のように明るくなった。

夜の森・クーズ軍の散発的な抵抗も消え、コウタン軍による嵐のような掃討はイサリの落馬により、終焉を迎えようとしていた。

幕屋の中、医療団の努力の甲斐あって、イサリは矢毒の高熱と強度の痛みを伴いながらも意識を辛うじて取り戻した。

医療長が告げる。

「矢は殿下の首にあった勾玉に妨げられて僅かに急所を外れていました。もし勾玉がなければ即死だったと思われます」

イサリの負傷後に指揮を執っていたムサビ将軍が駆けつける。

開口一番にムサビは尋ねた。

「指揮は取れるか？」

「……何とか」

イサリが漸う頷くと、将軍は破顔一笑した。

「良かった！わしには凶猛なトミ・ハッタイトとの決戦は荷が重い」

「我等の……損失は？クーズの状況は？」
「我らの損失は前後の戦いを合わせて百名弱。敵の首領とスエッギは捕り逃がしたが、夜ノ森とクーズは壊滅状態で軍の体をなしてない」
ムサビはイサリに要請した。
「無理を承知なんじゃが、直ぐにでも皆にイサリ殿下の無事を見せてやって欲しい。何かと小雀共の囀りが喧しいんでな」
熱と痛みに耐えながら鎧を装備し幕屋を出ると、イサリの護衛兵をはじめ見える限りのコウタン兵が一斉に歓呼の叫びを上げる。
白馬（シロオロチ）に騎乗したイサリは波のように襲う激痛に脂汗を流しながら、拡声器を片手にコウタンの布陣を走りぬけ、大音声で全軍に告げる。
「栄光ある最後の勝利が迫っている」
「ラウーリー（褒め称えよ）コウタン！ラウーリー不死身のイサリ！」
「死に時は明日！命を預けよ！」
「ラウーリー！ラウーリー！」
歓呼の叫びは山野に満ち、果てしなく続く。
幕屋に戻るや、どっと倒れこみ、脂汗を浮かべ息苦しそうに手当てを受けながらムサビに指示する。
「トミ・ハッタイトに和睦の使者を……。暫く眠りたい。文面の方は……ムサビ殿が」
「諾！またしても仕掛けるか」
イサリは頷いた。
「少しでも攻撃を躊躇してくれれば……時間稼ぎになる」

「殿下！殿下！」
従者たちの声に目を開いたシャマイは、松明と月明かりの中、雨上がりに燻る無残に雷撃で引き裂かれた大銀杏を見た。
「目覚めた！」
「何故ここに？」シャマイは歓声を上げる従者に尋ねた。
「逃走したギンゴット女王を追って来て、被雷されたのです」

アラハーは痺れている体を起こした。
「ギンゴット女王は？」
「それが、何処にも見つかりません」

落雷時を目撃した従者が、銀杏の丘における様子を話した。
「何と申し上げたら良いのか、雨と稲光の中、大銀杏の下に殿下と女王を発見した時は、まるで樹の周りがスクナー雷火に照らされるかに淡く輝いていました。
我らが駆けつけようとした時、轟音と閃光が走って、樹は真っ二つに裂けて燃え上がり、裂けた樹の間から、大きく真っ白な蝶が二羽飛び出したのです。
そして、戯れるように崖下に消えて行った……」

＊　＊　＊

明け方、イサリは耐え難い喉元から肩口に抜ける激痛と胸苦しさに目覚めた。
そして寝返りをした時、幕屋の隅に佇む長身の人影を感じギョッとして体を起こす。

女の影。
目を凝らして見るイサリは驚きの声を上げた。
「ギンゴット陛下！何故貴女が此処に？」

ギンゴットはイサリを無言で抱擁する。
するとイサリはかってないほどの夢幻の多幸感に包まれて全身に力が漲って来るのを感じた。
「良くぞ逃げ出して来られた。射抜かれ倒れた瞬間、愛しの陛下を夢見ました」

ギンゴットは悲しげに首を振った。
「愛しの妹背よ、何故悲しげなのですか？」

問いに答えることなく、ギンゴットは寝具に腰掛けたイサリをそのまま制するように手で押さえて幕屋の外にかき消すように消えた。
イサリは追うように外に出る。
ギンゴットの姿はなく、穏やかな風のみがそよいでいた。

まんじりともせず、イサリは果てしない時を幕屋の寝台に腰掛けたまま待ち続けるのだった。

野鶏が朝を告げると、兵士たちのざわめきが風に乗り、戦いに備えて慌しく動き始めるのが感じられた。
朝一番に投薬と貼付薬の治療のために訪れた従軍医療士たちはイサリの戦傷の点検に目を見開き驚愕の声を上げた。
「傷が治っているどころか痕さえありません。熱も消えています」

イサリは医療団と兵士たちに告げた。
「我は明け方にギンゴット女王陛下の思いを受けた。そして、それが奇跡となった」

トミ・ハッタイト迎撃万端の備えが整い終え、三度目の戦闘モードに突入かと思った時、まさしく奇跡がコウタン軍にもたらされた。

ティヤマトの伝令が現れ、政略絡みの狡猾で巧みなスメルミコトにおけるトミの部族王暗殺と、天からの神軍の支援によるハッタイト軍自壊によるテヤマト勝利を告げたのである。

「神軍の支援？」

「天の浮き船が現われ、ティヤマトの吹き鳴らす法螺貝に導かれて光の力をトミの軍に放ったのです」

斥候からも次々とティヤマトの勝利を報告して来る。戦場で失ったものをスメル族は裏工作と、神の力をもって、形勢を逆転したと言うのだ。

眩い正午の太陽の下、イサリは白馬シロオロチに跨り剣を天に翳し、コウタン全軍に高らかに勝利を宣言した。

「我らコウタン女王軍と盟友スメル族・ティヤマトは神のご加護をもって完全に勝利した。我等が皆勝ち鬨を上げよ！」

全軍天地を揺るがす勝ち鬨の叫びを上げ終えると、イサリは大音声で命令を下す。

「ティヤマトと合流のため、神と共に我らが栄光に向かって、進軍する！」

戦場遠く風の谷でクーズとトミ・ハッタイトの敗北を確認したシャマイ王子は直ちに、部落を焼き払うこともせず、一人残らず人質を解放し、風の谷部落守備兵の総員引き上げを命じた。

退却は迅速で鮮やかであり、それが伝説となり、後にコウタン・クーズ和睦の象徴となる。

敗残兵と共に峠を越え、風の谷を返り見るときに王子は吹き降ろす風の中にギンゴットの囁きを聴いた。

「また会う時まで。ホーダバ、アラハー」

二十八話・生と死

何時の間にか降り始めていた雷雨の中に、修也は溢れる涙をそのままにして呆然と立ち尽くしていた。

ギンゴットなる淑女もまた風雨に打たれながら、感動に顔を上気させていた。

「夢であろうか？果てしない時を、この銀杏と共に待ち続けた」

夢と現の狭間を彷徨いつつ修也のイサリは答える。

「我が敬愛する母にして最愛の妹背の旅立ちに、我も」

見つめ合う二人には頬を激しく叩く大粒の雨も、耳を劈く雷鳴も無い。

緑の天蓋のごとく広がる大銀杏の下、小鳥たちの囀りに耳を澄ませている。

頬に触れる微風と降り注ぐ花びら、心擽る命の香り、愛に包まれた旅立ちが迫る。

＊　＊　＊

その日のフリンたちにおける学後作務は大講堂屋内の清掃だった。
突然、打ち破るように東口の扉が開き、麻耶を従えたユズキが血相を変えて、
「ライオンは居るか！」
と大声で走り込んで来た。

その眦を上げた剣幕に気圧されるように、班長のフリンは不審げに答える。
「此処にはいねえよ。宿舎で寝てんでねえの」

ユズキの金切り声は悲鳴に近くなっていた。
「何処にもいない！ライオンが危ない！何やってる、馬鹿フリン！」

激しい怒気を受け、叩かれるように感応したフリンは目の色を変えて叫んだ。
「銀杏の丘、大銀杏の下！」
居合わせた皆が呆気にとられている中、フリンは弾丸のように豪雨の中に飛び出した。

耳を劈くかに轟く雷鳴。
ズブ濡れになりながらも院庭の銀杏の丘に走る。

何時の間にかフリンは小柄な青白い少年となっている。
フリンはクーズの少年王子シャマイだ。
大銀杏の根元にギンゴット女王とイサリが互いの手を握り合いながら空を見上げている。

間断ない眩い電光と雷鳴は巨樹への落雷が間近に迫っているのが感じられた。

輝ける光明に踏み入る時、其処は夢のような桃源の世界。

花々が咲き乱れ、果物が爛熟し蜜が流れる丘。

「アラハーにも会えるなんて！もう、思い残すことは無い。いざ、旅立たん！」

フリンの少年王子はギンゴットに鋭く言い放った。

「否、行くのは御一人だけ！」

突然、仮想の花園は暗転し、凄まじい風雨が横殴りにフリンを叩いた。

轟く雷鳴は天地を揺るがし、連続的な目の眩む閃光は丘の上の全てを眩く鮮明に浮き上がらせている。

雷が其処まで迫っており、巨樹の真下は極めて危険な状態だ。

びしょ濡れに濡れて見えぬ誰かと手を繋ぐようにし、歓喜の表情を浮かべて天を見上げている修也に突進し、肩を揺すって怒鳴る。

「ライオン！逃げんだ！」

次の瞬間、フリンは信じられない力で振り解かれて放り投げられ、強かに地面に叩きつけられた。

第三の瞳をを爛々と光らせた修也が野太い若者の声で叫んでいる。

「我等を引き離すことは許さん！もう、如何なるものも妨げることは出来ん！」

「樹から離れろ！雷が落ちる！」

フリンは掴みかかって修也を樹から引き離そうと試みるが、再び

フリンは毬のように弾き飛ばされた。
（こな糞！清めたまえ、祓いたまえ！）
強力のフリンは眦を上げて、狂ったように奇声を発し、掴みかかる。
激しい揉み合いから、漸う巨樹から引き離すように修也を投げ飛ばして靠れ込んだ瞬間、雷が凄まじい爆音と共に巨樹を真二つに引き裂いて着電した。
落雷の目も眩む電流光の輝きは巨樹から同心円に、倒れこんでいる二人の後僅かの所まで広がって焼き尽くした。
二つに引き裂かれ噴煙を上げる千年銀杏の巨樹を、二人の少年は呆然と見上げている。
修也はふらりと立ち上がり、野太い声で全身を震わして吼えるように絶叫する。
それは泣いているようでもあり、怒っているようでもあった。
意味不明に怒鳴り、半ば粉砕され燻る巨樹に縋るようにフラフラと歩み寄って行く。
息せき切って慟哭の丘に辿り着いたユズキは、恐怖の切り裂くような悲鳴を上げた。
「駄目エー！」
間髪を置かず第二弾の落雷が巨樹の残り木に着電し、発火する修也は直立して両手を真横に広げたまま十字の状態で数メートルも岩場まで弾き跳んだ。
岩に蛙（ビッキ）の様に叩きつけられた修也は目が反転して白目を剥いている。

抱き寄せたフリンが叫ぶ。
「おお、神様！ライオンが死んじまった！息が止まっちまったよう！」
麻耶がフリンを掻き分けるように突進し、猛然と修也に跳びついて、口を吸っては激しく胸を叩き始めた。
次いで、直ぐさま麻耶と入れ替わるように、駆けつけた円気が人口呼吸と心臓マッサージを継続する。
修也は最初の落雷に、ギンゴット女王が別れの言葉もそのままに、天空の彼方に消え去るのを見た。
第二段の雷の直撃。
全てがスローモーション映像のように流れ行く。
落電流は大銀杏の頂上から眩い輝きを放ちながら根本まで、やがては樹に触れている修也に通電し、打ち上げ花火のように弾き飛ばした。
後ろ向きに両手を開いたまま空中を真っ直ぐに素っ飛び、岩場に激突して手足そして肋骨がバリバリと不快な音を立てて骨折していく。
疼痛も恐れも無く、第三者のように修也は事態を観察している。
奇妙で不思議な感覚。
空中に跳ね上げられ、地面に叩きつけられる瞬間に、人生の全てを走馬灯のように再体験した。
柔らかな光の世界に漂う。
誕生、肌を刺す空気の流れと、騒音の恐怖に絶叫する。
母の乳房、父の出征と永遠の別れ、加奈子や七ちゃんたちとの目

くるめく思い出等々、そして、巡り巡って道院に至る。
はっきりと五感で感じ、泣き、笑い、叫び、怒り、喜び、驚き、苦しみ、ありとあらゆる全てをそのままに再体験した。
それは果てしない時間のようだった。

蜜蜂の羽音を耳に、修也は薄暗い螺旋状のトンネルを吹っ飛んでいる。
そして、曲がりくねったチューブを通り抜け、淡い光の中へ飛び出した。
修也は小降りになった雨の中で救急蘇生を試みるエンキと麻耶を眺めている。
びしょ濡れになり、泥だらけで黒く火傷し、瀕死のジャンクになっている己が肉体に比べ、意識そのものは何の痛みも苦しみも無い。
むしろ爽快で快適ですらあった。

側に立つユズキとフリンに声をかける。
ユズキが振り向いたが、焦点が定まっていない。

先ほどまでの豪雨が嘘のように、柔らかな初夏の日差しが木々の緑を照らし出していた。

「心拍は戻した！」と、エンキが叫ぶ。
「呼吸が戻ったわ」麻耶が告げた。

駆けつけた院生から一斉に歓声が上がる。
「取りあえずの危機は脱したが、緊急の手術が必要。意識が戻るかどうかが問題だえ」
と、エンキは告げた。

血液型・B型の輸血に有志を求めると、我先に同じB型のユズキ

と麻耶、O型のフリンが名乗りを上げる。

他方、浮遊する修也の意識は明確ではっきりしており、しかも思い込むだけで、医療スタッフ、友人等の思考に入り込むのが可能と言う、実に摩訶不思議な状態になっていた。

エンキや他の医師たち、ユズキやフリンの目線と思考が我がことのように感じられる。

全身の機能低下と共に、特に肺に突き刺さった肋骨の除去は困難を極めており、心肺機能の不安定は依然として続いていた。

「こりゃあ、駄目かもしらん」

執刀医の微かな呟きは、巨大な木霊のようにリフレインする。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0283x/

南相馬・大悲山幻想異聞

2011年12月2日01時55分発行